
銃と魔法と眼帯とメイドモノ！

ハモニカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銃 と 魔法 と 眼帯 と メイド モノ ！

【Nコード】

N5890Z

【作者名】

ハモ二カ

【あらすじ】

—— どうも、あたしはファルケン家に仕えるメイド、フランと申します。今日も今日とてお嬢様のお世話に明け暮れる日々を過ごしております。…… はて、大切な事を言わなければいけない気がするのですが、覚えてないので失礼させてもらいます。では——

（ここからは作者が引き継ぎます）この作品は実際の某冒険者育成ゲームとは一切関係ありません。関係ありませんったら！ 大切な事なので2回言いました！ それとキーワードですが、まだ出

てきていないものは「↑」で囲んでおりますので、ご理解ください！
その他、適時キーワードは追加、もしくは変更されますので時々キーワードを見ると何か分かるかも？
一応キーワードは本編で出てきたらカッコを取る予定ですが、忘れていたらご報告くださいませ。

第00話 始まりの夢（前書き）

皆さん、メイドと聞いてまず初めに誰を思い浮かべますか？

作者はロベルタでした。だから銃なのかも……。

これ、ある意味駄目な例ですかね？w

まあ、

始めましょうか！

第00話 始まりの夢

暗い。

目を閉じている訳ではない。

瞬きを試みるが、閉じた時と開いた時の暗さはほとんど変わらない。
い。

ただ、声が聞こえる。

女性の声だ。

酷くノイズがかかっていて、ほとんど聞き取る事も出来ないのだが、
自分に向かって何かを言っているように思える。

声の主に心当たりはない。

いや、思い出せないだけなのだろうか。

物忘れが激しい自分の短所が改めて嫌になる。

記憶が曖昧になるおかげで、大切な事も、何もかも、時が経てば零
れだしてしまう。

大切な人との思い出も。

楽しかった記憶も、悲しかった記憶も、今の自分を形作ったであろう全てを。

闇の中でふとそんな事を考えてしまう。

この自問自答もおそらくこれが初めてではないだろうし、最後になる気もしない。そのうち、こんな事を考えていた事すら忘れてしまうのだから。

悲しい、とは思わない。

いくら大切な思い出も、忘れてしまえば結局有象無象の記憶の中の1つであることに変わりはないのだから。

だが、記憶を共有した者が悲しむ顔は見たくない。

それくらいの感情はある。

声がまた響いてくる。

先ほどより幾分か鮮明になったようだが、それでもその言葉を判別するにはいささかノイズが酷い。

自らの意志は必死に言葉を理解しようとしている。

にも関わらず脳がそれを拒否しているかのようにノイズをかけてしまう。まるで思い出させないようにしているかのようにだ。

——あなたは誰？

声に向かってそんな事を尋ねてみるが、返事はない。

広い部屋で声が反響しているようにも聞こえ、同じ言葉を何度も言っている。

酷く切迫しているように聞こえる

それが何を意味するのか全く理解できずに、ただぼんやりとそれを右の耳から入れて左の耳へと流していく。

——あたしは、誰？

先ほどの問いを思い出して、そんな事を考える。

いや、名前はある。

大切な人から貰った、大切な名前。

埋もれていく記憶の中で、決して失いたくないと心の底から思えるものだ。そしてもちろん、それを与えてくれた人も忘れたくない。

だが、それが仮初めの名に過ぎないのは自分でも分かっている。

生まれて十数年、名無しの権兵衛であつたつもりはない。

つまりは、本名という事だ。

最愛の両親から貰ったであろう自分の本当の名前。

思い出そうにも、そもそも親の顔すら覚えていないのだ、それについて考える事すら滅多にない。

——あたしは……

不意に、声が鮮明になってくる。

——起きて——

「ん……」

少女は目を覚ました。

それほど豪華ではないが、決して貧しくはないベッドの布団の中でもぞもぞと足を引っ張る眠気を振り払ってベッドから脱出すると、窓のカーテンを横に引く。

朝の眩しい日差しが部屋に差し込み、少女は眩しそうに目を細める。

「……妙な夢を見ていたような気が……」

何か、心に引っかかる、そんな夢を見ていたような気がするが、夢の内容は不思議と頭の中に浮かんでこない。

首を傾げながら少女は窓を開け、部屋に朝の涼しい風を招き入れる。

壁掛けの時計に視線をやると、時計の針は丁度5時30分を指していた。

早起きがこの身体に馴染んだのも随分と昔のように思われる。

とはいえ、この時刻に起きなければ仕事が出来ない。

少女は部屋の隅にチヨコンと置かれた机に向かうと、机の上に置かれていた黒い物を手に取る。布のようだが、形が独特だ。中央の幅が広くなっており、隅が著しく細くなっている。

少女はそれを顔の前に持つてくると丁度顔の左半分が隠れるようにそれを押し付け、細くなった部分を頭の後ろに回して慣れた手つきで結んでいく。

鏡を見る必要すらなく、その黒い布、俗に眼帯と呼ばれるものを装

着した少女はベッドの布団を畳んでシーツに出来たしわを出来る限り手で伸ばしておく。

それを終えて少女はようやく着替えを始めた。

少女の身体には不釣り合いな大きさのクローゼットの扉を開くと、そこには数着同じ色、形状の服がかかっていた。少女はあまり考える事もなくそのうちの一着をハンガーごとクローゼットから取り出すとベッドの上に置いてブカブカの寝間着を脱ぎだす。

とてもじゃないが少女の小柄な身体には合っていないところを見るに誰かのお下がりなのかもしれない。

寝間着を脱いで先ほど取り出した服を手早く着ると、そこでようやく少女は鏡の前に行き、全体に不自然なところがないか確認する。

白と黒を基調とした服、フリルが特徴的な白いエプロンと黒い服を組み合わせたような服を鏡越しにしげしげと見つめ、本来とは反対側に折れてしまった部分を指で直していく。

長い茶色のウィッグを少女は自分の本来の髪の色である黒が見えないようにしながら装着、その上から机の引き出しに入っていた白いカチューシャをつける。鏡の前におかれた小さな瓶の中に浮かぶ茶色いコンタクトをぶれずに目に入れ、鏡の前に立つ。

これが少女の仕事服だ。

少女は鏡で最終チェックを済ませると満足げに頷いて少女は部屋の扉へと歩き出す。

ドアノブには革製のベルトが引つかかっている。そしてそのベルトにはホルスターが付いており、黒光りする鉄製の物体がホルスターに収まっている。

少女は扉を開く前にその俗にガンベルトと呼ばれる革製のベルトを服の上から腰に巻きつけるとホルスターから少女の顔ほどもあるうかという巨大な銃を抜く。

黒光りするその銃はどこどころ塗装が剥けているが、手入れ自体は隅々まで行き届いているようだ。回転式の弾倉を開いて中に何も入っていない事を確認し、一度撃鉄を上げて軽く引き金を引く。

金属が金属を叩く甲高い音が響き、撃鉄が正常に動作することを確認する。

少女は30センチはあろうかというその銃をホルスターに戻すとホルスターの横についたポーチを開ける。

中には丁度先ほどの弾倉に収まりそうな大きさの丸い球が無数に入ったケースが収納されていた。中身が空ではない事を確認するとポーチを閉じる。

少女はガンベルトを掴んで思い切り回転させ、ホルスターを丁度背中に戻って前からは見えない位置まで移動させる。

「さて、お仕事お仕事」

少女は1人小さくそう呟くと部屋の扉を開いて廊下へと出ていった。

第00話 始まりの夢（後書き）

はい、どうも、おはこんばんちは、作者のハモニカです。

この度はこの作品、『銃と魔法と眼帯とメイドモノ！』を左クリックして頂きありがとうございます。

ゆっくりと、まったりと、急がず焦らず、二日に一回更新なんて自殺行為はしないよう行きますので、完結までお付き合いして頂ければ幸いです。

『銃と魔法と眼帯とメイドモノ！』、略して『とととモノ！』

始まります！

パクリじゃないです！

読めば分かります、きつとー！（キリッ

それと、誤字脱字含め、感想を頂けるとハライソに昇ってしまうくらいハモニカは喜びますので是非、ご感想を下さい！

ただ、ハモニカはチツキンなので批判的なご感想はかなーりソフトな言い方をお願いします。かなーり効きます、それこそ想定外に。

では！

第01話 メイドの朝は早い(前書き)

とりあえず、言いたい事は第00話の後書きで言ったので、レッツ
ラゴー。

第01話 メイドの朝は早い

「おはよう、フラン」

メイドの朝は早い。

自分が仕える主が起きる数時間前には眠気を地平線の彼方へと吹き飛ばして朝の仕事をこなさなければならない。

「おはようございます、メイド長」

眼帯をした少女、フランが広いダイニングに顔を出すとフランと同じ格好をした女性がテーブルの上を綺麗に磨いていた。

美しい金髪を腰まで伸ばしたこの屋敷のメイド長、メリスは威厳のある表情を変えことなくフランに挨拶をしてきたため、フランは軽く会釈をするとダイニングに隣接した調理場に向かう。

「おはようございます」

調理場はダイニングに隣接しているとはいえ、少々距離がある。もちろん、朝から調理している音などで目を覚まさせないためだ。特にこの時間帯は主と食事の時間を被らせないように早起きしたメイドが朝食を取るために否応なく物音は増えてしまう。

フランは調理場に入ると中にいた男性に声をかける。

男性はフランを一瞥すると小さく頷き、座っていた椅子から立ち上がるとキッチンの前に立った。

男性の名はデックス。

この調理場の王として君臨している。フランがこの屋敷の世話になる前からいるため、彼女は詳しい経歴を知らないが、腕は確かだ。作れない料理はない、とまで噂されているほどで、事実常人が思いつく料理はたいてい作れる。

デックスの調理姿を眺めながらフランは近くにあつた椅子を持ってきてキッチンのスペースがある場所の前に置き、その上に腰かけて朝食を待つことにした。

しばらくしてデックスが皿にハムエッグとサラダを盛り付けてフランの前にやって来た。フランがそれを見て満面の笑みを浮かべると寡黙で無表情なデックスの表情も一瞬緩んだように思える。

デックスはこの屋敷の調理場を1人で切り盛りしている訳だが、主であろうと使用人であろうと分け隔てなく全力を以て調理してくれる事で評判だ。定期的に新作を考案してはその評価をメイドや執事に頼んでいるため、彼らの間ではちょっと得をした気分になれるそうだ。

フランは目の前に置かれたハムエッグと近くに切った状態で積み重ねていたパンを一切れ取って今日の朝食とすることにした。

「では、頂きます」

パンを手を千切って一口大にすると口の中に放り込む。ジャムなど

何もつけずとも素の味で満足できるのも、このデックスの料理の特徴だ。

サラダにフォークを刺そうとした時、調理場の扉が開いてフランと同じメイド服を着た少女が入ってきた。青い空を想起させる青い目と髪が特徴的で、まだどこか幼さが残っているような少女はフランに気が付くと笑いながらその隣に椅子を持って歩いてきた。

「おはよう、フラン」

「おはようございます、クレア」

身長はフランとほとんど変わらない。一応フランよりも年上という事のはずなのだが、童顔のおかげで幼く見えてしまう。

「ナトリ、あたしにも同じのを頼むよ」

ナトリとは、デックスの名字だ。デックス・ナトリ、大抵の者はデックスと呼ぶが、ナトリと呼ぶ者も少なくない。とはいえ、片方しか使わない者の方が珍しく、その時の気分で呼び方はコロコロ変わっている。

デックスはクレアに小さく頷くと再びキッチンに向き合いフライパンに流れるような手つきで油を引いてハムを敷き、卵を落としていく。

「さっきね、ダイニングで姉さんに怒られちゃったよ」

「メイド長に？ 今度は何をしたんですか」

クレアはメイド長であるメリスの妹だ。自分であろうと他人であろうと厳しいメリスも妹にだけは甘いかと思えば、そんな事はなく、むしろ妹であるがゆえに厳しい面もある。

そのため、クレアがメリスに怒られるのは別段珍しい事ではない。

だが、今日のようにそれを話すのは珍しい。

そう思ったフランは食事の手を休めてクレアに顔を向けた。

「それがねえ、『後輩より起きるのが遅いのは先輩として失格だ』、ですって。フラン、明日からあと5分寝坊してえ」

今にも泣きそうな表情をするが、こういう時はたいてい同情を誘っているのだ。特に怒られた原因が目の前にいるのだから、そう言いたくなるのも分らないではない。

「……クレアがあと6分早起きすれば済む話じゃないですか」

何事かと心配してしまった自分と、大事のように文句を言うクレアに呆れながらそう言っていると、クレアが足をバタバタさせながら抗議を始める。

「良いじゃない、フランの仕事は7時からでしょう？　ならそれくらい……あだっ」

クレアの抗議を遮る様に綺麗に拭かれたお玉がクレアの前頭部を軽く叩いた。見ればデックスが皿を持って立っていた。

「ほら、デックスも言ってるでしょう」

「……言ってないよ……」

額を摩り、渋々黙り込んだクレアはパンを頬張ってすぐに笑顔になる。

「ん〜♪ やっぱり焼き立ては美味しいね〜」

数十秒前の顔が嘘のように屈託のない笑顔に戻ったクレアに、フランもホッと溜め息をついて自分の食事に戻る。

「デックスはわざわざあたしたちのためにまで焼き立てのパンを作ってくれるし、本当に他の屋敷の料理人も見習うべきね」

「それはそうですね。まあ、ここ以外をあたしは知らないんですけど」

他を知らなくても、デックスがこれ以上になく出来た男であるのは分かる。黙っていても自分のやるべきことと相手が望むことを合致させるという技を習得しているのだ。これで愛想も良かったらそれこそ完璧な人間になるだろう。

フランは先に来た分、クレアより幾分早く食べ終わった。

これからが本来の仕事であるデックスの手を煩わせるわけにはいかない。なので食事の後片付けはフラン自身がやる。「ごちそう様」とデックスに礼を言って皿とコップ、フォークなどを重ねて流し台へ向かう。

流し台は昨日の夜に水跡1つなく拭かれたままの状態、フランは

少し得をしたような気分になりながら蛇口をひねり、水を出して皿を洗い始める。

さすがに主が使う食器とは分別がされているが、次に誰が使うか分からない食器であるため、いつものように丁寧に、次に使う人が眉を顰めないように丹念に汚れを落としておく。

それが全て一段落した辺りでようやくクレアが食事を終えたが、その時には料理場の時計が6時20分を指そうとしていた。

「クレア、あなたは今日はメイド長と同じシフトだったんじゃないんですか？」

「ほえ？ …………… あ」

「…………… はあ、洗っておきますから言い訳を考えておいた方がいいですよ」

「うわわ、1日2回なんてどんな顔して行けばいいんだよ……………」

今度こそ本当に泣きそうになっている。

さすがにこれには同情する。

メリスはとにかく厳しい。先ほどのクレアのようにちょっとした事から徹底的に教え込まれるため、フランもこの屋敷に来た頃は苦労した。

だが、その分面倒見が良いのも確かで、相手の物覚えが悪いからと言って文句を言ったり、放り投げたりは決してしない。あくまで自

分の仕事は徹底的に仕上げるのが彼女のモットーだ。

今日のシフトではメリスとクレアが朝の掃除当番なのだ。掃除はなるべく早い時間帯に行われ、主が起きてくる頃には埃1つない状況にしておかなければならない。

本来掃除は6時頃から行われる予定なので、クレアも十分間に合う時間帯に起きているはずなのだが、食事にかまけている間に時は無情にも過ぎ去ってしまっていた。

「はわわ……」

情けない声を上げながらクレアは調理場を慌ただしく飛び出していた。

「まったく……」

先輩のはずなのだが、先輩らしい頼もしさの欠片もないクレアにため息をつきながらフランは手早くクレアの皿も洗っていく。

洗った皿は隣のかごに移していき、最後の皿を洗い終わるとタオルで手を拭いて一度時計に視線を向ける。時計は6時45分を指している、フランの仕事が始まる時間が近づいている事を示している。

「……えーと、デックスさん、今日のお嬢様の朝食は？」

デックスに顔を向けると、デックスがキッチンの引き出しから1枚の紙を取り出し、フランに手渡してきた。そこにはフランの求める朝食の献立と使われる材料、さらにはその生産地までが事細やかに書かれている。

フランは書かれている字を目で追いながらそれを頭の中に叩き込んでいく。

「これだけは慣れませんね……」

一通り目を通すと紙を裏返して書かれていた情報を暗記できているかブツブツと呟き始める。何を聞かれても答えられるように覚えていく訳なのだが、生産地などはそう毎日変わるようなものではない。それでも頭に入らないためにフランは毎日その日の献立をなるべく記憶の新しい場所に入れる必要がある。

「ええと、スープのトウモロコシは……ファイ、……フィル、あれ、フィリ？」

そして案の定頭に入っておらず、何とか思い出そうと頭を抱えるがどうしても出てこない。

「……フィリアコフ産」

「そうです、フィリアコフ産です！ ああもう、デックスさん、もっと短い名前の土地から仕入れられないんですか？」

それは無茶だ、という視線だけが返される。

材料の仕入れ先は基本的にデックスが決めている。彼自身が現地に赴き、納得がいく質、量、そして価格であればその場で交渉しているそうだ。

そのため、季節の変わり目になると時折デックスが調理場を空ける

時がある。そう言う場合はメイドと執事で切り盛りするわけだが、デックスと比較して味が落ちてしまう事は回避できない問題だ。デックスの料理の腕に張り合おうとする人間が過去にはいたそうだが、その無双っぷりの前に誰一人として勝利を収める事は出来なかったそうだった。

あのメイド長であるメリスでさえ、勝利は叶わなかったとか。

そのおかげでデックスはこの調理場において絶対的な権力者として君臨している。彼が許さなければ調理場で調理する事すらままならないと言っても過言ではないし、そこまでして調理しても結局は彼と比較され負けるのが見えているこの屋敷の人間はそんな事をしない。

「むう、朝食はまだ覚えやすいはずなんですけど……」

朝食は寝起きという事もあり、さっぱりとしていてあまりたくさん出さない。そのため問題はむしろ夕食である。

それなりの量を出すし、必然的に材料も増え、覚えなければならぬ事が増えていく。朝からこの調子では今日一日苦勞してしまう。

そんな事を考えながらも一度献立と材料の産地が書かれた紙とにらめっこをし始める。

時計の針は6時55分を指そうとしていた。

「はあ、結局全部は頭に入らなかった……」

朝食は基本的にフランたちが食べたものと変わらない。フランたちと違うのは温かいコンスープが付いていることくらいだ。覚えるべき材料にしても、小麦や卵、肉と言った比較的安定した産地を持つものだけだったのだが、それでも小麦の産地を覚えると卵の産地を忘れ、卵の産地を覚えると肉の産地を忘れるという、どうにもならない状況に陥ってしまった。

「お嬢様、トウモロコシの産地だけは聞かないでくださいね……」

最終的に妥協したのはトウモロコシの産地だ。一番最初に覚えたような気もするのだが、そんな事もすでにフランの中では大昔の事になっている。

フランは今この屋敷の実質的な主の寝所へ向かうために廊下を歩いている。朝の日差しが窓から差し込んでおり、心地よい涼しい風がフランの頬を撫でていく。

時間は定刻きっかり、遅すぎず早すぎずと言ったところだ。そして

たとえ遅くなっても廊下を走るような事はしない。

足音を立てず、服が擦れる音すら極力出さないように心がける。

「……はあ」

フランがメイドの基本的な事を守ろうとしているのに、屋敷のどこからクレアの悲鳴が聞こえてくる。大方、メリスに叱られているのだろうが、本当に年上かと疑わせるほどクレアは子供っぽいところを持ち合わせている。

「お、フラン。時間きっかりだな」

目的地である部屋の前にたどり着くと、既にその扉の前には1人の執事が立っていた。背が高く、茶色の髪をオールバックにしているその執事はフランに気が付くと胸ポケットから懐中時計を取り出して時間を確認した。

「すみません、グラントさん。朝の献立が頭に入らなくて」

「ふむ、では私も朝食に付き合おう。分からないことがあればフォローしよう」

わずかに小じわが見えるその執事、グラントは気さくに笑みを浮かべてフランの頭を撫でた。

傍から見ていれば父と子が話し合っているようにも見えるかもしれない。とはいえ、このグラント、40代後半を思わせる風貌だが実年齢は30代、歳の割に老いて見えてしまう事を彼自身もコンプレックスにしている。

特に年齢の話題を出されると年頃の女性を思わせるほど敏感に反応するほどだ。

フランはグラントの言葉に満面の笑みを浮かべる。

「グラントさん、この感謝は絶対に忘れませんよ」

「はは、それほど大それたことでもないだろう」

グラントはメリスと共にフランをメイドとして鍛えてくれた人物だ。メリスが家事全般を教えてくれたのに対し、グラントは外での仕事を中心に教えてくれた。

特にデックスがいない時や、自分たちで何か食べようと思った時のために近くの市場で食糧調達が出来るように実地で練習させられた時は、さながら小さい子供に初めてのお買い物させる父親のような目で見られてしまった。

あの頃はまだ頼まれた食材のイメージと実際の食材の姿が一致せず、間違った食材を買ってしまう事も多かった。今でこそとんでもない物を買うような事はなくなったが、それでもたまに似たような食材を間違える事はあり、その度にメリスやデックスにはため息をつかれてしまう。

「そういえば、奥さんの調子はどうですか？」

「今日の献立も覚えていないのに妻の事は覚えているのか」

「うぐ……」

悪気があつて言っているのではない事はその表情を見れば分かるのだが、それでも何か頬を叩かれたような気分になってしまう。

「やっぱり、印象的な事は頭に残るっていうか、なんというか……」

「まあ、お嬢様の食事と私の妻を両てんびんにかけるなら、そうなるかもしれないが……」

さらつと執事として随分と失礼な事を言っているが、現在の彼の妻の状態がそれほどなのは確かだ。

「はは……、確か4カ月、でしたか？」

「そうだ、安定期になつて随分だが、最近お腹が大きくなつてきてな。ようやく実感が湧いたよ」

話の内容からも分かる様に、グラントの妻は妊娠している。執事としては既婚者であるグラントは現在3人家族、もうじき4人目の家族が加わるうとしているところなのだ。それ故にグラントも最近は仕事を早く切り上げたり、シフトを他のメイドたちとは軽くしている。

仕事と家族を両立させている数少ない成功例らしく、毎朝早い時間帯に自宅から徒歩通勤している。フランたちのように住み込みで働いている者が圧倒的に多い中ではかなり珍しい部類に入る。

「今日も早く仕事を終わりに？」

「そのつもりだが、まあそうも言つてられん状況になりそうなので

なあ……」

フ란の問いにグラントが渋い顔をする。

「……確か、お嬢様はクラスは……」

「うむ、私たちの予想通りになれば早帰りともいかん。妻にも今日明日は遅くなると伝えているし、問題なかるう」

グラントの言葉にフ란は小さくため息をついてしまう。

ポケットから小さな手帳を開き、予定表のページに目を通すと、2人の懸念通りの事が書かれている。物忘れが激しいフ란にとって手帳は必要不可欠、決して忘れる心配をしないで済む。とはいえ、時折「書いたという事実」すらスッポリ忘れてしまう事もあるのだが。

「先の事をくよくよ考えていても仕方ないな。さて、仕事に移ろう」

「ですね、では」

グラントが気を取り直して着ている服の襟を正し、フ란も自分の服が不自然ではないか確認する。

そしてフ란が準備万端になったのを確認してからグラントは両開きの扉を軽く二度ノックすると「失礼します」と言っでドアノブを回した。

グラントに続いて部屋に入ると、広い寝所が視界に入る。入って左手にベッドがあり、布団の中で丸まっている少女がいる。グラント

は小さくため息をつきながらおそらく昨日のままの状態であったのだろう机の上の本や椅子の背もたれにかけられたままの服を片付け始める。

フランはそれを横目にベッドの横に立つと布団の中を覗き込む。

ベッドでは燃えるような紅い髪の少女が規則正しい寝息を立てている。

「お嬢様、朝ですよ」

それがフランの始業ベル代わりでもある。

第01話 メイドの朝は早い（後書き）

感想、誤字脱字報告、お待ちしております。

第02話 メイドの仕事に他意はない（前書き）

さ、最初くらい飛ばして書いてもいいですよっ！？

最初ですからっ！

第02話 メイドの仕事に他意はない

珍しく、昔の夢を見た。

それは今でも忘れるわけがない、初めて彼女と出会った日の夢。

父と共に外出していた際に、道を外れた木の陰で倒れ込んでいた彼女を見つけた時は、本当に驚いたのを今でも覚えている。

あたしは混乱するあまり何をすべきか分からなかった。血まみれでボロボロの服を着た自分と同じくらいの少女を見て、冷静に対処できるのならばその人間は賞賛に値する。

さすがのあたしも気が動転、後から馬車を降りてきた父は最初こそ目を見開いて驚いていたが、すぐに仕事人間の顔になって自分が羽織っていたローブを脱ぐとそれで少女の身体を包み込んでヒョイと持ち上げた。

決して肉体派、とは言えない父でも軽々と持ちあがったのだから、あの時彼女がどれほど衰弱し、やせ細っていたのか想像に難くない。

あの時、少女の顔の左半分には血で白い所がないほどの包帯が巻かれていた。

あたしはそれが意味するところを理解せずに、包帯を交換しようとした。

だから、正面から見てしまった。

包帯の裏に隠されていた彼女の顔の左半分を。

見るも無残に焼き爛れたようになっていて、とてもじゃないが直視して良いものではなかった。

そして案の定、あたしは胃の内容物を道にぶちまけてしまった。

よほど長い間、適切な処置もされずに放置されていたのだろう。行き倒れていた間に蛆が湧いていたその傷痕は彼女がどれほど過酷な人生を歩んでいたかをこれでもかとあたしと父に見せつけてきた。

あの頃は目立った騒乱もなかった。

何者かに襲われて、命からがら逃げのびてきたのか、とも考えられたが彼女のボロボロの服の間から覗いていた黒光りする鉄の物体を見て、彼女がまともな世界に生きていなかった事を思い知らされた。

こんな夢を見たが、あたしは悪夢とは思わなかった。むしろ懐かしい思い出を思い出すことが出来て懐古の情に包まれてしまったほどだ。

彼女とは今では主従の関係以上に親しい。

あたしは彼女に絶対の信頼をおいているし、彼女もきつとそうだろう。

こんなことを考えていると自意識過剰かと思われてしまいそうだが、事実なのだから致し方ない。

しかし、なぜ今になってこんな夢を見ているのか不思議でならない。もはやこの記憶はさして重要ではない。彼女はもうあの時の彼女ではないし、前を向いて歩いている。彼女にあの時点以前の記憶がないのは不幸中の幸いだ。

あんな傷を負うような過去を思い出してほしくなかったのはおそらくあたしの屋敷の者の総意だろう。

父は彼女の素性を探ろうとさまざまなパイプを駆使していたようだが、不思議な事に彼女に関する情報は一切なかった。本来生まれた時に作られる戸籍すら残されていなかった。

あれ以来、父が彼女の調査を続けているかどうかあたしが知る術はない。

あたしも彼女の過去をそこまでして知りたいとは思わないし、知りたくもない。あたしにとって大切なのは今なのだから。

そう、今なのだ。

実はすでに夢から覚めているという事を改めて言うておかなければならない。

誰に？

さあ、あたしも理解できていない。

そしてあたしにとって大切なのは今現在だ。

あたしの今現在大切な事は――。

「お嬢様、朝ですよ」

「あと5分」

わずかばかりの睡眠だと言っておこう。

「あと5分」

「駄目です、今すぐ起きないと遅刻してしまいますよ？」

一度、寝づらそうに寝返りをして瞼を開けたため、今日は恙なく起床するかと思った少女は一瞬フランの顔を見ると再び布団の中にもぐり込んでしまった。

フランはため息をつきながら再度少女に起床を呼びかけるが、返ってくるのは「あゝ」だの「うゝ」だの言う少女の呻き声だけだ。

このままでは埒が明かないと判断したフランは部屋で少女の持ち物である私物を整理していたグラントに視線を送る。

「……仕方ないな。許す、やってしまえ」

しばし考えを巡らせた後、グラントは「ただしお手柔らかにな」と前置きしてからそう呟いた。そしてそそくさと部屋の外に出ると部屋にはフランと少女の2人だけになる。

グラントが執事としてはあまりよろしい行為ではないであろう、扉を随分と大きな音を立てて閉めると、布団の中にもぐり込んだ少女の身体が外からも見えるほどビクツと震えた。

「も、もしや……、今、2人、だけ……？」

「その通りです、お嬢様。さて、今お嬢様に許された選択は2つです。1つ、大人しく布団からお出になられて制服に着替えるか、2つ、あたしに強引に朝の清々しい風にその寒い恰好で放り出されるか、です」

「今すぐ起きる！」

布団がベッドの上で宙を舞う。

そして燃えるような紅い髪の毛がその陰から姿を現し、フランはにっこりと笑みを浮かべた。

「おはようございます、レティアお嬢様」

「あ、あなたねえ、いい加減主に対する態度を覚えた方が良いわよ……」

眠りの世界から脅迫まがいの事をされて引き戻されたレティアが恨めしそうにフランを睨み付けるが、フランの笑みはその視線を軽々と弾き返す。

「おや、あたしは何もしておりませんよ、お嬢様。それよりも早くお着替えてください。朝食は出ています」

「まったく、いつからこんなに生意気に……」

レティアが不満げにそんな事を呟いた瞬間、フランの視線がレティアに照準を合わせた。

「お嬢様」

「な、何かしら？」

「先に謝罪しておきます。失礼」

「はあ——ッ!？」

レティアが言葉の意味を理解するよりも早くフランは動いた。

まずは上だ。

レティアの身体の前にある6つのボタンを目にも止まらぬ速さで外すと反対側の手で真上に引く。服に引つ張られてレティアはいわゆる「万歳」の姿勢になり、フランはそうなった瞬間にパジャマの上を剥ぐ。

その時点でレティアが顔を真っ赤にし始めているが、フランはそれに意を介さずすでに用意されていたレティアの着替えを手にとるとレティアが露わになっている胸を隠す間も与えずにブラジャーを着させる。そしてその上からシャツを着せ、次は下に――。

「何やってるのよ!」

思い切り蹴られてしまった。

顔面にレティアの裸足の蹴りが思い切り入ったおかげで眼帯が外れそうになってしまい、慌ててそれを抑えていると燃えるような紅いオーラを身に纏ったレティアがその眼前に立ちふさがった。

「もう一度聞いわよ、フラン。あなたはいったい何をしようと、いえ、したのかしら……?」

「もちろんお召替えを――きやつ」

再び蹴られる。

先ほどより軽めであつたが、それでも相当強い事に変わりはない。

「『きゃっ』って何よ！　あなた頑丈でしょうが！！」

「メイド長に『女の子らしい仕草』を覚えるよう言われたのですが」

「使いどころが間違つてるのよ！」

「はあ、お嬢様、何をそんなに怒つてらっしゃるのか理解できないのですが、このままですと朝食抜きですよ？」

「うぐっ……分かつたわよ。着替えるからもう勝手な真似はしないで……」

朝から大声を出す羽目になったレティアが心底疲れた声でそう言つと、フランは起き上がつて着替えをレティアに手渡す。

「お嬢様」

「ん、今度は何よ」

「おはようございます」

挨拶は大切だ。

こればかりは毎日欠かさず行っているからもはや習慣になっている。レティアはさっきまでの空気はどうした、とでも言いたそうな顔をしつつもフランに顔を向けると、小さく口を開いた。

「……おはよ
」

「お嬢様、おはようございます」

「おはよう、グラント」

レティアが着替えを終えた頃合いを見計らってグラントが部屋に戻ってきた。

「うむ？ どうしたフラン、その顔は」

入ってすぐに、グラントは若干赤くなってしまったフランの顔に気が付いた。些細な事にもすぐに気が付ける観察眼が必要、という事を言っていたのはグラントであったかメリスであったか。

「お嬢様に蹴られました」

「おやおや、あまり暴力に訴えては駄目ですよ、お嬢様？」

「酷い目にあっただのはこっちなのよ！」

先ほどの事が思い起こされてレティアは耳まで真っ赤になる。

おそらく叫び声は外まで聞こえていたから、グラントも何故こういう状況になったのかは理解できているのだろうが、さすがにそれを面と向かって言う事ではない。

「お嬢様、暴れられると髪の毛がうまく……」

レティアは今フ란に髪を梳いてもらっている。紅く長い髪は背中
の半ば程度まで伸びているため、自分で手入れするには些か面倒
なのだ。

レティアは白色を基調とした、「制服らしい」制服を着ている。ブ
レザーはボタンが正方形の頂点になるようにお腹の前にあり、胸元
には獅子をモチーフとしたエンブレムがある。スカートは膝上数セ
ンチといったところで、こちらも上に合わせて白を基調としている。

上下共に服の節々に青い装飾がされており、白を基調とした制服の
中でその青が際立って見える。

「今日は激しく動くような予定もないから、軽めで良いわよ？」

「そう言っただけいつも家に走って帰ってくるように思えるのですが」

「あれは……、ほら、突然動きたくてうずうずしてるっていうか、
なんというか……」

「……いつも通り、ポニーテールにしておきましょう」

レティアの髪型はひとえに髪型をセットする人間にかかっている。
レティア本人がやりたいと言う時も稀にあるのだが、稀なために左右非対称になる事がほとんどだ。

それも考えた上での左右非対称ではない。言ってみれば「ツインテールにしようとしたら束が3つにも4つにもなる」レベルだ。

手先は器用なのだが、自分の髪の毛の話が別な様だ。

「あれっていつも後ろの奴に引っ張られるのよ」

レティアが鏡越しに後ろのフランに視線を飛ばしてくる。

「引っ張りやすい所にあるのは否定できませんね」

綺麗にまとめて星のアクセサリーのついた紐でポニーテールを完成させると軽くレティアの肩を叩いてやる。

「ん、ありがとう」

「どういたしまして」

レティアは鏡でおかしなところがないか確認するが、特に目立った違和感も無いようで満足げに頷くと、椅子から立ち上がって部屋の扉へと向かう。

扉の横で待機していたグラントが扉を開き、レティアはノンストップで部屋を出てリビングへと歩を進める。

「うう、ようやく暖かくなってきたわね」

「確かに、今年の冬は一段と寒かったですからね」

「おかげでお嬢様がなかなか起きていらっしやらないので苦労しましたがね」

グラントが悪意のない表情、口調でそう言うが、先ほどのフラン同様ダメージをレティアが受けている。

「まったく、うちのメイドも執事も、どうしてもこう主を敬わないのかしら？」

「敬ってますよ、お嬢様」

声を揃えてフランとグラントが良い笑顔をしてみせる。

これだけでレティアを撃沈させるには十分だ。

結局のところ、この屋敷ではメイドも執事も家族同然に近い。

そのため、相手が主であっても態度が激変するような事はない。皆同じように接している。

これを始めたのは他でもないこの屋敷の主、つまりはレティアの父親である。

クラウド・ファルケン、ファルケン家現頭首にしてこの国グラディアラス王国の大臣の地位にいる。他人にも自分にも厳しく、自ら率先して仕事を受けるためどうしても屋敷に帰ってくる機会が少なくなっており、現在も1週間も屋敷に戻ってきていない。

ファルケン家は代々王に仕える重役の地位にあり、クラウドもこの国に3人いる大臣職の椅子の1つに就いている。この3人は三本柱とも呼ばれており、この国の重要な政策や案件に対して強い権限を持っている。実質、国のナンバー2である。大臣の間で地位の差はないため、協力し合って政治を行っているそうだ。

クラウドはその中でもまとめ役のような存在で、それまで陰悪だった議会と大臣との軋轢を埋め、王の声が国の隅々まで届く様にインフラ整備を推し進めている。

そのせいか出張で遠くに行くことも多く、そういう際はグラントがお供している事もある。

ともかく、レティアの父親であるクラウドはなかなか屋敷に戻ってこない。

そのためレティアが実質上の主のような地位になっている。基本的にはフランたちメイドや執事はレティアの言う事は聞くが、当然クラウドの命令の方が上位に存在していることも忘れていない。

いざという時の優先順位というやつであろう。

「はあ、……と、そういえば明後日までの宿題があったんだっけか」

「はい、魔法学45ページ掲載の炎系魔法を形にしておくようにと、ありました」

「忘れてた、どうしよう、さすがに間に合わないかも」

「ですから、今日明日は徹夜の御覚悟を」

グラントがニヤリと笑みを浮かべる。

この世界に生きる人間は、生まれながらにして精霊と契約している、
と言い伝えられている。契約する精霊の種類によってその者が使用
できる魔法の種類も変わるとのことだ。

例えばレティアは炎の精霊と契約している。契約の証である燃える
ような紅い髪と、目を持っている。

その者の髪の毛と目の色は契約した精霊の種類によって決まるもの
だが、基本的にその血筋は受け継がれるものだ。両親が炎と水の精
霊と契約していれば、その子はそのどちらかとなる事が大半を占め
ているが、もちろん例外は存在し、まったく違う精霊と契約してい
ることもある。

「うう、そのまま翌日寝坊したい……」

「ご安心を、お嬢様。時間きっかりに起こしてさしあげます」

「フーラーン」

レティアは前者だ。

父親であるクラウスの血を色濃く受け継いでいる。

「グラントさん、あたしを同席しても？」

「課題にか？ それは構わないと思うが、どうするんだ？」

不意にフランがグラントにそう尋ねたので、グラントは意外そうな顔をした。そして一瞬フランの腰にぶら下がる30センチを超える大きさの銃に視線を向ける。

「最近鍛錬を怠ってしまっているの、グラントさんにご指南をと思ひまして。お嬢様の課題も助言くらいは出来ると思うのですが…」

「フラン、前にも似たような事をして酷い目に合ったじゃない。あなたの説明って擬音が多すぎるのよ」

「ま、前とはもう違います。あの頃はまだ、その、言葉もあまり覚えてませんでしたし……」

レティアが呆れたような表情でそう言うと、フランは若干頬を赤らめて言い返した。

「お嬢様、問題ないでしょう。それに、私も久々にフランの腕を確認しておきたいです」

「グラントがそう言うなら別に構わないけれど、次の日仕事が出る程度に手加減しておいてよね？」

「前は2日ほど寝たきりにさせてしまいましたからね」

「思い出したくもない……」

メリスとは違い、グラントには護身術などもフランは教わっている。グラントは執事の嗜みとして主人が危機の時それを乗り切るだけの

技術と経験が必要だと常々言っており、フランとも組手や実戦形式の訓練を行っている。

素手での近接戦闘から、魔法を交えたより現実的なものまで、その種類は幅広い。

なんでもグラントは依然国軍で嘱託講師をしていたらしい。要は兵士の教育係を務めていたのだ。グラントは茶髪、世間一般に土の精霊と呼ばれる精霊と契約している。

炎や水と違ってそれ自体を作り出すと言う訳ではなく、既に存在する土や石、砂と言ったものを自在に操る事が出来る。これは他の魔法とかなり勝手が違い、後先考えずに使いすぎると自分の足元を言葉通り掬われることになると言う。

「よし、それじゃ今日は帰ってきたら早速特訓ね。中庭を使いましょう」

「分かりました。では用意をしておきましょう」

「頼んだわ、グラント」

このファルケン家の屋敷は町の真ん中に近い場所にある。当然隣にも家が並び、前の道を行き交う人の数もそれ相応に多い。夕方から夜にかけて魔法の練習などすれば、近所迷惑になってしまうのは目に見えている。

「土結界は防音性に優れていますからね」

「うむ、このような使い方をするとは考えもしなかったがな」

人間が作り出す結界はその者が契約している精霊の種類で異なる。

グラントの場合は土で作りに出される結界、レティアであれば炎を薄く伸ばしたような結界を作る事が出来る。この場合、物質的な意味でグラントの結界は防音性に優れている。

結界と言っても外と中の世界を切り離すだけで、それが存在することは見ればすぐに分かる。特に夜中に炎の結界など作れば、かがり火になって安眠妨害になるだろう。

「お嬢様の魔法はよく爆発しますからね」

「仕方ないじゃない。水とか雷と違って調整が難しいのよ」

レティアがふて腐れて顔を背ける。

そんな他愛もない会話をしている間に、3人はリビングへ到着した。既にそこにはメリスやクレアが集まっており、レティアの起床を待っていた。

「「「おはようございます、お嬢様」」」

「おはよ。ってもうこんな時間!?!」

リビングの壁掛け時計に目をやってレティアの眼が見開かれる。

「ですから、早く起きてもらいたかったんです」

「くっ、朝食を逃す訳にはいかないわ。すぐに持って来なさい！」
ファルケン家の朝はいつもにぎやかだ。

余談だが、フランはハムの原産地を問われてまともな答えを出す事も出来ず、グラントにことごとくフォローされる羽目になった。

第02話 メイドの仕事に他意はない（後書き）

ひゃっほーい、どうも、こんにちは、こんばんは、おはようございます、ハモニカです。

序盤くらい書き溜めしてある話をチマチマ修正しつつ連続して出そうと思った次第であります。

順調な滑り出しになればいいのですがねえ。

では。

誤字脱字報告、ご感想、お待ちしております。

第03話 メイドは案外昼が暇（前書き）

存外順調に執筆が出来たので3日連続で投稿。

第03話 メイドは案外昼が暇

「行ってきますー!!」

「行つてらっしゃいませ、お嬢様」

レティアが慌ただしく屋敷の玄関から飛び出していく。

結局、朝食を流し込むようにして食べ終えたレティアはグラントが持っていた学生用のカバンを引つ手繰ると踵を靴に入れる暇すらなく走り出していた。

フランとグラントがそれを見送り、レティアが見えなくなるとそこでようやくフランは大きく伸びをした。

「朝の仕事終了、と」

基本的に、主がいない屋敷のメイドと執事は仕事がない。もちろん、庭の手入れや掃除は必要不可欠だが、何も全員でやる必然性はない。シフト制になっているため、シフトがない者は朝とレティアが帰ってくる夕方から夜にかけてしか仕事がないという場合もある。

そういう場合、住み込みの者は自室でプライベートな時間を過ごしたり、グラントのような自宅通勤の者は一度帰宅するという事も出来る。

シフトは何が起こっても対処できる最低限の人数が確保されている

ため、突然の来客などにも対処は出来る。

とは言うものの、来客者はほぼ屋敷の主人に用があるのだからフ란たちとしては何も出来ない事の方が多いのだが。

グラントは喉の所までしっかり締めていたネクタイを緩めると一息ついて屋敷の中へと戻っていいこうとする。執事の制服を着こなすグラントは凛々しいが、ネクタイを緩めるとワイルドさが加わる。

「グラントさん、中庭に結界を頼めますか？」

フ란は玄関から中に入ろうとしていたグラントを呼び止め、そう頼み事をする。

「練習か？ 分かった、用意するから少し待ってくれ」

グラントはさして気にする様子もなく屋敷に入ろうとしていた身体を翻して中庭へと向かう。

この屋敷の特徴の敷地面積に対して屋敷が比較的小さいという事だろう。そのため必然的に庭が占める割合が増え、丹精込めて育てられた花や井戸水を使った小さな池も作られている。休憩時間には池の近くで疲れを癒す者も少なくないし、フ란もその中の1人だ。

中庭の中でも周囲に何も無い開けた場所に出る。そこは表からは見えない場所にあり、そこだけ芝生がなく茶色い土が露出している。

グラントは土が露出している場所に立つと小さく息を吸い込む。

その瞬間、土が浮かび上がる様に地面からそそり立ち始め、2つの

分厚い土壁が並行して構築される。フランとグラントはその壁に挟まれるような位置に立っており、壁は高さを増すと徐々に角度をつけ始め、ついには2人の頭上で結合、トンネルのような形になる。

壁には等間隔で穴が開いており、中にいてもそれほど暗さを感じる事はない。

「目標はどのくらい必要だ？」

「そうですね……、200個ほどお願いします」

「夜の鍛錬に向けて気合が入っているな」

「久々にグラントさんに教えてもらえるんです。この機を逃す気はありません」

フランの言葉にグラントが少し照れつつも嬉しそうな笑みを浮かべる。

その間にもフランが要望した「目標」の構築を開始する。壁から突き出るように円状のものが突出し、トンネルの向こう側に小さな突起が姿を現す。

「フランのおかげで土の操作が随分と上手くなったな。本を読みながらこれくらいなら出来そうだな」

「前はいつも嫌な顔をしていましたよね」

「当たり前だ。3時間も4時間も土とにらめっこなんて、普通は無理だ」

グラントはため息をつくとトンネルから出ていく。

「練習を止める時に声をかけてくれ。それまで私は読書だ」

「分かりました。ありがとうございます、グラントさん」

フランが礼を言うとグラントがヒラヒラと手を振る。

フランはグラントが視界から消えると目の前に向き直り、無数の的を見据える。現在トンネルの向こう側までで見えている的は5つほど、土で出来ている事を利用して不定期に壁の中に戻ったり、地面に潜ったりするようになっており、狙いをつけるのは容易ではない。

腰の後ろに回していたホルスターから黒光りする銃を取り出すとポーチから鉄球を無造作に取り出す。

シリンダーを取り出すと6つある穴に鉄球を入れていく。この作業は地味に面倒臭く、1つひとつ入れていると最短でも10秒かかってしまう。そのためフランは平べったい円柱状の道具を使う。

判子のような持ち手がついており、底面にはシリンダーの穴の大きさに合わせたへこみが付いている。鉄球をあらかじめこのへこみに入れておくことで、装填の時間を大幅に減らせるようにしているのだ。といってもこの方法はフランが考えたものではなくいつも1個ずつ装填しているフランを見てグラントが試しにと考案した方法だ。これのおかげで鉄球が穴に入らず地面に落ちるというストレスが生まない事が起こる回数は激減した。

鉄球を装填するとシリンダーを元の位置に戻して一息つく。

「ふう——」

目を開き、銃を持った右手をまっすぐ伸ばす。

「『アフエシマス』起動」

小さくそう呟くと、銃身の溝が仄かに光り出す。青白い光は銃身からシリンダーへ、そしてグリップへと伸びていき、銃を持つ手までその光がたどり着くと光の線はグリップから手の甲へと乗り移ってくる。

『アフエシマス』というのはフランの銃の名前兼この青白い光の線を擁するシステムの名だ。

この銃は前時代のように火薬を使用して弾丸を発射するものではなく、使い手の魔力を爆発させて弾丸を発射する。

そのため銃に魔力を供給するラインが必要だ。それが青白い光の正体である。

フランの手の甲まで伸びた光の線はそこで止まり、銃へフランが持つ魔力を吸出し供給する。

このシステムにより理論上持ち主の魔力が枯渇するか、弾がなくなるまで撃ち続ける事が出来る。銃身の摩耗も多少影響を受けるが、ほとんど気にならないほどだ。

いつからこの銃を持っているのか分からないが、不思議と身に着けていると心が穏やかになる。

「あたしの過去の記憶と今を繋ぐ唯一の……。フフ、何を言ってるのやら……」

記憶を失うと言うのは不思議な気分だ。

きつと失いたくなかった大切な記憶もたくさんあったのだろう。

だが、記憶を失うと記憶を取り戻したいという気持ちとどうでも良い、という2つの意識が生まれる。きつと思いださない方が良い記憶があるだろう。

自分がまともな幼少期を送っていなかったであろう事は自分の顔の左半分を見ればすぐに分かる。

物心、と言っているのか定かではないが、この屋敷に来てからの記憶しかないフランにはそう形容しなければならないものが身についた頃から、何故かこの銃だけは手放す気にはなれなかった。

そして今日も身体の一部になってくれている。

『アフエシアス』が起動されると青い光の帯が魔力を銃に供給するパイプとなる以上、身体の一部になるのは当然だ。そして銃が自分の身体の一部になる様に、フラン自身も銃の一部となる。

呼吸と心臓の鼓動を同調させ、手振れを最小限にまで減らしていく。意識を銃と標的に集中させると不意に周りの音が静かになって自分の呼吸と心臓の鼓動が異様に大きく聞こえるような錯覚に襲われる。

「すう——」

狙うは一番手前の標的だ。直線距離にしておよそ15メートル、中央に円状の模様が描かれているそれに流れるような動作で銃口を向けると間髪入れずに引き金を引く。

バガンッ！！

到底それが発するとは思えないほど巨大な発砲音が響き渡る。

アフエシ阿斯はいわゆるダブルアクションの銃だ。引き金を引くだけで撃鉄が上がり、下ろされるという2つの動作を行う。火薬の代わりの魔力に引火し、装填されていた鉄球が猛然と発射されると標的のど真ん中を寸分の狂いもなく撃ち抜く。貫通した鉄球が土の壁にめり込むが、強靱な壁はその貫通は許さない。

撃ち抜かれた事を確認するかのように少し間を開けると中央を穿たれた標的がボロボロと崩れてただの土くれに戻る。

「腕は鈍ってなさそうですね……」

自分の肩が違和感を持っていないか確認しながらフランは独り言を呟く。

銃を握る右手の中指、薬指、小指を開いたり閉じたりさせながら、銃を手に馴染ませる。指を開いたとしても、青い光の帯があるため銃が手から落ちるような事はない。逆に言えば銃を手放したければ『アフエシ阿斯』のシステムを停止させる必要がある。

銃を使っている1つだけ自分の身体に感謝をした事がある。自らの隻眼だ。

健全であれば、左右の目のわずかな距離の違いから誤差が生まれてしまう。それを人間の脳は修正して焦点を合わせるわけだが、隻眼であるフランはそもそもそんな事をする必要がない。右目から入る視覚情報をそのまま利用することが出来るのだ。

その事を呟いた時、グラントが複雑そうな顔をしていたのは物忘れがひどいフランにしては珍しくはつきりと覚えている。

バガンツ！

また引き金を引く。

今度は30メートルほど先、トンネルの右に寄った地面から突き出した土の人形の頭部を撃ち抜く。

だが、今度はそれで終わらず右から左に銃を動かしていき、その過程で銃口の前に来た標的を左に移動させるという動作の過程で排除していく。

標的に合わせて発砲、また合わせて発砲という訳ではなく、全体の流れの中でその狙いを定めると言ったところだろうか。

何も考えず、ただ視界に入る標的を次々と撃ち抜いていく。

ある程度標的が減ると新たな標的がトンネル内に追加される。その

うち上下左右に動くような標的まで現れ始めるが、フランはその未来位置を正確に予測して標的の中央に鉄球を撃ちこんでいく。

（右……右……左……下……そこ）

動く標的はその規則性を見出す必要がある、とグラントに言われた事がある。

だが、正直フランにはそれをする必要はない。

物体が動くその寸前の、その刹那の瞬間を捉えてフランは次に標的がどの方向に動くか容易く予想出来てしまう。

6発全てを撃ち切ると、視線を向ける事もなくシリンダーを外し、鉄球を補充していく。この動作1つ取っても、一切の無駄がなく、必要最低限の動きで行われる。

鉄球を装填すると軽く銃を振ってシリンダーを元の位置に戻し、再装填の間も睨み付けていた標的に銃を向け素早く引き金を引く。

次々と標的を破壊していく様子を見ると、フランは無意識のうちに笑みを零していた。

（アフエシアスは裏切らない）

この銃は自分の思い通りに動いてくれる。身体の一部と称したが、そうじゃなくともフランにとって頼もしい相棒であることに違いない。

（絶対に……）

それはもはや確信の域に達していると言っても過言ではない。毎日欠かさず手入れを行い、塗装以外は常に万全の状態を維持させている。塗装は1回に数百発撃つため新しく塗ったとしても簡単に剥げてしまうため放置している。そのため日に日に黒い塗装が剥けているのだが、フランはあまり気にしている様子はない。

引き金を引く度に銃口から帯の色と同じ青白い発砲炎が一瞬トンネル内のものを青く照らす。

「あつ……」

そんな事を考えていたせいか、標的を1つ撃ち漏らしてしまった。撃ち漏らしたと言っても中央に命中させる事が出来なかっただけで、標的自体にはしっかり弾痕が残されている。

「65発中64発、と」

外したところまでに撃った数を確認し、頭の中で反芻させる。

「65人目がお嬢様に襲い掛かるかもしれない、と」

これは自己暗示に近いものだろう。

実戦で外したらその敵がレティアや友人に凶刃を向けるかもしれない。強迫観念じみたそれを頭の中で繰り返し呟き、自分の中で「絶対に外さない」という決意をする。

「……………よし」

しばらくして銃を地面に向けて頭の中の整理をしていたフランは目を開き、気を取り直す。

標的の動きは止まっていた。

おそらく銃声が途絶えたのに気が付いてグラントも一息ついていたのだろう。フランが黙ってトンネルの壁を軽くノックすると、それまで動きを止めていた標的が一齐に動き始める。

ほとんど無作為とも言える標的の動きは、全てグラントによって遠隔操作されている。

つまり、同時に数十個の標的に意識を集中させ、なおかつ破壊されたものは破棄し、その分新しい標的を作り出すという作業もしているのだ。

フランは感謝しつつも、よく頭がパンクしないものだ、と内心舌を巻く。

その後、フランは自らの胃が空腹に悲鳴を上げるまで引き金を引き続けた。

「ん、休憩か」

空腹に胃が悲鳴を上げたのをきっかけにフランの命中率は著しく低下した。一度腹の虫が鳴くとどうしても昼食の事が脳裏を過り、特訓に集中できなくなってしまったのだ。

そうじゃなくとも既に数時間銃を引き続けたのだ。そろそろアフエシアス自体を休ませないといけない頃合いだ。おそらく今この銃に液体をかければあっという間に蒸発してしまうだろう。

「空腹には勝てないようなので」

「腹が減っては戦は出来ぬ、とも言つ。デックスに昼食を作ってもらおう」

トンネルから少し離れた小さなテラスで椅子に座って優雅なひと時とでも言うべき時間を過ごしていたグラントは読んでいた分厚い本を閉じるとゆっくりと立ち上がり、フランのために作り出していたトンネルを地中に戻していく。

するとトンネルがあつた場所からフランたちのいる方へ地面が波打つように動き、フランの前まで来ると盛り上がり地面から小さなお盆のような物体がせり出してきた。そのお盆の中には銀色に光る鉄球が入っている。フランが撃った鉄球を全て回収してきたもので、フランはグラントに礼を言うのとそれをまだ撃っていない鉄球とは違うポーチに入れる。

この鉄球はあまり無駄にして良いものではない。

魔法技術が発達するこの世界では銃のような武器自体が稀有な上、その弾丸ともなるとそれこそ製造しているような奇特な人間はいない。この鉄球にしても、デックスとグラントが調理場で作った代物なのだ。

屋敷の廃品にするしかない金属のものをかき集めて熱し、液体になったらグラントが作り出した土の型に流し込んで鉄球を作った。いわば2人の汗と涙の結晶と言える。血は流していないので除外される。

そういう訳であるため、回収できないような事が無いようにしている。

現在鉄球は全部で400発ほどあるが、ポーチに入れているのは200発ほどだけだ。残りはフランの部屋の引き出しの中に収められている。

屋敷の中に戻り、廊下をグラントと共に歩いていると反対側からメリスが音もなく歩いているのを視界に捉えた。

遠くから見ても、それがメリスだとすぐに分かるのはその歩き方、仕草、どれを取っても際立っているからだろっ。

「あら、その組み合わせを見るに練習をしていたのかしら？」

メリスはこちらに気が付くとニコリと笑みを浮かべながらそう尋ねてきた。

グラントの土結界は防音性に優れているため分厚くすれば壁の反対側でも一切音が聞こえないというくらいのものが作れる。おかげでこのように屋敷の中という極めて至近な場所でも銃声は聞こえない。

「ああ、今夜手合せをするからその練習だそうだ」

「手合せ？ レティアお嬢様の宿題のついで、と言ったところ？」

「はい、もちろんお嬢様の宿題が全て終わったら、という話で終わらなかったらそちらを優先しますが」

「そうならないように頑張りなさいな」

ふふつと笑いながらメリスはグラントの脇を通り過ぎて今フランたちが歩いてきた道を進んでいく。

そしてその途中で思い出したように足を止めて振り返る。

「昼食ならリビングの机に置いてあるわ。私とクレアは頂いたから後は2人で食べて大丈夫よ」

「それはすまないな。だがメリス、あまりクレアをいじめてやるなよ？ 先ほども声が聞こえてきたが」

グラントが苦笑しながらメリスに言うと、メリスは物凄く良い笑みを浮かべてみせる。

「あれはいじめじゃないわ、賤けよ？ そもそも掃除のはずが汚れを増やすんだから、私じゃなくとも叱咤の1つするわよ」

「クレアはたまにおっちょこちよいですからねえ」

「あらフラン、あなたがそれを言うのかしら？」

「うぐ……」

うつかり漏れたフランの呟きに素早くメリスのツツコミが入る。

メリスは最後に小さく手を振ると曲がり角を曲がって2人の視界から消える。

それを確認してからグラントはフランに顔を向けた。

「フランの最初はクレア以上だったからな」

「……言わないでください。少なくともお皿はもう割りません」

「ならいい」

グラントが父親のようにフランの頭を撫でる。フランも少し恥ずかしそうな表情はするが嫌がるそぶりは見せない。

グラントが父親なら、さしずめメリスが母親と言ったところか。

そんな事を想像してメリスの厳しい教育風景を思い出したフランは人知れず身震いをしてしまった。

第03話 メイドは案外昼が暇（後書き）

むきやー、男少なめとか言っておいてもう2人出てきてるじゃないですか！

……ですが！

全体で見ると相当少ないんです！

きつとそうなる予定！

では！

誤字脱字報告、ご感想お待ちしております。

第04話 メイドで戦闘狂は（相手に）死亡フラグ（前書き）

うむ、サブタイトルは考え無しだからどうしようもない。

第04話 メイドで戦闘狂は（相手に）死亡フラグ

「ただいま」

玄関から若干疲れを感じさせる声が響いてきた。

フランはその時自室にいたが、わずかに聞こえたその声に素早く身体を起こしてベッドから立ち上がる。服についたしわを軽く伸ばして外していたガンベルトを腰に巻く。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

部屋を出て玄関の方へ向かう途中でメリスにバッグを預けて歩いていったレティアを見つけるとフランはすぐさま腰を折って彼女の帰宅を迎えた。

「ん、ただいまフラン」

午後もほぼ練習に費やしたフランは全てで4桁を越す回数だけ撃ったフランはレティアの帰宅まで自室待機という事になっていた。

因みに昼食はデックス特製カツサンドだった。

時間が経って若干冷めていたが、それでもパンに挟まれたカツの外側はサクサク、中はジューシーという素晴らしいものだった。基本的にデックスは一から全て作る事を信条としているため、ソースから何まで材料を取り揃えては時間をかけて自分の納得のいくものを作るようにしている。

そのため、その出来栄は素晴らしいという一言では言い表せないほどだ。

全部で2人分、8個ほどあったのだが、あまりにフランが食べたそうな顔をしていたためグラントが1つ分けてあげるといふ始末になるほどだ。

「夕食の前に少し課題を片付けておきたいわ。グラント、用意は出来ているかしら？」

メリスに渡したバッグの中から学校で使っている教科書を取り出すとレティアはリビングへ向かわず昼間にフランが銃の練習をしていた中庭に出る。

中庭に出るとすでにその場にいたグラントにレティアが用意が出来ているか尋ね、グラントが小さく首を縦に振った。

昼間と同じように、だがはるかに大規模な土の結界と壁をグラントが作り出すと、随分と傾いて隣の建物の影に隠れようとしていた太陽を隠し、一気に中庭が薄暗くなる。

夕方であるため余計暗く感じるため、メリスがバッグを置いてきたついでに明かりを幾つか持って中庭に戻ってくる。

フランはその間にテラスにある小さな白いテーブルを中庭に運んでくる。

「夕食になったら休憩という事にしましょうか。ええと……」

メリスがフランの持ってきたテーブルに明かりを置くと懐中時計を取り出して時間を確認する。

「今17時半ですので、19時には」

「分かったわメリス。さあグラント、フラン、どんどん練習するわよ」

テーブルに厚みのある教科書を置くと付箋の挟まれたページを開く。そのページは右半分が完全な説明文、右半分には簡単な図と普通の説明文とは違い太い文字で強調されている言葉などが書かれている。レティアはそのページを指でなぞって読みながらそれを反芻するようにブツブツと独り言を呟いている。

フランはテーブルの反対側からレティアの邪魔にならないように教科書を覗き込んでみる。明かりの反対側から覗いているため自分の影でレティアの手元が暗くならないように注意しながら教科書を逆さまに読んでいく。

「炎を持続的に作り出すことで炎の帯を作り出す技術ですか……」

「フラン、あなたよく逆さまでそんなに早く読めるわね」

「何度もやっていれば慣れます」

フランは苦笑しながらレティアに言い返す。

「あなたほどの魔力の持ち主が目の前でお手本を見せてくれれば、よっぽどはかどったでしょうけどねえ」

「はは、そればかりは……」

一瞬、レティアの言葉にグラントとメリスの表情が強張ったように見えたが、フランはあえて無視する。レティアも悪気があって言っているのではない。もう1年の付き合いになる。これくらいの冗談にいちいちフランも反応しないようになった。

フランが魔法が使えない少女であることなんて――。

それを初めて、自分の事として認識したのはそれほど昔の話ではない。

この屋敷に来て、メリスやグラントが言葉から礼儀作法、人間として生きるための術を全て教えてくれた中で、フ란のそれに触れないはずがなかった。

この世の人間は須らく精霊と契約している。^{すべか}世界はこれを前提に回っているも同然だ。

そのため、それこそ「1年に1人生まれれば奇跡という名の不幸」などと言われるほど、魔法を使えない人間はこの世にいない。仮にいたとしても、表の世界に姿を現す事などほぼ皆無に等しい。

理由は至極簡単で、生まれた瞬間に両親が殺すか、本人が成長して自分の事が分かるようになった頃に自殺する、というのが多いからだ。フ란も自分の事を調べる過程で自分と同じような境遇の者がいないか調べる事はしている。

魔法が使えない者は特に「インペリティア」と呼ばれる。

人間社会で生きていくうえでの根本的な物が欠け落ちているわけだから、その影響は生まれてすぐにまずはその両親に向けられる。

能無しを生んだ親。

それがこの世界でどれほど重いレッテルなのか、フランには分からない。

だが、魔法を使えない子供が辛い思いをしてまで人生を送るくらいなら、今ここで自分たちが始末をつける、と考える親もいるだろう。自分たちのために、そして何よりこれから暗い人生を歩むことが決定的である子供のために、自らの手を血で染めてまで名もない我が子を殺すのである。

仮にそれを免れたとしても、一般社会で生きていくのは並大抵の事ではない。

通常の学び舎にはまず入学出来ない。

書物によると、そういったインペリティアに分類される人間は皆一様に「無」を象徴する白い髪をしていると言われている。目は何とか色を判別できる程度の灰色、生まれて髪の毛もない子供が精霊と契約しているかいないかは、主に目を見て判別されている。

その点、フランは過去の例から一線を画している。

髪も目も闇を思わせる黒だ。今被っているウィッグも目に入れているカラーコンタクトも世間体を考えてこの屋敷の者たちが用意してくれたものだ。

そうでなくともフランは顔の左半分が人目に見せられないような状況だ。この眼帯が無ければ人前には決して出られたものではない。

フラン自身は、自分が魔法を使えない事が辛いと思つた事は一度も

ない。

過去には思っていた時期があったとしても、今のフランはそれを覚えていない。

なにしろフランの記憶はこの屋敷にやって来た1年前から始まっており、それ以前の記憶は何もないのだから。

普通なら、誰しもお近づきになりたくない人物に分類されるであろうフランだが、この屋敷の者たちは違った。フランだからと言ってどこか他人行儀になるようなことも一切ない。その点、フランは記録に残っているような者たちとは全く異なった人生を歩んでいると言える。

とはいえ、レティアに魔法の事で何か尋ねられても、答えようがないのは歯がゆい。

調べてもらったところ、フランは人並み外れた魔力をその身に宿しているらしい。だが、肝心の魔力を魔法に変換する機能、つまりは精霊との契約の事だが、それがなかったために宝の持ち腐れになっているのだ。

レティアが幼い頃使っていた簡単な魔法の教科書を読んでその仕組みや言葉に出来る範囲での使い方は理解できる。

けれども結局はやってみないとどのようなものか理解することは出来ない。魔法の使えないフランには一生かかっても実を結ぶことのないことだ。

だが、フランは自分の境遇を悔やんではない。むしろ魔法が使える

ないからこそ、自分にしかできない事もある、と考えている。今はそんな状況に巡り合っていないが、自分の手で出来るといふ事に感謝しながら生活するようにしている。

自分の手で触れ、感じて、初めて分かる事もある。全自動にすらする事が出来る魔法では不可能な事も、だ。

それに、フランは決して無力ではない。

自分を守る手段も、自分を主張する手段も持っている。

そして何より、それを聞いてくれる家族がいる。

フランにとっては、それが全てであつた。

「はあっ！」

威勢のいい掛け声と共にレティアが手の平から炎を作り出してみせる。

「……いつも思っんですけど、それ熱くないんですか？」

「何を言ってるのよ、フランは。熱いわけないでしょう？」

「なぜ？」

「なぜ、って言われても困るわね。そういうものなのよ！」

「そういうものなんですか」

レティアが魔法の制御に集中させると言わんばかりに語尾を強めるが、フランは気にする様子もなくレティアの言葉をメモ帳に書き留める。その場で分かったとしても、どこかに書いておかないと忘れた時困るので、フランは常に新品のメモ帳を持ち運ぶようにしている。

大体の場合、1冊に1週間分程度の情報を書き留めており、既にその冊数は優に50を超えている。その全てがきちんと整理されてフランの自室の引き出しの収められている。

レティアはペンを走らせるフランから視線を自分の手の平に戻すと反対の手をその作り出した炎の上にかざす。

そして炎を引っ張る様に手を持ち上げると、ユラユラと燃えていた炎がその手に引っ張られて徐々に伸びていき、帯状になっていく。

「その調子……、その調子……アッ」

上手い具合に伸びつつあった炎の帯がレティアの顔ほどまでに伸びたところで千切れてしまう。それまで一つながりの炎だったが、今はレティアの両手で小さく揺れている。

「あと少しだったのになぁ」

「確か課題は１メートルでしたか」

「正確には両手を横に広げるくらい、なんだけどね。これじゃ明後日までとか無理かな……」

レティアが残念そうにため息をつく。

「……………お嬢様」

「フラン？」

顎を撫でながら考え事をしていたフランが顔を上げてレティアに近寄る。

「お嬢様の場合、魔力を燃料に炎を焚いている、と考えて良いんですよね？」

「随分と適当だけれど……、まあそんなものね。それがどうしたの？」

フランは顔の前で人差し指を立ててみせる。

「あたしが思うにですね。お嬢様は『炎』自体を強引に伸ばそうとしているように思えます。ですが先ほどの考えから行くと、伸ばすべきなのは炎ではなく『魔力』なのではないでしょうか？」

「……ええ、と。どういう意味かしら？」

レティアが一度では理解できなかったように首を傾げている。

フランは何とか適切な言葉を探し出して自分が感じている違和感をレティアに伝えようとする。

「つまり……このページで習得すべきなのは作り出した炎を伸ばす技術じゃなくて、魔力を両手の間で滞留させること、なのでは？ 魔力が燃料だとすれば、燃料がある場所には必然的に炎が流れます。結果として炎の帯が出来るわけです」

「なるほど、あたしは炎自体を魔力で引き伸ばそうとしていたという事ね、……よし」

レティアがフランの指摘を頭の中で整理した後、もう一度やってみようとする。

今度は炎を先に作るのではなく、両手を合わせるようにして魔力を集める。両手の包まれるような位置にある空間が若干揺らいたところを見るに、レティアの手の平の中で無色透明の魔力が渦巻いていると見ていいだろう。

「よっ」

手の中の魔力が霧散しないように気を付けながらレティアは徐々に手と手の距離を開いていく。ゆつくりと、だが確実に『魔力』の帯がレティアの身体の前で作り上げられつつある。ここに魔力を検知する装置でもあればそこには魔力の帯がしつかりと映し出されることだろう。

レティアは焦らず腕を広げていき、ついに大きく腕を横に開くまでに至った。帯の長さだけ考えれば、軽く1メートルは超えている。

後は炎を作り出すだけだ。

レティアが自らの魔力に力を込める。

両方の手の平から生まれた小さな炎は瞬く間に魔力の帯に沿って大きくなり、レティアの身体の正面で左右の炎が1つに繋がる。

見事な炎の帯が作り出され、レティアは嬉しそうに笑みを浮かべてフランの方に顔を向ける。

「ありがと、フラン」

「フフ、お嬢様の实力ですよ」

フランにしても、レティアの事は自分の事のように嬉しい。

ニコリと笑いながらフランはレティアを賞賛する。

「なんだ、私たちは必要なかったかな？」

「あらグラント、役目をフランに取られて悔しいのかしら？」

「そんなわけないだろう」

グラントにメリスが笑みを浮かべながら顔を向けるとグラントが真顔でそれを正面から見返す。

2人がコントのような事をしている間にも、レティアは作り出した炎の帯を自在に操っていく。一度コツを掴むと後は楽なのか、宙に見事なハートマークを炎の帯で描き出したり、星型の図形を作り出してみせる。

「……よし」

上機嫌になったレティアは炎の帯を霧散させると再び教科書に向き直る。習得しておかなければならない魔法技術はこれだけではないため、次のものに進む事にする。

「えーと、炎の投擲？　なんだ、簡単じゃないの」

教科書を読んだレティアはどこか拍子抜けしたような表情を浮かべながらグラントに顔を向けた。

「グラント、的をお願い」

「承知しました」

メリスのちよつかいから抜け出せる、と思ってホッとしたグラントがすぐに土を操って昼間のフランの時に作った標的よりかなり大きな標的を3つ、土壁の前に立たせる。

「そりやつ」

手の平に作り出した炎をボールでも投げるかのように振りかぶって標的目掛けて投げつけると、一瞬間で揺らいだ火球が次の瞬間には猛スピードで標的へ飛翔していった。

そして標的に直撃、土の標的が砕け散って辺りに飛散する。

「どうよ？」

鼻を鳴らして自慢げにその場にいたフランたちに向き直るレティア。だが、フランたち3人はどこか複雑そうな顔をしている。

「お嬢様の課題は、加減ですね」

メリスが3人の意見を総合して言うと、フランとグラントが「その通り」と数回頷く。

「どうして？ 別に問題は……あつ」

標的を指差してそう言おうとしたレティアはそこで標的のある点に気が付いた。

レティアが命中させたのは3つある標的のうち、中央の物、つまり左右に別の標的が置かれている。

しかし、左右の標的は中央の標的が破壊された拍子に延焼して同様にボロボロになっていた。そして左右の標的には遠くからもはつきりと分かるようにでかかと「要救助者」と書かれていた。

「人質死亡、加減に加えて状況把握を怠ってます」

「んな！？ そんなの課題に書かれてないよ！？」

教科書をグラントの顔の前に持ってきてレティアが猛抗議するが、グラントは謝る素振りも見せず小さくため息をつく。レティアに向かつて口を開く。

「お嬢様、世の中教科書通りの事が起こる事の方が少ないのです。あらゆる場合に対処するためには、日ごろからその心構えが必要です」

「それとこれは話が別でしょう！」

「いいえ、関係大あります」

レティアの反論を即座に切り返すグラント。何やらようやく自分の出番という事で喋りたくてうずうずしているのだろうか、若干楽しそうにレティアに向き合っている。その口ぶりはどことなく軍人気質を感じさせる。元教官は伊達ではないという事だろう。教えるという事に関してはフランやメリスより一日の長がある。

「あんなったグラントさんは、そう簡単に止まりそうにありませんね……」

「あらフラン、私も同じことを考えていたわ」

フランが独り言のように言っているとメリスが含み笑いをしながら相槌を打ってきた。

「どうしましょう、こうなるとあたしたち出来る事がないのですが……」

「そうねえ、夕飯はクレアとデックスでどうにかなってしまおうでしょうし……、ねえ、フラン」

「……なぜそこであたしを見るんでしょうか、メイド長？」

何か、とてつもなく嫌な予感がしたフランはメリスから一步退く。
メリスがすごく良い笑顔で開いた一步を即座に詰めるとフランの肩を両手で押さえる。

「1戦、やりましょう?」

「嫌です、メイド長の場合、『やる』じゃなくて『殺^やる』ですから」

「つれない事を言わずに、さあ」

メリスは有無を言わず銃を取るよう促し、自らは虚空から剣を取り出す。

これもフランからしてみれば羨ましい技術だ。

魔法技術を応用することで別次元とも言える空間に武器を納める事が出来るのだ。これを使えば大荷物を持って外を歩く必要は実質なくなるが、まだ一般に広まっている技術ではない。使用できるのは熟練者ぐらいであるが、メリスはその類に属している。

メリスが取り出したのは鞘のない無骨な剣だ。もともと空間という

場所に収めているが為に鞘が必要ないのだ。また腰に吊って歩くわけでもないため装飾をつける意味もない。

「て、手加減を……」

「久しぶりの手合せだから、保証は出来ないわ」

「あの、あたしグラントさんとの手合せもあるのですが……」

「大丈夫、加減してあげる」

「言ってることが矛盾しているのに気が付いてます？」

苦笑いするがメリスは怪しげな笑みを浮かべるだけで答えを返してくれない。

グラントとは特訓をしてもメリスとはしない理由にはこれもある。基本的にメリスは厳しい事はあれど決して暴力に訴えるような事はない。

だが時折、丁度今のように無性に戦いたくなることがあるようだ。その時ばかりは普段のメリスも鳴りを潜め、戦闘好きのようになっバトルマニアてしまい、実力と相まってまず勝ち目はなくなる。

「そうね……、10分私の攻撃を凌いでもらんなさい。それでいいわ」

「10分、ですか。あたしにとって3時間にも感じられるでしょうね」

「それじゃ、行くわよ」

風が唸った、そんな感覚を受けた次の瞬間にはメリスがフランの目の前で剣を振りかぶっていた。フランはそこまでのメリスの全拳動を把握していたが、あまりの速さに驚いてしまった。

ガギンッ！

とつさに銃身で振り下ろされた剣を受け止めると眩い火花が散る。銃口に近い場所に左手を添えて押し負けないようにするが、それでも身体が後ろに押されているのが分かる。どう考えても手加減をする気はないと思えない。

「メイド長、やっぱり殺る気でしょうっ？」

「あら、何を言っているのか分からないわ」

「ああ、そうですかっ！」

もう、それをメリスに求めるのは止める事にする。渾身の力で剣を押し返すと一歩飛び退いて銃口をメリスに向ける。

そして間髪入れずに2発撃つ。

1発目はメリスの足を狙って撃つ。足を狙われたメリスは横にステップして避けるが、そこに2発目が飛び込んでくる。宙にあるメリスはそれを避ける事は出来ないため、あえて1発目を圏にしての2段階構えの攻撃を試みたのだ。

ほんの一瞬、15メートルと離れていない距離で銃が撃たれてからメリスにたどり着くまでのことからコンマ1秒あったかどうか分からないほどののだが、その一瞬メリスが少しだけ笑みを湛えたような気がした。だがその真意に気が付く前にメリスは剣を振って弾を弾き飛ばし、余裕を持って着地する。

「はは、相変わらず化け物じみてますね、その剣捌きは」

「それは私にとって褒め言葉よ、フラン」

軽く剣を振ってみせると触れてもいない地面がズバリと斬れる。装飾がほとんどされていないメリスの剣は実用性一辺倒であるため、その性能は破格だ。

高速で飛翔するフランの弾を迎撃できるのは人並み外れた動体視力と腕力、そして優秀な相棒のおかげと言える。

だがメリスは別段特別な事をしたという表情をするわけでもなく、剣を構えなおす。

「さあ、あと9分と20秒、頑張りなさい」

「はは、自信ないです」

フランは乾いた笑いをしながら銃を構えるしかなかった。

第04話 メイドで戦闘狂は（相手に）死亡フラグ（後書き）

メイド＋銃＝ロベータ

メイド＋剣＝ロルタ（ver・銃剣）

え？

大いに間違ってる？

だってハモニカはそれくらいしか知らないんですもの。名前だけ知っている人ならそれなりにいるかもしれませんが、原作読んでいる、とかになると話は別です。

え？

足技の方？ 誰ですか、それ？ww

とまあブラ○ラネタを言いつつ今日も投稿するハモニカです。

まあ、人それぞれってやつですよw

何とか投稿休止に追い込まれるであろう年末年始の前にある程度投稿しておきたいのでして、時間を見つけてはチマチマ書いております。

そうですね、あと二話 いけるか……。

では。

誤字脱字報告、ご感想お待ちしております。

第05話 メイドは用意が良くなくては（前書き）

メリークリスマス、なわけですね。

しっかり遊んでから投稿することにしました。

正確には昨日ですけどね。

では、どうぞ。

第05話 メイドは用意が良くなくては

結論から言う事にしよう。

突如バトルマニアのような事を言い出したメリスと模擬戦をやる羽目になったフランは20分と持たずに喉元に剣の切っ先を突きつけられることになった。

遠距離武器である銃と近接武器である剣、この組み合わせでは銃の圧倒的有利は確かに揺るぎないものであっただろう。事実フランは極力自分がメリスの射程距離に入らないよう常に距離を取って戦っていた。メリスは距離を詰めないとフランを攻撃出来ないが、フランは近づく必要などない。遠距離から一方的に倒す事も可能であったはずだ。

それが出来なかったのは、撃った弾をメリスが弾くという離れ業をこなせる事にあった。1発弾いて即座に第二撃を迎撃できるほどの剣速を持っているメリスにとって最大6連射のフランの攻撃を全て無効化するのにそれほど苦労はいらなかったのだろう。フランが6発撃ち終えて再装填する隙を突いて一気に距離を詰めて自分の間合いで戦うようになるのに、それほど時間はかからなかった。

それでもフランとしては善戦した方と言っても良い。

再装填しつつ距離を取っていたら突如目の前にメリスが現れたのだ。再装填を失敗しなかっただけマシと言えるかもしれない。

とはいえ、この距離では撃つにはあまりにも不利だった。撃とうと

狙いをつけても素手で銃身を握って狙いを外されてしまうのだ。これでは撃ったところで到底命中などさせることはできない。

「ふう、とはいえ20分、持たせるとは上達したわね、フラン」

繰り返される剣撃を銃で防ぐのには限界がある。

いかにアフエシアスが30センチというおよそ拳銃とは思えない規格外の大きさとはいえ、所詮は銃、1メートルを超える剣を凌ぐには無理があつたようだ。アフエシアスは強度面でかなり頼りになるが、それでも五月雨式に降りかかる攻撃のおかげで再装填すらままならない状況に追い込まれてしまった。

「うう、メイド長、まだ腕が痛いのですが……」

「あら、ごめんなさい、軽く冷やしましょう」

勝負を喫したその時、メリスは銃を思い切り捻った。それはつまり繋がっているフランの腕も捻られたようなものだ。手を離してそれを回避できなかったがゆえに、フランは右腕を摩りながら若干表情を歪ませる。

メリスも戦いの中とはいえ自分がやった事には責任を持つため、足早にフランに近づくとポケットから氷嚢を取り出してフランの袖を捲って患部に当てた。

「ひゃう、……というかメイド長、どこから氷嚢を……？」

「メイドたる者、主が欲した時になんでも出せなければ話にならないわ」

「それはつまりメイド長の服の中に冷蔵庫があるという事ですか？」

「ふふ、どうでしょう？」

思わしげな表情をするメリスを見ているとあながち冗談に思えなくなってしまう。

メイドとしてメリスが圧倒的に優秀なのは、こういった、先を読めるところなのかもしれない。

自らの主が何かを欲するであろう事を職業本能で察知してあらかじめ用意しておく。今のフランにはとてもじゃないが真似できない芸当だ。そもそもそうだとするとメリスは主だけにとどまらず、フランたちの事も完全に把握しているという事になる。

24時間体制で屋敷内の全ての人の行動を把握しているのか、と想像してしまったフランは目の前でジツと氷囊を見つめているメリスがどこか不気味にすら思えてしまった。

「それはそうと、フラン」

「つと、はい？」

不意にメリスが声を上げたためフランは氷囊を落としてしまいそうになった。

慌てて左手で氷囊を押さえ、顔をメリスに向ける。

「あなた、手加減したでしょう？」

メリスがどこか面白くなさそうな表情をしている。

フランは一瞬返答に困ってしまいが、こればかりは仕方のない事だと割り切って小さく首を縦に振った。

「やっぱりね。どう考えても弾が弱すぎると思ったのよ」

「万が一にも怪我をさせてはいけないと思ひまして……」

「そのおかげであなた自身が怪我をしては元の木阿弥よ？ それにあなたは私に手加減できるほど強くないでしょうに」

そう言われると反論のしようがなくて閉口してしまいが、かといって本気を出せば確実にメリスに怪我をさせてしまうのが分かりきっている。

アフエシアスは魔力を火薬代わりにしているため、込める魔力の量を変えれば威力も変化する。フランは自分の感覚で非殺傷、対人、対物・対魔法障壁と魔力を込める量を意識的に変化させることで威力を制限しているのだ。

当然ながらメリス相手には非殺傷、当たっても人体を貫通しない程度の威力の弾を撃っている。これが対人以上となるとおそらくメリスの持つ剣を砕きかねないほどの威力になってしまう。

大量の魔力を込めればそれ相応の威力を持つため、理論上アフエシアスの威力に上限はないと言える。フランが保有する魔力が尽きるまでという条件付きではあるが、身を守るには十分すぎるものだ。

それに、この平和なご時世、練習、模擬戦以外でアフエシアスの引き金を引くことはまずないと言っている。

「あなたが言いたい事は分かってるわ。だけどそれじゃあなたのためにならないのよ、フラン。教えを乞う者が全力を出さないのでは教える側もどうすればいいのか分からなくなるわ」

「……分かりました。でも人相手には絶対使いたくないですから……」
それは心に決めた事だ。

アフエシアスを使うような事態になっても、絶対に人を殺すような事にだけはしたくない。

何故、自分がこんなものを持っているのか時折不思議にすら思えるが、その理由は思い出せない。

「さて、あちらも終わったようよ」

「というよりそちら待ち、だったんだがな」

メリスが振り返りながらそう言うのとグラントの声が返ってくる。

グラントの隣では満足そうな表情をしているレティアが炎を器用に操って「遅い」という文字を作り出している。

「お嬢様、フランたちも一段落つきしましたし、夕食にいたしましょう」

「ええ、もとよりそのつもりだったわ。しかしフラン、相変わら

「ずとんでもない動体視力ね」

レティアが近寄ってくるとフランの腰にぶら下がるアフエシアスを指差しながらそう言った。

「メリスの剣撃をそれで受け止めるなんて、普通無理よ?」

「グラントさんとメイド長の日々の特訓の成果、ですよ」

「む……なんでそこにあたしが入っていないのよ」

「いや、失礼ながらお嬢様からあたし、何か学びました?」

「言葉から服の着方まで教えたのは誰だと思ってるのよ」

「まことに申し訳ありませんでした、お嬢様」

もはや黒歴史、という単語すら覚えたフランにとってその手の話は自分の赤っ恥をさらけ出すようなものだ。即座に謝って即座にレティアを屋敷の中へと連れていくことにした。

存外早くすべきことも済んだレティアは夕食を食べ終わるとバスルームへ向かっていった。

それを見送るとフランはそそくさと庭に出てガンベルトを外して先ほど出したテーブルの上に置いておく。

しばらく準備運動をしながら夜の少し肌寒い風に慣れようと身体を動かしているとグラントがスーツを脱いだ恰好で姿を現した。さすがに運動するのに仕事着を着ている訳にもいかないのだろう。

因みにフランは普段から来ているメイド服のままだ。

そもそもメイド服自体が非常に動きやすいように作られており、特にファルケン家が使用しているメイド服は見た目よりも実用性を重視しているため、見た目はそれほど華やかとは言えない。

フランはグラントが出てきたのを確認すると袖を捲り、グラントの前に立ちはだかる。

「メリスにやられたのは大丈夫か？」

「問題ないです。あれくらい、ものの数分で完治しますよ」

メリスに捻られた右手首を気遣ってそう聞いてきたグラントにフランはヒラヒラと手首を振ってみせる。フランも自分のこの体質には感謝している。フランがこの屋敷に来た当初は彼女にしてみれば思い出したくもない失敗談がたくさんあるのだが、やはり食器を割ったりしてしまった時に怪我をしてしまう事も少なくなかった。

だが、切り傷程度の傷だと半日もあれば完治してしまうという、驚異的な治癒能力をフランは身に着けているのだ。痛みは伴うのでフランは極力怪我をしないようにしているが、万が一怪我をしても大抵の怪我は自然と治す事が出来る。

それは当然グラントも知っているが、それでも心配してくれるのが彼らしいところ、とも言える。

「それでは、行くぞ」

「はいっ」

グラントの合図と同時に、フランがグラントとの距離を一気に詰め、その顔面に遠慮のない右ストレートを食らわせようとする。グラントはフランの右ストレートを首を捻って回避するとその腕を掴んで自分の後ろへ引っ張り、そのまま放り投げる。

「相変わらず、人を軽々と投げますね……」

空中で体勢を立て直してグラントの背後に着地したフランは悔しげな表情をしてみせる。

それを見たグラントが振り返って笑みを浮かべながら腕をフランに向けて構えを取った。

「女性が軽いと言われるのは褒め言葉だろう?」

「それとこれとは話が別、です!」

再びグラント目掛けて突っ込む。

初撃の右ストレートは先ほど同様軽く回避されるが、今度は右ストレートの直後に身体を反転させてグラントの腹に回し蹴りを食らわせる。一瞬回し蹴りの衝撃でグラントの身体が「く」の字に曲がるが、吹き飛ぶことはなく足でしっかりと地面を捉えている。まるで地面に根を下ろしているかのようにビクともしない。

見ればグラントは腹に決まっていたと思われた蹴りを左手の手の平で受け止めていた。そしてフランの足をがっしりと掴んでフランの身動きを封じている。そして右手をフランの足首に当てると強引に足を回してフランの体勢を崩させてきた。片足立ちになっていたフランに崩されたバランスを取り戻すだけの余裕はなく、なす術もなく地面に倒されてしまう。

「ふむ、少し鈍ったか? 二撃で終わるようではお嬢様はお守りできんぞ」

「グラントさんが敵になったら素直に諦めます、じゃ駄目ですか?」

「むろん、駄目だ」

フランが冗談を言うとグラントが凄みのある笑みを浮かべてその冗

談を一刀両断する。

「いいか、フラン。お前はアフエシアスを持っている。近接戦闘を主とする者に対しては絶対的なアドバンテージを持っているんだ。敵の間合いまで近寄らなければ一方的に敵を倒すことが出来るはずだ」

（いけない、教官モードになってしまいましたか……）

先ほどのレティアの時と同じような口調になったのを感じ取り、フランは内心で後悔してしまう。

こうなってしまうと基本的にグラントは徹底的な鬼教官になり、身体の中でも特に耳が痛くなる始末だ。得られるものはとても多く、勉強になるのだが、精神的な疲弊は並々ではない。

「だが、当然一度敵の間合いになれば距離を取らせまいとして再び自分のペースにするのは困難だ。向こうも必死だろうからな。そんな時、何もできずに防戦一方では駄目だ。そのための特訓だと随分前にも言ったと思うが？」

「はい……、言われたと思います、確か……、おそらく……」

記憶にないが、きっと言われたのだろう。

「では、最低でも10回は私に攻撃し、私の攻撃を凌げるようにしてみろ。メリスよりよっぽど楽だと思うが」

「どっちも楽じゃありませんよ……」

そう言いながらもフランも構えを取る。

自宅通勤のグラントが相手をしてきている事自体、稀なのだ。文句もほどほどに得られるものはどんどん覚える方が得策だ。こう言っただけは語弊があるかもしれないが、フランは頭に入らないため身体に覚え込ませる必要がある。

「よし、では今度は私から行くぞ」

グラントがそう言い一拍置くと、少し足を曲げて力を込めた後フランの足元を狙って蹴りを入れてくる。その蹴りも加減されてはいるが、本気で蹴られれば骨が折れてしまうのではないかというほどのものだ。グラントの蹴りは正確にフランの左足の膝を横から襲い、フランは飛び退いてそれを回避する。関節を蹴りで損傷させ、その後の行動を著しく制限させる予備的な攻撃だろう。

グラントはフランが飛び退くと間合いを開けずにフランが飛び退いた分前に進んでくる。グラントはフランの服を掴みにかかるが、掴まれば確実に投げられることが分かっているフランはそれを払いのけてわずかな隙を突いてグラントの胸部に一撃を加える。

「よおし！」

だがグラントは堪えるどころかむしろ嬉しそうに攻撃を続けてくる。おそらく自分の攻撃を凌いで反撃してくるフランを見て喜んでいるのだろう。

「ありが、とうございます！」

ところがグラントが笑みを深める度に攻撃の苛烈さがうなぎ上りに

なるためフランとしては笑いたくとも笑えない状況になる。

それでも、グラントが本当に加減しているのか分からないくらいにわずかな手加減のおかげでグラントによる一方的な蹂躪にはなっていない。メリス相手にアフエシアスを使った時はフランも加減したが、素手で戦う時は手加減などしている余裕はどこにもない。むしろ手加減などしようものならグラントの鉄拳制裁が脳天に入る危険性すらある。

「ほら、脇が甘いつ！」

「え——わっ！？」

グラントが黒い笑みをして目を光らせている構図を思い浮かべていたせいで注意力が散漫になっていたようでフランの死角から迫っていた蹴りに気が付くのが遅れてしまった。

グラントの蹴りが脇腹に入り、フランの身体が一瞬宙に浮いて真横に飛んでいく。

肩から落ちそうになったところを手で地面を捉え、そのまま片手で側転ぎみに体勢を立て直して顔を上げると目の前にグラントの膝が迫っていた。

「っ——！」

正直、フランは敵の間合いから抜けるのがこれほど難しいとは思わなかった。一息つく事も、当然自分のペースに持ち込むことすらこのままでは出来る気すらしない。

顔を狙ったグラントの膝蹴りを間一髪のところまで両手で防御すると、自分の身体がミシリと軋んだのを感じた。

加減していてこれなのだ。本気を出したグラントに勝てる気がしない。

膝蹴りを防ぐために顔の前で腕を構えたのを見たグラントは一瞬フランの視界が自分の腕で塞がれたのを即座に察知、フランが腕を下した時には姿勢を低くして腰の位置に拳を構えていた。

「45点だ」

小さくグラントがそう呟いた直後、フランは鳩尾に強烈な一撃を貰って昏倒してしまった。

「ん……」

「あら、起きた？」

目が覚めると、視界に髪を下したレティアがいた。お風呂上りで上気した顔でフランに視線を向けているが、その顔は呆れていることをこれでもかというほど強調している。

「お風呂から上がって見たらフランがグラントに背負われてるんだもの。想像できたとはいえ、相変わらずね、あなたは」

自分が自室のベッドに寝かされている事に気が付き、身を起こそうとお腹に力を入れると鈍痛が走る。服の前を捲って自分の腹を見ると、うつすらと紫色の痣が出来ている。

「グラントはさすがに帰らないといけない時間だったから、あたしがあなたの看病を引き継いだの。グラントが謝っていたわよ、いつも手加減できずすまない、ってね」

「また、負けてしまいましたか……」

フランが残念そうに首をもたげる。

するとレティアが読んでいた本を閉じてベッドから立ち上がるとフランを見下ろす。

「あなた、多分自分が何をしているか気が付いてないようね」

「どういう、意味ですか、お嬢様？」

「あのね、グラントが手加減出来ないくらいあなたは強いっていう事よ。メリスにしても同じ、あからさまな手加減が出来るほど、あの2人にも余裕はないのよ。グラントの特訓は確かまだ半年かそこらでしょう？ それでここまで出来ているんだから、あなたは自分を誇っていいのよ」

レティアは「そしてそんなメイドをあたしが誇りに思うの」と付け加えると満足げに頷く。

そこでフランは初めて壁掛けの時計に目をやり、時計の針が0時を指そうとしていた事に気が付いて目を見開いた。

「お、お嬢様っ」

「あゝ、分かってるわよ。明日もいつも通り起こしてくれて構わないわ。まあ、あなたが起きれたら、の話だけど」

「すみません、あたしなんかのために夜更かしをさせてしまって…」

フランはレティアに向かって頭を下げる。もとよりここまで従者の事を考えてくれる主も珍しいだろうが、それに甘んじている訳にはいかない。

「良いのよ、あなたの寝顔、可愛かったし」

「はい？」

ボソツと言われた声が聞き取れず、つい聞き返してしまったが、レティアは上気した頬を隠す様に部屋の扉の方に歩き出してしまふ。

「そ、それじゃ、また明日ね。お休みフラン」

「あ、おやすみなさい、お嬢様」

そそくさと出ていってしまったレティアを呼び止める事も出来ず、ただベッドで中途半端に身体を起こしていたフランであったが、ふとある事に気が付きもう一度時計に視線を向ける。

午前0時、フランがグラントと特訓を始めたのが8時過ぎ頃だとすると4時間は経っている。その間ずっと風呂に入っていたわけはなく、なぜレティアが頬を上気させていたのか不思議になってしまう。

「……………なんなんでしょう？」

さすがに聞くわけにはいかない、と思ったフランはベッドに横になり、枕元にある明かりを消して明日に備えて眠る事にした。

「くっ、我ながら情けない……」

レティアは自室に戻るとそのままベッドにダイブして枕を抱いていた。

「あの寝顔は反則級よ……。女のあたしですら見惚れたじゃない……」

レティアはそんなことを呟きながら布団の中にもぐり込む事にした。

第05話 メイドは用意が良くなくては（後書き）

はい、25日も執筆活動をするハモニカですw

とりあえず、レティアが妙な空気を醸し出してますね、そろそろ初投稿時に出し惜しみましたタグを作る頃合いですね……

誤字脱字報告、ご感想をお待ちしております。

第06話 メイドによるちょっと(?) (学園モノ) (前書き)

ちょっと

という言葉は便利ですね W W

とりあえず、ちょっとなんですけど、これがどれくらい伸びるかな
あ W W W

あ、皆様、明けておめでとついでにいます (遅っ！)

第06話 メイドによるちょっと(?)学園モノ

「フラン、ちょっといいか？」

妙な夢を見た気がしたあの日から数日経ち、もはやそんな夢を見ていた事すら記憶の彼方に飛んでいつてしまった頃、フランが午前の仕事を終わらせ早めの昼食を取っているとグラントがやって来た。

「どうしたの、グラント」

一緒に食事をしていたメリスとクレアもグラントがやって来たのを見て食事の手を休めて顔をグラントに向ける。

「いや、大した事ではないんだが……、いややっぱり大した事か……、まあそんな事はどうでもいいんだ。フラン、1つ頼み事をされてくれないか？」

いつになく歯切れの悪いグラントは心底心苦しそうにフランを見つめている。

昼食の途中ではあるが、クレアのようにお喋りをしながら食べていたわけではないので食べ終わるのにそう時間はかかりそうにない。また午後もこれと言って重要な仕事があるわけでもないのに、フランはそそくさと皿の上に残っていたサラダを口の中に放り込むとよく味わってから飲みこむ。

「んむ……、ご馳走様でした」

両手を合わせてそう言つとフランは立ち上がつて服を軽く叩いてからグラントに向き直る。

「分かりました。それで頼み事とは？」

「すまん、食事中だったのに」

グラントが謝ってくるのでフランは小さく首を横に振つてみせる。

「あたしに出来る事なら、なんでも言つてください、グラントさん」

そしてニツコリと笑みを浮かべてみせるとグラントも少しは気分が良くなったのか「本当にすまん」と言いながらも手に持っていた小さな封筒をフランの前に差し出してきた。

「これは……？」

「お嬢様の忘れ物、だ。本来お嬢様の時間割に合わせて私が学生バッグに教科書を入れているのだが、どうも昨夜お嬢様はベッドの上で宿題をなされたようだな。枕とベッドの隙間に挟まっているのを先ほど見つけたんだ」

フランが中身を見ると、眠気に負けつつも必死に問題を解いていたのだろうノートが入っていた。途中から文字と判別するのが難しくなっている部分もあるが、最後まで解くだけの執念がその字に滲み出ている。

「幸い、この宿題が出された授業は今日の午後、急げば昼休み中にお嬢様に届ける事が出来るはずなんだが……」

そこでグラントが言いよどむ。

「すまないんだが今日は妻と約束があつて、午前で切り上げなければならんだ。私の尻拭いをさせてしまふわけなんだが、お嬢様に届けてくれるか？」

なるほど、とフランは内心で納得していた。

本来こういうミスは自分で取り返さなければならない。基本的に自分の行動に責任を持たなければ社会人として生きていくことは難しい。

今回も、グラントのミスであるから、レティアのノートを届けるのもグラントがやってしかるべきことだ。

おまけに、届けに行けない理由が私事とあつては、グラントも頼むに頼みづらい思いがあつて当然なのだろう。

「確か、お嬢様の学園はグラントさんの家の正反対だったものね」

メリスが天井を見上げながら「これはちょっと無理かしらねえ」と呟いている。

「分かりました。その頼みはあたしが引き受けますから、グラントさんは奥さんの所に行ってください」

フランは考える間もなくそう言う。

グラントには言っても言い尽くせないだけの恩がある。これくらい

の頼みを引き受けられないほどフランは心の狭い人間でも、恩知らずな人間でもない。

フランが躊躇いなくそう言うのとグラントの表情が途端に明るくなる。おそらくは奥さんとの約束を破つてでも仕事を優先させる覚悟であったのだらう。愛妻家で知られるグラントにしてみれば、それはあまりにも酷な仕打ちだ。

「フラン、お前のような部下を持てて私は嬉しいぞ！」

「はいはい、分かりましたから頭を撫でないでください」

カチューシャごとワシヤワシヤと撫でられるのでフランの髪の毛が乱舞しようとしている。ついでに言うのと地毛を隠すための茶髪のウィッグが取れそうになるので必死に頭を手で押さえる。

「ふう、これで安心して家に帰る事が出来る……」

グラントがそう言いながらネクタイを外そうとすると、フランが急に表情を硬くする。

そして「しまった」という心の声が遠くからも分かるほど分かりやすく顔を手で押さえて俯いてしまう。

「どうしたの、フラン？」

メリスがフランの顔を覗き込むとフランが大きなため息をついたのがその場にいた全員の耳に聞こえてきた。

「グラントさん……」

「ど、どうした、フラン」

先ほどとは打って変わってトーンの低い声にグラントが動揺している。

「あたし……」

フランはそこで大きく間を取る。

「道を知りません」

グラントの安心感は地平線の向こう側に吹き飛ばされてしまった。

「はあ、迂闊、とはまさにこの事を言うのでしょーうね」

小さくため息をつきながらフランは町の通りを歩いている。

手にはグラントから手渡されたレティアの宿題ノートが入った封筒と、小さなメモ用紙がある。メモ用紙にはグラントが即席で書いた屋敷から学園までの簡単な地図と、レティアの学年、クラス、その

他諸々の重要事項が書かれている。

また、フランが生徒の関係者である事を証明するための手紙をメリスが書いてくれたため、呼び止められるような事があっても問題はないはずだ。

とはいえ、フランが目立つのは致し方のない事だ。

「うう、悪意はないとはいえ、こつジロジロと見られては……」

フランのテンションが右下がりな事この上ないのにはこの理由が大きい。

この町、ヘラは王都グレイウスのベッドタウンのような位置関係にあるため、政府関係者などこの国の中枢を担うような人々の家が数多く立ち並んでいる。そういった大きな屋敷を中心に徐々に町が大きくなり、今では商業の町としても有名になっている。

そういう訳であるから、この町の人々も大きな屋敷やそこに仕えているメイドや執事にも見慣れている。メリスやグラントも外へ良く出かけるため、すれ違いざまに挨拶を交わしたり、主婦の井戸端会議に参加している事だろう。

クレアは姉の眼を盗んで休日近くの通りで主婦たちに癒しを提供しているようだが、それでいいのか、という疑問はある事是否定できない。

デックスにしても、近くの市場には毎日のように出入りしているし、時には市場の威勢のいい男性と飲み比べまでしているというのだから驚きだ。あの寡黙なデックスがその時ばかりは声を張り上げるそ

うだが、あいにくフランはその現場を見たことがない。

だが、フランは彼らと比べると外に出る機会が多くない。

基本的にフラン自身積極的に外へ出ていく事もなければ、外に出ていかなければならないような事態にもならなかった。

そのため、今回の件はある意味自分にとって社会見学の意味もあるのではないかとフランは思っていた。

「ですがこれは予想外です……」

気にしなければいい、と言われればそれで終いなのだが、フランは周囲から自分に注がれる視線が気になってしまつて落ち着かない心境だった。

人の視線を集める事は致し方のない事だが、その大半がフランの顔の左半分を大きく覆っている眼帯に注がれているのがあまり心地よいものではなかった。

つい、視線を向けている者たちが内心で何を考えているのか勘ぐつてしまうのだ。

グラントが齒切れを悪くしたのは、こういう事も想像していたからなのかもしれないが、もはや手遅れ、フランは諦めて視線をへし折るような早歩きで人通りの多い通りを突き進むことにした。

（しかしお昼時、とあつて随分と賑わってますね……）

時折、進行方向が人ごみで見えなくなることすらあるほど、人の往

来が激しい。ベッドタウンなどではなく、商業の町、の方がしつくりくる光景だ。

大きな荷物を抱えている行商人や、旅姿で歩いている人も良く見かける。王都に近いだけあって、そこを目指す者、逆にそこから地方へ向かう者がヘラの町を通過しているのだらう。

「よう、そのメイドさん、ご主人に良い野菜を提供しないかい？」
威勢のいい男性がフランに向かって大きな大根を見せつける。

地元の人たちはメイドや執事を見かければこういう言葉を使って自分の所の商品を買ってもらおうとするのが慣例らしい。とはいえ、ファルケン家では食材の調達場所、原産地は全てデックスが管理しているのでデックスに頼まれでもない限り食材の調達はほとんどしない事になっている。

フランは男性に「また今度」と穏やかな笑みを浮かべて丁寧に断りを入れると八百屋の前を通過していく。

「はあ、遠い……ってあれ？」

しばらく歩いていると、ふとフランは足を止めた。

そして辺りを見渡しては手元のメモ紙と風景を見比べる。

「……………」

地図に書かれている「市場」の文字を見て、フランは後ろを振り返り先ほど通り過ぎた八百屋の反対側にある市場を確認する。

「あそこが、ここだから、……こっちか」

位置関係を修正して地図を横にして自分が歩いている方向と地図の道を一致させてみる。そうしてようやく自分の居場所を確認すると、再び歩き出す。

周囲に気を取られ過ぎて自分がどこを歩いているのか分からなくなっていたのだ。

「こちらの方は商業区、とでも言うべき場所ですね……」

ファルケン家の屋敷がある一帯は今フランが歩いている場所ほど賑やかな場所ではない。ベッドタウンというだけはある、閑静な住宅街と屋敷が立ち並んでいる。ヘラの町を二分するとなると、商業区と住宅街に分ける事が出来そうだ。地図上だと、レティアが通う学園は商業区の端の方、ヘラの町自体の端に位置している。学園という性質柄、広大な土地を必要とする以上、町の中心には作りづらかったのだろうか。

商業区を歩いていると、どこからともなく香ばしい匂いが漂ってくる。

レストランや喫茶店、露店や屋台が軒を連ねる一帯にはまだ幼い子供を連れた親が昼食を外で取ろうと行き交っている。子供がしきりに何かをせがんでいるのを母親が困ったような表情であやしているのが微笑ましい。

「ふむ、今度中を覗いてみましょうか」

香ばしい匂いの正体が気になったフランはメモ帳を取り出して忘れないように今日の日付、場所、要項を慣れた手つきで書き込んでいく。メリスやデックスに聞けばおそらく匂いの正体は分かるだろう。

「……よし。っとこんなことをしている場合ではなかった」

ポケットから懐中時計を出して時間を確認すると、丁度正午になるうとしていた。

そしてそれほど遠くない場所から正午を伝えるチャイムが聞こえてくるのがフランの耳に入ってくる。

「午前の授業終了を伝えるチャイムですね。確かお嬢様の学園は1時に午後の授業が始まるはず、少し急がなくては……」

メモ帳をポケットにしまうと、フランは少し歩く速度を上げて通りを歩くことにした。

「ここですね……」

目の前には巨大なレンガ造りの建造物がそびえ立っている。

4階建ての建物は横に長く、それだけでもこの学園の大きさを窺い知る事が出来る。

正門から敷地内に入ると、すぐに「事務室」と書かれた看板を見つけ、次に「外来者受付」と書かれた矢印の看板も見つける。

フランはそれに従って敷地内を進んでいく。

校舎と正門の間には大きな噴水があり、冬が過ぎてまだ肌寒いはずなのに、見ている人にその噴水は温もりを与えてくれている気がした。

しばらく道なりに進んでいくと、小さな詰所のような建物が視界に入った。警備員と思われる制服を着ている男性が2人、外で談笑しながら煙草を吸っている。

フランはそれを見つけると足早に2人に近づく。実は午後の授業が始まるまであまり時間がないのだ。曲がり角の度に地図を確認していたら思いのほか時間がかかってしまった。

「あの、すみません」

「ん、なんだい？」

2人組の男性のうち、若い方の男性がこちらに振り返り、フランを

確認すると背後にいた初老の男性警備員とほぼ同じタイミングで煙草の火を消してくれた。

やはり未成年の多い学園ではそういった気配りも必要なのだろう。

「実はお嬢様の忘れ物を届けに来たのですが、どこに行けばいいのかわからないのですが……」

「ああ、学生の関係者の方ね。学生の名前は？」

「レティア・ファルケン」

「ほつ、ファルケンってあのファルケンかい？ レッドバロン 赤男爵の？」

初老の警備員が驚いたような表情をしてフランに聞き返してくる。

「それが大臣である旦那様の事を意味しているのなら、それで間違いないかと。何か問題でも？」

「いやいや、そんなものあるわけない。あの方は教育現場の言葉も聞いてくれるし、環境改善に精力的に活動してくれているんでね。我々からしてみれば神様みたいな人だよ」

初老の警備員が笑顔でそんな事を教えてくれている間に若い警備員がどこかに連絡を取って戻ってきた。

「レティア・ファルケンは4年C組で間違いないね？ この校舎を通り抜けて、校庭に面した校舎の3階だよ。あとこれ、入校許可証、これを首から下げてれば何か言われる事もない。帰る時にここに立ち寄って返却してくれ」

「分かりました、ありがとうございます」

懇切丁寧な2人の警備員に一礼してフランはその場を後にする。少し進んでふと後ろを振り返ってみると、初老の警備員が「その先」と指で校舎の方を指差しながら手を振っている。

「ふふ、良い方たちです」

フランはつい頬を緩めてしまった。

普通の人とは違い、2人は一度もフランの眼帯を気にするそぶりを見せなかった。フラン自身、この眼帯はコンプレックスでもなんでもないし、むしろ大切にしている物なのだ。

とはいえ通りであつたように好奇の目で見られるのが楽しいという趣味も持ち合わせていない。そういう点では、あの2人はフランにとって好感の持てる人間性を持ち合わせているようだ。

「さて、この校舎を抜けて校庭に面した校舎の3階、でしたよね」

忘れる前にメモ帳に書き込み、校舎の正面玄関から建物の中に入る。

下駄箱が無数に並んでおり、廊下の方からは楽しい声や廊下を走る足音が聞こえてくる。昼休み、という事で学生たちが昼食を取っているのだろう。

下駄箱の列を抜けると、廊下に出る。しかし、この建物に用があるのではないのでそのまま真っ直ぐ進んで校庭に繋がる通路を進んでいく。

「ここが校庭ですね」

真っ直ぐ進むと下駄箱のあった玄関の反対側の出口に出る。そこからは広い校庭が一望でき、その周りに立ち並ぶ校舎も見渡すことができる。

そう、その周りに立ち並ぶ校舎を見渡すことができるのだ。

「……どれですか」

苦笑いしか出なかった。

校舎の屋上に設置されている時計で時間を確認するも、全ての校舎の3階を1つひとつ確認しているほどの時間はなさそうだ。

「ど、どうでしょう……」

「くあく、眠い……」

長身の男が辺りをはばからず大きな欠伸を1つしながらこの学園、グローリア魔法学園校舎の廊下をぶらぶらと歩いている。

脇には「出席簿」と書かれた冊子を抱え、その手にはどす黒いコーヒーの入ったマグカップを持っている。

「ええと、午後の授業は何だったかな、……あく、数学か、宿題出してたな」

面倒臭そうに頭を掻き、「回収面倒だな……」などとおよそ教師とは思えないような暴言を呟きつつ重い足取りで歩いている。

「はあ、夜勤で教師はキツイな……うん？」

ふと顔を上げて前を見ると、廊下の途中で右往左往している見慣れない姿の少女を見つけた。

メイド服を着ているところを見るとこの学園に通う学生の家仕えている者なのだろうか、と見当をつける。

（とすると、迷ったのか？ ……っ！）

右往左往していた少女の顔を見て男は息を呑んだ。

整ったその容姿の左半分を黒い眼帯で覆っているのだ。何をしたらあんな事になるのか、という疑問も浮かんた。

（とはいえ、放っておくわけのも、いかんわなあ……）

男は小さくため息をつくとその少女に近寄って声をかける事に決めた。

（厄介事にはならないで欲しいんだが、なあ）

「おい、そのメイド、誰かに用かい？」

「ひゃわっ!？」

至極丁寧に言っただつてもりだつたのだが、少女はビクリと肩を震わせた。

（そこまで驚かなくても……）

男は地味にショックを受けたりもしていた。

「おい、そのメイド、誰かに用かい？」

「ひゃわっ！？」

不意に背後から声をかけられ、飛び上がりそうになった身体を必死に抑え込んだが、身体が震えたのはおそらく気づかれただろう。

フランが振り向くとそこにはフランのウィッグと同じ茶髪の男性が若干苦笑いしながらこちらに向いて立っていた。おそらく予想以上に驚かれてショックだったのだろう。

「あ、あの……、この学園の教師の人、ですか？」

勘を頼りに入った1つ目の校舎がハズレで、職員棟と特別教室棟が1つになったものだと分かって動揺を隠しきれなかったフランは若干潤んだ目でその男性を見つめる。

「あ、ああ、そうだが、どうしたんだ？」

「これを、お嬢様にお届けにあがったのですが、お嬢様の教室が分からなくて、でも時間がなくて……」

「主の忘れ物、と言ったところかい？」

男性の言葉にフランは小さく頷く。

すると男性は「学生の名前は？」と聞いてきたのでフランは先ほど警備員に伝えた時と同じようにレティアの名前を出す。

すると男性は一度目を見開き、笑い出した。

「す、すまん、君がおかしくて、とかで笑っているんじゃないんだ。くくっ、だが君は運が良い。あの健康優良児のクラスの担任は俺だ。ついて来い、案内しよう」

「ほ、本当ですか!？」

フランが表情を明るくして男性にそう聞くと、男性は脇に挟んでいた出席簿をフランに見せた。

そこには「4年C組出席簿」と黒く太い字ではっきりと書かれていた。

「俺はジョブ・メルケン。よろしくな、ファルケン家の、ええと……」

「あ、フランと申します。以後お見知りおきを」

丁寧に頭を下げると、ジョブのくぐもった笑い声が再び聞こえてくる。

不審に思っ て顔を上げると、マグカップの中のコーヒーが零れないように必死に腕の震えを抑えるジョブの姿が目に入る。

「そ、そういう堅苦しいのは苦手だな。もっとフランクにいこう。よろしくな、フラン」

ジョブはそう言う と気を取り直して「こっちだ」と廊下を歩きだした。

（可笑しな人だ……）

レティアの担任、ジョブに対するフランの第一印象はそんなものだった。

第06話 メイドによるちょっと(?)学園モノ(後書き)

はい、そういうわけで、学園モノ?っぽい事が始まりました。

まあ、主人公がズカズカ入るような感じにはしない予定なので「ちよっと」をつけさせていただきましたが、今後たびたび舞台が学園になるのは多分避けかなw

だってネタに事欠きませんからw

そういえば、活動報告にも書いたんですが、ちよっと愚かな事を模索中です。

なので更新スピードはまったりゆったりになると思います。とはいっても根が真面目なハモニカですから(自分で言うか!w)5日も1週間も空けることはないですw

まあ、気長にやりますわ(遠い目)

ていうかもはや時すでに遅し?(おいっ!!--)

誤字脱字報告、ご感想お待ちしております。

第07話 メイドの偏差値は65超（前書き）

なまじリアルな数字すぎましたね…w

まあ、現実世界の偏差値と比べるのもどうかと思いますがね。

そういえば、ボチボチ受験シーズンですか。

受験生の皆様、頑張ってください。

では、どうぞ。

あ、あと後書きにてちょこっとお知らせ。

第07話 メイドの偏差値は65超

「んん、次は数学か、宿題は昨日ギリギリに終わらせたし大丈夫、
つと」

レティアは昼食を済ませて満足げな笑みを浮かべて自分の席に戻る
事にする。教室の中は学生同士が談話していて存外騒がしいが、レ
ティアは慣れているためそれには意も介せず席に座ると机の横に引
っかけていた学生バッグを机の上に乗せて中から次の授業で必要な
教科書を取り出す。

「あ、レティ宿題やってきたかしら？」

教科書を机の上に置くのとほぼ時を同じくしてその机の前に1人の
少女が両手を置いて身を乗り出してきた。

レティアと同じ赤い髪を短く切りそろえている少女はレティアに顔
を近づけると屈託のない笑みを見せてそう尋ねてくる。

「……レイナ、あなたまた宿題忘れたの？」

「うぐつ、直球ね、レティ……」

大げさなりアクションと共にレイナと呼ばれた少女が頂垂れる。

「いつもはあたしと張り合う癖に、宿題は忘れるのね」

「く、悔しいけど反論できないわ……。で、でもね！ やって来たのよ！ ただ枕の脇に忘れてきちゃったのよ！」

「うっかりは相変わらずねえ」

レティアは同情する気もさらさらないので、むしろ若干口元に微笑を湛えながら頬杖をつく。

レイナは何かとテストや競技があるとレティアと勝敗をつけたがるライバルだ。

だがライバルだと思っているのはレイナの方だけで、レティアからしてみれば気のいいクラスメイトぐらいにしか見ていない。

学力も悪くなく、レティアと競っているだけあってレティアと同じくらいの学力を持っている。当のレティアはといえば、学年全体で見れば中の上、無難な成績、というのが分かりやすいだろうか。

「う、うるさいわよ。ってそんな事はどうでもいいから、答え見せてくれない？」

「なに、答え写す気なの？」

呆れたような目でレティアがレイナを見ると、レイナは心外そうな表情をして胸を張る。

「私がそんな事をするはずないじゃない。午前中にやり直したんだけど、記憶の中の答えと一力所合わないところがあるのよ。それで確認しようと思っただけよ」

「……まあ、そういう事なら良いけれど」

答えを写されるわけではないと分かったレティアは小さくため息をつく。バッグの中から宿題を書いてきたはずの数学のノートを探し始める。

ところが、数秒もせずにレティアの身体が硬直する。

「……………あれ？」

「ちょっとレティ、早くしてよ、授業始まっちゃうわよ」

レティアの背中を冷や汗が流れ落ちる。

バッグの中にある数冊のノートを全て机の上に出し、一冊ずつ丁寧に確認するが、数学と書かれたノートが見つからない。

今度はバッグをひっくり返して中に引っかけたないか確認するが、落ちてくるのはその他の教科書のみで、薄いノートは落ちてこない。

「ま、まさか……………」

レティアの顔からどんどん血の気が失せていく。

まさか、今さっきまで笑っていた人の不幸が自らに降りかかるなんて、レティアには信じられなかった。

「あら？ レティ、もしかして、忘れたの？」

レティアの慌てっぷりから事態を察したのだろうレイナが皮肉たっ

ぶりの笑みを浮かべてレティアを見下ろしてくる。

だが、それに反応する余裕すらレティアの脳内からは吹き飛んでしまっていた。

「どうして、確か昨日ベッドの上で宿題をやって、そのまま寝てしまっただけ……まさか!？」

レティアは1つの可能性にたどり着いた。

寝ている間にノートが枕の下にでも隠れてしまい、朝グラントがそれを見つけられなかったのではないか

、という可能性だ。そうだとすれば、普段万が一にも時間割を間違えて教科書・ノートをバッグに入れるような事はしないグラントがノートだけを入れ忘れるはずがない。

「ってそれだけ分かっててもなんの解決策にもならないじゃない」

時計を見ると午後の授業はあと数分で始まるうとしていた。

到底走って屋敷に戻ったところで間に合うはずもない。

「ジョブ先生は普段緩い代わりに宿題忘れとか厳しいから、……まあ、どんまい」

「物凄く慰められた感じがしないわね……」

レティアの担任ジョブ・メルケンは基本的に授業中は自由放任に近いやり方をしている。具体的には黒板に「自習」と書いてプリントを配り、学生同士が相談して問題を解くようにしているのだ。そし

て当の本人は教卓に突っ伏して睡眠を取っている事が多い。

4年生になってももう少しで進級という頃合いだが、まともな授業が行われた回数は両手の指で足りるかもしれない。

そして宿題を若干多めに出し、プリントの内容をしつかりと理解できているか確認するのだ。定期的にテストも行われるが、テストよりも宿題に成績が大きく関わっているため、このクラスでは宿題を忘れる者はそれこそ滅多にいない。

ジヨブは宿題を忘れた者には出していた宿題の数倍の量を再提出するよう言う事が多い。それが目に見えているからこそ、レティアの動揺は並々なものではない。

「どどど、どうすれば……」

そしてレティアが右往左往している間に数分の時は流れ、無情にも午後の始業ベルが鳴り響いた。

「あらら、人の不幸は蜜の味とはまさにこの事ね」

「レイナ」

ジト目で見つめても今のレティアの表情に迫力は微塵もない。

始業ベルが鳴り、外にいたクラスメイト達が早歩きで教室に戻ってきて自分の席に着くと教科書とノートを机に出し始める。

そして全員が席に戻った頃を見計らったように教室の前のドアが開いてジヨブが姿を現した。

「よし、全員いるな―?」

1人ずつ確認する事はまずないジヨブは教壇の上からクラスの中を軽く見渡すと出席簿を開いて網の目状の出席欄に大きく「全員出席」と書き込んでいく。この出席簿を垣間見る人間がいれば、ほぼ全ての日において同じようになっていいることを知る事が出来るだろう。

「……さて、と。宿題があつたんだつたな。机の上に出してくれ、回収に回る」

そう言うとジヨブは端の席から1人ずつ宿題が書かれたノートを回収していく。回収する際に今日の課題と思しきプリントを渡していくと、渡された学生から即座に椅子を引っ張って周囲のクラスメイトと相談を開始する。

(あたしの馬鹿! せっかく苦労してやったのに……)

レティアは己の不注意とグラントを恨みながら頭を抱える事しかできず、そんな事をしている間にジヨブはレティアの席までやって来た。

「うん? レティア、宿題はどうした?」

ジヨブが机の上に教科書しか出されていないレティアを見て若干声のトーンを落とすのがレティアには分かった。

「あ、あのう、その……、忘れました……」

「そうか、ではあれはお前の連れか」

「連れ……………」

ジョブが何を言っているのか分からずジョブが指差す教室のドアの方に目をやると、そこには見慣れた少女が少し居づらそうな表情をしながら立っていた。

「ど、どうも、お嬢様」

その時、あたしにはフランが女神に見えた、と彼女は後にそう語っている。

「な、なぜこうなったのでしょうか……」

フランは今、現在進行形で自分の身に降りかかっている事態を理解できずそんな事を呟いてしまう。

「良いじゃない。あなただって本来学校に行ってなきゃいけない年齢なんだし」

隣でレティアがノートを取りながら笑みを見せる。

そう、隣で、ノートを……取りながらフランと会話をしているのだ。

「おい、余計なお喋りはせず、課題をやれ」

教卓に突っ伏しているジョブが顔を上げすらせず床に向かってそう言うのが聞こえ、フランも机に向き合う。

（あ、あたしはお嬢様にノートを届けに来ただけのはず……）

それが、いつの間にかレティア含めこの4年C組の学生と共に今日の課題を解く羽目になっている。

きっかけはジョブに「どうせなら主の学生生活でも見ていったらどうだ？」と言われた事だった。この学園の学生には上流階級出身の者も多く、あまり気にすることはない、と言われたが、クラス全体から向けられる好奇の視線にはつい後ずさりしそうになってしまった。

それはともかくとして、レティアが課題をクラスメイトと共に解いている様子を教室の後ろで眺めているだけのはずだったのだ。

ところが、授業が始まってしばらくすると、教室全体から唸り声が響き渡り始めた。あまりに暇だったので立ったまま目を開いて仮眠を取るというクレア直伝の休憩方法を取っていると突如そんな声が聞こえてきたのでフランは飛び上がりそうになって目を覚ますことになった。

どうもジョブは習った範囲の問題ではなく、まだ習っていない内容もプリントに盛り込んでいたらしく、教科書片手にクラスの全員が頭を抱えていた。

その異様とも言える状況で後ろでただじっと立っているだけというのも耐えられなかったフランはそつとレティアの背後に近寄るとレティアの肩越しに教科書とノートを見比べ、どのような問題を解いているのか見てみる事にした。

それが、運の尽きだったのかもしれない。

フランはメリスから必要最低限という名の必要最大限の勉学を可能な限り叩き込まれている。物忘れがいかに激しく、ちょっと時が経てば忘れてしまうフランでも、何度も反復して行われれば徐々に脳裏にこびり付いていく。

丁度、そのわずかなこびり付きにレティアが解いている問題が一致してしまったのだ。

「ああ、そこはこの定理を使って……」

と、呟いた瞬間、クラス中の学生が顔をバツと上げてフランに視線を向けてきた。目の前のレティアも後ろに振り返ってフランを信じ

られない、という表情で見つめており、次の瞬間には何故か余っていた椅子を1つクラスメイトが目にも止まらぬ速さでレティアの隣に置く。レティアがフ란の両肩に手を置いて有無を言わせず椅子に座らせ、拒否を許さない視線でフ란にこう言った。

「あたしにも分かる様に教えて」

それはクラス全員の総意だったらしく、全員がレティアとフ란の周りに集まっていた。

そして、今に至るわけだ。

（あたしが解いたらお嬢様の為にならないですよね……）

あくまでサポートに徹する事に決めたフ란は物凄く遠まわしな言い方を使ったりする事なるべくレティア自身の頭で答えにたどり着けるようにしていたつもりだったが、そのうちフ란ですら分からないような、というよりは記憶にない定理や法則を使う問題が現れ、レティアと共に教科書との睨めっこに突入した。

「だ〜っ、駄目だ。教科書見たってなんにも分からない!」

「落ち着け、ここで諦めたら宿題が解けないぞ!」

教室内はまるで戦場だ。

次々と難解な問題の前に倒れていくクラスメイトを生き残りが必至に起こそうとしている。

「うう、ごめん皆、私、もうダメ……」

「メ、衛生兵^{メディック}ーッ！」

(……実は余裕なんでしょうか……)

チラリと教卓を見れば、ジョブは相変わらず規則正しいびきをしながら寝ている。これで教師が務まっているのが不思議でならない。

「ちょっとフラン、よそ見しないで手伝って」

「あ、はい、お嬢様」

レティアがノートをレティアに見せ、途中までは解いたが行き詰ってしまったため息をつく。フランも進行形で勉強しているため、ヒントも何も出すことは出来ず、純粹に答えを導こうとするしかなく、教科書の例題とレティアのノートを見比べる。

「うーん、教科書の例題とは問題の質が違いますね……」

「ジョブ先生は基本的に応用問題しか出さないからね。今までに習った事とかも混じって大変よ」

「そうですか、……あれ？」

ふと、レティアの言葉に引っかかる所があったフランは顔を上げてレティアの顔を見る。

「お嬢様、教科書の目次を見せてもらっても？」

「え、ええ、良いわよ」

レティアから教科書を渡してもらい一番最初の目次のページを開く。そこには習う事が章にして分けられており、テーマごとに統一されている。それを目で追っていくと、ある一点でフランの視線が止まる。

「これです、お嬢様。これまでに習った事との混合例題。この問題もあまりに過去に習ったので気が付かなかったものと掛け合わせて問題を作ってるんじゃないですか？」

毎日ちゃんとした授業をしていれば過去の事も忘れずに頭の中に残っているかもしれない。だがジョブのやり方ならすっかり復習しないと忘れてしまうだろう。

それを見越してジョブも問題を作っているのかもしれない。

「はゝ、なるほど。ちょっと待って」

ノートを自分の目の前に置くとレティアがノート最初の方にページを開く。教科書を見るよりも、ノートで必要なところをかいつまんだ物を見た方がレティア自身に分かりやすいだろう。レティアがノートを見直している間にフランは教科書を見直し、結びつけることが出来るようなものがないか探してみる。

「っ！ あった、フラン、これじゃない？」

レティアがあるページで止まり、プリントをノートの上に置いてそこに書かれている法則を目で追いながらも一度問題を解き直していく。

どうやらその様子に気が付いたクラスの面々がレティアのノートを覗き込んでいつ頃のものか確認している。

「……お、おお？　おおおおお？」

レティアの声が徐々に高揚していく。

「来た！　解けたよ、フラン！　まともな数字が出てきた！」

「本当かレティア！？　皆の衆、待てば海路に日和があつたぞ！」

その瞬間、レティアの机に学生が群がってきたのは言うまでもない。

「ふいー、今日は助かったよ、フラン」

「いえいえ、お嬢様の努力の賜物です」

結局、授業の最後までフランはレティアに付き合い、気が付けば3時を回っていた。

この日の授業はそれで終わりだったので、フランはレティアと共に屋敷に帰る事にしたのだ。

「でも、フランはクラスの救世主になったわね」

「そんな大それたものじゃないですよ……」

フランは帰り際にクラスの学生に呼び止められ、感謝の言葉をかけられた。フラン自身はレティアを手助けしようと思っていただけだったのだが、図らずもクラス全員を宿題が解けないかもしれない、という不安から解放したため、フランの周りに集まると頭を下げてきた。

中には涙を流している者すらいたのだから驚きだ。

因みに、その間もジョブは寝ていた。どうも彼は夜勤の仕事をしているらしく、その疲れで昼間は常にあのような状態だという。

（もう少し身体を労わればいいのですが……）

「ふふ、あたしのクラス、どうだった？」

「活気があって、団結力が強かったですね。お嬢様もクラスの輪に

入れているようでしたし、良かったです」

「む？ 後半なんだか複雑な気持ちになったんだけど？」

「気のせいです」

「……ま、そういう事にしてあげる」

妙な間があったがレティアは笑顔になってそう言う。

「それにしてもフラン、いつ勉強してるの？ メリスだって忙しいでしょうし、あなた結構早く寝てるじゃない？」

レティアが思い出したようにそう訊ねてくる。

確かに、いくら昼間にそれほど仕事がないとはいえ、レティアが習っているような事の一步、二歩先に行くような教育を受けているとなればそれ相応の時間が必要だろう。レティアから見れば、フランはそれほど時間的余裕を持ち合わせていないように見えるのかもしれない。

「お嬢様が眠った後も、結構起きてるんですよ？ とはいっても日付が変わる前には寝ていますけど。メイド長に1週間分とか3日分とかまとめて問題を作ってもらって時間をかけて解いているんです」

「解いているあなたもだけれど、メリスもすごいわね……」

「あたしはメイド長が眠っているところを見たことないですし」

「あ、あたしもかも……」

主の前で寝るような事はないだろうが、それ以外のいつ何時も、メリスが眠っているところをフランは見たことがない。どんなに早い朝だろうと、どんなに遅い夜だろうと、メリスはいつも寝ぼける事もなく起きて仕事をしている。

むしろ仕事をしていない時を食事の時以外見たことがない、と言っても過言ではないだろう。

「メイド長がいるからこそ、今のあたしがあるようなものですね」

「ふーん、まあ、あたしとしては良い相談役が見つかったから良かったけどね」

「それは良かった。メイド長なら懇切丁寧に教えてくれるでしょうね」

フランがそう言うのとレティアがキョトンとした表情してフランを見つめ、すぐに笑い始めた。

「ふふ、何を言っているの、フラン？ あなたよ、あ・な・た。メリスだと『自分で解くことがお嬢様のためです！』とか言われそうなもの。あなたなら心置きなく聞けるわ」

「いやいや、あたしもお嬢様のためを思えばそう言いますが？」

「だが断る！ これは命令よ、命令。遠まわしな言い方でもいいから分からない時は共に戦いなさい！」

「戦争じゃないんですから……」

だが、レティアは聞く耳持たずなようだ。

「そうと決まったらさっさと帰って今日の宿題を終わらせるわよ！」

そして元気よく駆け出していく。

「ちょ、お嬢様、待ってください！」

慌ただしい1日は、慌ただしく幕を閉じそうだ。

第07話 メイドの偏差値は65超（後書き）

はい、どうも、ハモニカです。

帰省しているおかげですることがなく、2日連続で投稿させていた
できました。

やっぱり動かすキャラの数が増えるとやりがいがありますね。

屋敷がメインの舞台なわけですが、そうなると出てくるキャラが固
定化されてマンネリに繋がりますから。

学園？

クラス変えればキャラの宝庫じゃないですかww

あんな奴やこんな奴。

あゝ、キャラ作りが楽しいな…ってあれ?! 何も出てこないぞ！
?w

しまった！ 学生キャラなんてツンデレとボケ、ツッコミがいれば
何とかなるかと思っていたがそんな事はなかった!!w

と

いう訳で

キャラ急募wwします

これから物語が進む過程において、重要なキャラは既に決まっているのですが、その周囲を固めるキャラが圧倒的に不足しています。特に本筋から少しずれた話を造る際にこれではかなり不備が出るのです。

ですので、「こんなキャラがいたら面白い」というのを是非教えてください。

自分でも考えていますが、ネーミングセンスの無さがあだとなってちよつと難攻しております。

どんなキャラでも構いません。男女も問いませんが、男は扱い酷いかも…w

特に名前！

これ大事。

キャラは出来てるんですが名前が決まらない、というのが数キャラいるんですw

とまあ、こんなマイナーな作者のお願いですが、よろしければ…

では、ご感想などお待ちしております！

第08話 メイドと銃（前書き）

まあ、そんな事が中心のお話です。

それと、そろそろメイド、でサブタイトル始めるのがきつくなってきましたw

なのでそのうちサブタイトルの書き方を変えるかもしれません。それまでのサブタイトルはそのままですがねw

第08話 メイドと銃

「フラン、いるかしら？」

いつものように朝の仕事を終わらせ、レティアを送り出したフランは自室に戻ってアフエシアスの掃除に勤しんでいると、扉が数度叩かれ、外からメリスの声が響いてきた。

「メイド長？ ちょっと待ってください、今開けます」

解体して機関部の掃除をしていたため、机を揺らさぬようそつと椅子を引いて立ち上がると扉の鍵を開けて扉を開く。

「今いいかしら？」

「ええ、何かお仕事ですか？」

部屋の中にメリスを招き入れようとすると、メリスは「それには及ばない」と手で制した。

「外を見て頂戴」

廊下の窓から外をメリスが指差し、フランは部屋から出ると窓から空を見上げてみる。

「これは、降りますね」

空には低い高度に灰色の雲が立ち込めており、時折遠雷の音が聞こえてくる。風が少し強くなっているようで通りの木々が揺れていて、門から見える通りを足早に人々が歩いている様子が見える。

雨が降るのは時間の問題だろう。見ればクレアが廊下沿いにある窓を1つずつ閉めている。

「朝は晴れていたんですけどねえ」

今日の朝は快晴とも言えるほどの青空だった。雲も少なく、数時間でこうなるとは思いもしなかった。

「もし雨が降るような事があつたら、悪いけどお嬢様を迎えに行ってくれるかしら？」

「お嬢様、傘を持っていけなかったのです？」

「ええ、あれだけ晴れていたら、私でも傘は持っていけないわ」

「……メイド長なら、便利な空間に格納しておけばいいんじゃない？」

「あそこのスペースだって無限じゃないのよ」

そうは言うが、傘の1本も入らないくらいたくさんの物が入っている、という事なのだろうか。先日の特訓の際にどこからともなく出てきた氷嚢は、あの空間に入れておいたものなのだろうと、今さらながら見当をつける。

フランには、最近レティアの学園、グローリア魔法学園に行くような仕事が続いてくるようになった。おそらく宿題を持っていたあ

の件でレティアがご満悦だったからなのだろう。

あの日以来、レティアは事ある毎にフランに宿題の手伝いをさせるようになっていた。実技はメリスやグラントと共にやっているが、筆記に関してはフランに問題を見せて半分程度はフランに解かせているような状況だ。

メリスもおそらく気が付いてはいるのだろうが、フランが答えまでの道筋を全て示すような教え方をしていないのを見て、傍観の態度を崩さないことにしたようだ。

とはいえ、レティアの宿題を共に解く様になって、レティアが学園でいかに大変な勉強をしているのか、目の当たりにした。フランの常識で言えば、数時間じっくり教えられてから問題として出されるような問題をジョブはプリント1枚にまとめてそれを説明なしで解かせているのだ。

以前、何故そんな放任主義な授業をしているのか、とレティアに聞いてみたが、「あたしのクラスはそれで何とかなるようなクラスだから」という答えが返ってきた。

なんでもレティアのクラスはもともと学生の自立性が特に高いそうで、教師が何か言うまでもなく自分たちでやるべきことはやるそうだ。

確かに、そう言われてみればかなり自立性に富んでいるのは間違いない。

「それじゃ、頼んだわよ」

「はい、頼まりました」

メリスはフランの返事に笑みを浮かべると自分の仕事に戻っていた。

フランはそれを見送ってから部屋の中に戻り、自室の窓のカーテンを引いて外を見る。

「……2、3時間つてとどこですか」

雨が降るであろう時間に見当をつけ、一度今の時間を確認する。お昼前だが、レティアが全ての授業を終えて帰宅の途につく頃には降り出しているだろう。

「さっさと終わらせておかなければ……」

窓の外を一瞥して再び椅子に座ると、フランは解体されたままだったアフエシアスと向き合う。

大きな部品は銃身、シリンダー、グリップに分解されており、さらに各部細かい部品が白い布の上に乗せられている。布が白いのは細かい部品を見失わないようにするためだ。初めて解体清掃をした時は普通に机の上でやってしまったために丸い部品は転がり、組み立て直した後に1つだけ部品が余るという面倒な事態になった事もある。

その点布を下に敷いておけば、転がりにくくなり、また1つひとつの部品が目につきやすくなる。

銃、という兵器はこの魔法技術の発達した現代非常に稀有な存在な

のはフランも分かっている。メリスやグラントにお願いして銃について書かれている文献を探してもらい、それをフランが理解できるように説明してもらった必要があった。

それでも、火薬式ではないアフエシアスを常に万全の状態にしておくには情報が足りず、一時は完全な手さぐり状態だった時もあった。銃自体の整備も弾丸の調達並みに苦労したのだ。

だが、その苦労の甲斐もあって今では手引がなくても解体、掃除、組み立てを行えるようになった。人を殺すために作られた物を手入れが上達するなど嬉しくもなんともないという気持ちもあったが、アフエシアスがないと自分やレティアを守れないのも事実だ。

魔法が使える者ならば、結界を作るなり、障壁を作り出すなりして身を守ることが出来る。

だが、フランは魔力こそあれど魔法に変換できない。身を守る手段はグラントに叩き込まれた体術とアフエシアスのみだ。

時折、なぜ自分がアフエシアスを持っているのか疑問を持つことがある。

記憶がないためどうしようもないのだが、これが必要に迫られるような場に自分がいたのだろうか、と考えを巡らせる。

今まで、誰にも言わずに心の中に押し込めていた想いだ。

自分は何者で、何をしていたのか。

「はあ……」

天気が悪いと自然と気も滅入ってしまうのだろうか、そんな事を考えている自分にフランはため息をついてしまう。

ふと、フランは銃を組み立てる手を止めて、そつと眼帯に触れる。

レティアが自らの手で作ってくれた特製の眼帯だそうだ。書物で作り方を調べ、肌に馴染む素材、フランの顔のサイズに合った物をフランに気が付かれないように作っていたそうだ。

それまで包帯を頭にグルグルと巻いて屋敷を歩いていたフランがあまりにも見ていられなかったのだろう。顔の左半分の傷がスッポリ隠されるように作られたそれは、フランの心の傷をそつと慰めてくれるような気分になさせてくれた。

「こっちは、どうしようもできませんけどね……」

左手の袖を捲り、その腕を見つめる。

おそらくまだレティアも誰も気が付いていないだろう、フランの左腕に刻まれた「9」という印。これが何を意味しているのかも分からないが、この刻印を見ていると無性に怒りがこみ上げてくる。

それほど大きな刻印でもないし、普段はこうして袖に隠れているため忘れていた事も多いが、不意に思い出すと心が波立ってしまう。

何かの識別番号とも考えられる。

名前の代わりになるようなもの、名前を必要としない場所に自分が

いたのかもしれない。

「そんな所、寂しすぎる……」

本当の名前を知らない、だからこそ、名前というものに対する執着が強い、その自覚はフランにもある。「フラン」という名を貰い、その名を大切に思っているのも、そういう理由があるからなのだろう。

見ているだけでもあまり良い気のしない「9」の刻印を袖で隠し、視線をアフエシアスに戻す。

「……あ」

ほとんど本来の姿に戻ったアフエシアスと、その傍に置かれている小さな部品を見てフランは間抜けな声を上げてしまう。

「それでは行ってまいります」

「気を付けて行ってらっしゃい。帰ってきた時の為に温かい飲み物でも入れておくわ」

案の定、雲行きの怪しかった天候は午後にはわか雨を降らし始め、レティアの授業が終わる時間帯には本降りになっていた。

冬を過ぎたとはいえまだ春には少し早い季節、やはり肌寒さが残っているため、フランは黒い手袋をしている。

玄関にある傘を2本手に取り、玄関の扉を開けるとそのうちの1本を開き、頭の上に持ち上げる。

雨の日、というのはフランにとって苦痛しか与えてくれない。そのせいか天を見上げるフランの表情はどこか暗い。

顔の右半分を覆う傷は悪天候に見舞われると決まって鈍痛を呼び起こすのだ。

まるで自分たちの存在を忘れさせないためかのように自己主張してくる。低気圧が来ると関節痛に襲われるというのはよく聞くが、顔面の半分が鈍痛に見舞われると動く気力すら奪われてしまう。

「これは、当分止みそうにはありませんね……」

傘を傾けて見上げる空には分厚い暗雲が立ち込めている。午前中よりも幾分どす黒さが増したようにも思える。

通りに出ると当然ながら傘を持った人々が早歩きで動いている。傘を持っていない男性がバックを頭の上に置いて走って通りを駆けていくのを眺めながら、フランは傘で溢れた通りを学園の方へと歩いていく。

（雨、ですか……）

思い起こされるのは初めてレティアに出会った日の事。

衰弱しきっていた自分を助け出し、「今」を与えられた日。

「おっと」

馬車が通りを横切り、水溜りの上を車輪が通過すると水が思い切り跳ね上げられる。フランは開いていなかったもう1本の傘を身体の前で開き、飛び散る水を防ぐ。フランと同じ方向に歩いていた女性が全身に水を浴び、馬車に向かって悪態をついているのを尻目に傘を閉じ、その横を通り過ぎていく。

（あの日も、こんな天気でしたか……）

立つこともままならず、食事すら自らの力で出来ず、言葉すら発せなかったあの頃、いや、正確には発するべき言葉すら知らなかったのがあの時のフランの状態だった。

今でも不思議に思う事がある。

普通の人から見れば、あれほど異常な状況はなかっただろう。

なぜレティアと父親のクラウドは自分を普通の病院へ連れていかなかったのか。あのような状況ではまず最初に公共の病院へフランを運ぼうとするのが普通だ。

だが2人はそうせず、自分たちの屋敷にフランを担ぎ込み治療した。

「……これのせいですかね」

腰にぶら下がるアフエシアスに手を当て、ポツリと呟く。

きつと、傷だけならただの不幸な少女で話は済んだだろう。しかしアフエシアスの存在がフランを不幸な少女から表に出すことが出来ない少女へと変えてしまったということか。

ファルケン家の者はそういう事にまで配慮が出来るような存在という事になる。おそらくは政治家であるクラウドの考えなのだろう。

感傷に浸っているつもりはなかったが、何も考える事がないと自然と過去の事に考えが向いてしまう。

フランがファルケン家に保護された時、アフエシアスはクラウドによって取り上げられていた。当然フランの安全を考えての事だろう。

銃が危険な物なのはフランだって分かっている。自分の意図に背いてその力を行使する事もあるし、自らの思惑通り動かない時もある。

だが、それは魔法であっても同じことだ。

フランには関係のない事なのだろうが、魔力を暴走させて自爆するような事だつて全く起こっていないわけではない。生活の中にあまりに溶け込んでいる魔法技術はその危険性が認識されにくいという事だろう。

魔法を行使した結果が何を引き起こすのかも分からず魔法を使い、多大な被害を出す事だつてあるのだ。魔力量によつて個人差が出るからこそ、人はより高い魔法技術を求め、生きている。

まさしくそれは失敗の歴史とも言える。

過去には「大魔法技術革命」などと呼ばれる時期もあり、現代にも活かされている技術が一度に大量に生まれた。

だが、その過程では数百人という犠牲者が出て、技術を巡つての政争が巻き起こる始末、決してクリーンな歴史ではないのだ。

これはメリスに渡された簡単な歴史年表に書かれていたものだ。

有史以来の大きな出来事を概略と共にまとめられており、この王国の成り立ちからファルケン家の歴史もその中には含まれている。

銃に使われる火薬技術は有史の少し手前と言つた時期に製造されていたもので、その製造方法も何もかもが推測の域を出ていなかった。

さらに、全ての人が分け隔てなく、平等に力行使できる兵器は権力者にとつてもあまり出回つて欲しくない代物らしく、情報事態も著しく少なかった。

もしフランがファルケン家に拾われていなかったらアフエシアスは

とうの昔に錆だらけになっていたに違いない。

「偶然の重なりとは不思議なものですね……、おや？」

ふと、視界に見慣れた人影を見つけた。

「デックスさん」

八百屋の店長と話し込んでいるデックスを見つけ、一度時計を確認してからデックスに歩み寄る。

「お？ メイドの嬢ちゃん、デックスと知り合い……、ああ！ お前が働いている屋敷は嬢ちゃんの屋敷なのか？」

学園までのルートは必ずこの八百屋の前を通るため、フランと八百屋の店長は自然と挨拶を交わす様になっていた。

「デックスさんが野菜を調達しているのってここだったんですか」

フランの問いにデックスが小さく頷く。

「こいつは素材にうるさいからな。満足いかないなら俺が卸してるとてわけよ」

雨の日でも店先に野菜を並べている店長は曇天を吹き飛ばすかのような豪快な笑みを浮かべている。そしてデックスの肩をすごく良い音をさせながら叩いている。

「嬢ちゃん、こいつの料理美味いだろっ？」

店長はにこやかにデックスを指差す。どうやら、この2人は旧知の仲なのだろうか、ただの売買の関係ではないように見える。

「はい、デックスさんの料理はなんでも美味しいです」

「そうだろう？ やっぱり素材と料理人の腕が良いと……いいでっ！？」

調子に乗って自慢げに自分の野菜を持ち上げる店長にデックスが軽い拳骨を食らわせる。

デックスは自分の時計を指差して何度かそれを小突くを見て、フランは懐中時計を取り出して時間を確認する。

「そうですね、また晴れた日にもゆっくり。それじゃデックスさん、また後で」

傘を差しているのでお辞儀は小さくしてフランはその場を後にすることにする。

後ろで店長が「また来いよー」と声を張り上げているのが聞こえ、その直後にデックスがまた小突いたらしく小さな悲鳴が響いた。

「良い子じゃないか」

店長は人ごみの中に消えていったフランから視線をデックスに移し、笑みを崩さずそう呟いた。

「それにしても、あのデックスが今じゃ一流の料理人か……。世の中何がどうなるか分かったものじゃないな」

店長は隣で並べられているジャガイモを吟味しているデックスに視線を向ける事もなく、通りを見渡している。

「……………」

「相変わらずの無口だな。ま、俺はそんなあんたが嫌いじゃないがな」

デックスが身体を起こしてジャガイモとその隣に置いてあった幾つかの野菜を指差して個数を示す。

店長は「あいよ」と言いながら袋を取り出して示された個数だけ野

菜を詰め込んでいく。

「フランちゃん、と言ったか。お前が気にかけてそうな雰囲気の子だな。だがあまり過去を引きずるのも問題だぞ？ あれは不幸な事故だったんだから」

「……………あれは事故じゃない」

初めてデックスが口を開き、重い、重厚感のある声でそう呟いた。

「だがなあ…………。ほどほどにしておいた方がいいぞ？」

「何のことか分からんな、…………お釣り」

代金を支払い、お釣りを受け取るとデックスは店を後にする。

「毎度あり」

店長の声にデックスがヒラヒラと手を振り、傘を差すと屋敷へと戻る道へと出ていった。

「…………また来いよ、デックス・”ローグ”・ナトリ」

その背中を店長は苦笑しながら見送った。

第08話 メイドと銃（後書き）

えゝ、はい、どうも、ハモニカです。

少しばかり以上の回想と、歴史的背景的なものの説明が多くなってしまいましたね。「大魔法技術革命」なんてまんまイギリスの産業革命みたいなノリで書いてます。

あまりにもそれが長続きしそうだったので最後に追加でちよつとしたフラグを投下したわけですが……

どこで回収できるのかさっぱりですww

ああ、それとキャラ急募の件ですが、さっそく六人分のキャラ設定および四人分の名前のご提案がありました。本当にありがとうございます。

リアルに、ガチで、サブキャラ不足にあえいでいますので、名前だけの応募でも採用される可能性はかなり高いです。

既に三人分の設定が採用されています。正直面白いモノは片端から設定作っておいてタイミグよく投下していく感じですので、応募の期間はとりあえず未定にしておきたいと思います。

それと、クラスメイトという制限だったんですが、正直その枠から外れて先輩だろうと後輩だろうと問題ない気がしてきましたw多分、よほどふざけたものじゃない限り、ハモニカはその応募されたキャラを出せるか真剣に考えます。

登場させる際には後書きとかで一報入れさせてもらおうと思っています。

因みに応募されたキャラの中の1人はかなり物語に深く関わってくる予定になりました。それほどまでにキャラ不足だったというわけなんですわw

あ、あとここだけの話、女キャラの方が採用率高いですw

同世代の男は競争率かなり高いですw

なにしろ動かすハモニカが男をあまり使いませんからw

本編がいつもより約500字ほど少なかったので、後書きを少し長くとらせてもらいました。

では、ご感想などお待ちしております。

第09話 メイドの土産は いりますか？（前書き）

かけてますw

二つの意味をw

チマチマ書いていたらいつの間にか9000字を超えていました。
いつもより少し長めの回です。

では、どうぞ。

第09話 メイドの土産は いりますか？

「だあゝ、なんなのよ、どうして雨が降るのよ……」

レティアは学園の入り口付近で数多くの学生と共に空を憎たらしそうに見上げていた。

何しろ、朝はあれほど清々しく晴れ渡っていたのだ。誰が雨が降ると想像しただろうか。

容易のいい学生はどこか得意げに傘を差して下校していくが、あいにくレティアは傘を持ってきたくない。明日も普通に授業があるため、教科書を濡らしたくない学生たちは屋根のある場所から一步の出られない。

「まいったなあ、当分止みそうにないし……」

「レティ、また明日ね」

ため息をついていたレティアの隣を颯爽とレイナが通り過ぎていく。その手にはしっかりと傘が握られている。靴に履き替え傘を差すと数少ない勝ち組となってレイナは帰宅の途についた。

「くつ、用意周到ね……。あたしも置き傘するべきだったかしら」

朝会った時は持っていなかったから、おそらくは部室等に置いておいたのだろつ。レイナは陸上部の部員で、よく放課後校庭で走って

いる姿を見かけるが、この天気ではさすがに部活動は断念したようだ。

そう言うレティアは部活には入っていない。

何か問題があるわけではなく、単にレティアが好みそうな部活が無かっただけの話だ。一度それを家で話すとクレアが「なら自分で部活作っちゃえば？」と物凄く軽い口調で提案してメリスの拳骨を貰っていたが頭の中に蘇る。

ヘラの町にあるこのグローリア魔法学園は、国内有数の有名学園だ。

多くの著名人を輩出し、政治家、軍人、芸術家、その他諸々の界限で名を挙げている人々が多く在籍していたため、離れた土地から1人で来ている学生も少なくない。そう言った学生には学園所有の学生寮が宛がわれており、時折学生がパーティを開いてりしている。

そもそも学園長が世界で指折りの大魔法使いとなれば、そのネームバリューも計り知れないものがあるのだろう。レティアはこの学園ですでに4年間過ごしているが、未だに学年の始まりと終わりの行事くらいでしかお目にかかった事がない。

「雨が止むまでどこかで時間潰すしかないかなあ」

他の傘を持たない学生たちが1人、また1人と校舎の中に引き返していく。教室や部室で時間を潰して雨が止むのを待つのだろう。

「ううむ、宿題が珍しくないからゆっくりゴロゴロしようと思ったんだけど、これじゃあねえ」

レティアは残念そうな顔をして校舎の方に身体を向けて教室に戻ろうとする。

「つと、あら？」

靴を脱いで下駄箱に入れようとした時、レティアは外で傘を差す人々の中に1人だけ学園の方に身体も向けている人影を見つけてレティアはそちらに視線を向ける。

「え〜と、あ、お嬢様、丁度良かった」

「フラン〜、ナイスなタイミングよ」

フランが傘を片手に歩いてくるのを見てレティアは下駄箱に入れかけていた靴を下に置いて素早く足を入れると屋根があるギリギリの所まで行ってフランを出迎える。

「教室に戻られる前で良かったです。そうするとまた迷子になるどころでした」

「はは、……迷子？」

「あ、いえ、なんでもありません！」

レティアが傘を受け取りながら聞き流していたフランの台詞に何やら可笑しなものが混じっていたのに気が付き顔を上げると、慌ててごまかそうとするフランの顔が目に入る。

「フラン、あなたこの学園に来るの何回目だったかしら？」

ジト目のレティアの表情にフランは目を泳がせながら脳内でこれまでにこの学園にきた回数を数えていく。

「ええと、3回、ですか？」

「そうよ、よくできたわね、フラン」

「お嬢様、馬鹿にしていますか？」

フランの答えに仰々しく手を振ってみせ、フランを褒めたレティアに対してそう言つと、レティアは素早く傘を鞆に挟んでフランの背後に回り込むとそのこめかみに拳骨を押し付け、グリグリと左右からフランの頭を圧迫し始めた。

「いつ！？ ちょ、お嬢様っ、痛いです！ ピンポイントでそこはあああっ！？」

「出来の悪いメイドにはお仕置きが必要なようねえっ！」

事情を知らず、話だけ耳にすれば誤解を招きかねない事をレティアは言い放ちながらフランの頭を挟む両手に力をさらに入れる。

「お嬢様っ、本当に止めてください！ 頭が潰れてしまい、痛たたたたっ！」

「3回同じ道歩いて迷子になるなんてどういう頭の作りしてるのよ！？ ていうか地図あるのにどうして迷うの！？」

「そ、そんな事、あたしに言われてもおおっ！！」

「あんたに言わなきゃ誰に言つのよ!」

「ぴぎいっ!」

最後に思い切り力を入れられ、頭蓋骨がミシリと悲鳴を上げたような気がしたが、頭痛以上に今背後にいるレティアが怖いので頭を抑えながら涙目で背後を振り返る。

「す、すみません……」

「はあ、分かればよろしい」

レティアが拳にしていた両手を開き、地面にへたり込んでいるフランに手を差し伸べる。

顔にはまだ呆れた表情が残っているが、とりあえず怒りは収まったらしく、フランは怯えつつもレティアの手を取り立ち上がる。

事が収まってようやく周囲を見渡すと、学園の生徒たちが茫然とした表情でフランとレティアを見つめていることに気が付いた。どうやらフランの悲鳴は随分と響いていたらしく、教員の姿も見受けられる。その中にはレティアのクラス担任であるジョブの姿もある。

「何をやっとるんだ、レティア」

「うえっ!? せ、先生!?!」

「何が、『うえっ』、だ……」

呆れた表情を全開にしたジョブは軽くレティアの後頭部を出席簿で

叩き、レティアが「しまった」という表情でジョブを見上げる。

「そういう事は家に帰ってからやってくれ。これじゃ俺の教育が悪いみたいになるじゃないか」

「いや、先生から教育された事、一度もっ!？」

再びレティアの頭に出席簿が振り下ろされる。今度は少し強めに落ちたようで、若干レティアが痛そうな表情を浮かべている。

「なんなら、教育してやろうか？」

そしてジョブを見上げたレティアの目に飛び込んできたのは、物凄く良い笑顔でレティアを見つめるジョブの姿であった。普段の眠たそうな雰囲気もどこへやら、背後におどろおどろしい効果音が似合いそうな雰囲気を漂わせている。

「け、結構です！ さ、さあフラン、早く帰りましょう!！」

「え、ちょ、お嬢様っ!？」

ジョブに素早く一礼し、レティアはフランの手首を掴んで猛スピードで校舎を後にしていき、フランはなす術もなくレティアに引きずられるように連れ去られる羽目になった。

「まったく、なぜ傘も差さなかったんですか……」

「悪かったわね、でも気にしてないから良いわよ」

ある程度、といっても屋敷までの全行程の半分ほどまで走り、ようやくペースを落としたレティアの隣を歩きながら、フランは走ったおかげでずぶ濡れになったレティアを見てため息をついてしまった。

「いや、これじゃあたしが傘を届けた意味がないじゃないですか。気にしますよ。メイド長にも怒られますよ?」

「その時は2人同罪ね」

「100%お嬢様のせいかと……」

「何か言ったかしら?」

ジョブに凄まれてから落ち着かないのか、レティアの声がいつにも増して強く感じられる。

「いえ……、とそういえば、ジヨブさんは教員だけ、という方ではないんですね」

「え？　どういう意味？」

とりあえず話題を変えようと思い、フランは先ほど感じたジヨブの並々ならぬ気配について話を持ち出してみた。

「ジヨブ先生って確か夜勤もやってるけど、そういう意味かしら？」

「まあ、半分正解ですけど……、おそらくジヨブさんは何か戦闘を伴うようなお仕事をされてますね」

「夜勤だから、そりゃあ怪しい奴をとっ捕まえるとかはあると思うわね」

「そうではないんです」

もう一度レティアに「半分は正解なんですけどね」と断りを入れておいてからフランは先ほどのジヨブの姿を思い出す事にする。

ジヨブはレティアに物凄く良い笑顔で威圧してみせた。

あれは確かに「本気だぞ」というのを相手に伝えるには効果的な威圧の仕方だろう。笑みと威圧は究極的には真逆の意味を持っているのだ、その違和感との相乗効果で生まれる威圧感の半端なものではない。自分が威圧されたわけではなくとも、見るべき人間が見ればそれが戦う人間が使うものだと分かるだろう。

そんなたいそうなものをジョブがレティアに使った理由は定かではないが、ジョブがグラントのように軍隊経験がある人間と考えるのが妥当だろう。仮にそうでなかったとしても、警察関連の仕事を受け持っているのは確かだ。

「随分と自信ありげだけど、そこまで言い切る理由は？」

自分の担任という事もあってかレティアは興味津々にフランの話に耳を傾けてくる。

「ジョブさんの手の平、触った事あります？ 初めて会った時に握手をしたんですが、あの人の手の平の皮膚、物凄く固いんです。肉刺が潰れて皮膚が分厚くなっただんでしょね、しかも手の平全体が、です。相当修練を重ねているに違いありません」

自分の手の平を見つめながらフランは自分が言っている事を自分自身で確かめつつ口にする。

フランの手の平は傷一つなく、真っ白である。アフエシアスを引き続ければ当然ながら肉刺の1つや2つ出来て当然だが、フランの治療能力はそんな小さなものにまで影響しているようで表面化する事すら稀である。

だが、常人ならば度重なる特訓をすれば肉刺は出来るだろう。そして完全に治る前に修練を再開すれば遅かれ早かれ肉刺は破れる。そんな事を繰り返しているうちに、その部分の皮膚は分厚く、硬くなっていく。

「それで、ジョブさんはそういう修練が必要に迫られるようなお仕事をしているのでは、と思ったんですが、今日の一件で確信が持て

ました。その夜勤のお仕事とやはは、相当に大変なんでしょうね」

「だからいっつも昼間は眠たそうにしてるのかな。でも、大きな事件があるわけでもないし、何が大変なのかしら？」

レティアが傘を倒して雨の降り具合を確認する。先ほどから小雨になってきており、傘が必要かどうか確かめているようだ。

「この町に限った事ではないのかもしれないよ？ 隣町に出張している、という可能性もあります。なんでも連続殺人犯が隣町で暴れているようですし」

「連続殺人犯？ 世の中も物騒ねえ、まあ我が家に押し入ってきたら返り討ちでしょうけど」

「当然です。しっかり返り討ちにしますからお嬢様はベッドの下に隠れていてくださいね？」

道行く人の噂というのは存外正確な時がある。特にこの町のようにベッドタウンでもあり旅の中継地のような性格も持ち合わせている町は人の往来が激しい分情報も多く仕入れる事が出来る。

先ほどの話は迷子になっていた際に、道すがらの行商人たちが話し込んでいるのを小耳に挟んだものだ。

「あのね、あたしもそれほど子供じゃないわよ？」

レティアがフ란の提案に不満げに頬を膨らませる。

「お嬢様、あたしはお嬢様の安全を第一に考え、そう言ったのであ

り、別にお嬢様を子ども扱いしているわけじゃありませんよ?」

「そういう至極冷静な回答はテストでお願いするわ」

真剣な目で言い返されたレティアが疲れたような表情をして大きく息を吐く。

フランはレティアが何故そのような反応をするのか理解できず首を傾げ、レティアの顔を覗き込む。

「それにしてもフラン、あなた観察力あるのね」

気を取り直したのか少し笑みを浮かべながらレティアがフランにそう言つと、フランは少し照れつつも笑みを零す。

「観察力、というよりは感覚なんですけどね。普通の人とは違う雰囲気があればその違和感の正体を調べようとしているだけですし」

「それが出来るんだから大したものよ」

レティアは「とてもじゃないけどあたしには無理よ」とお手上げの仕草をする。

「そういうものなんですかね———っ」

不意にフランが言葉を切つて足を止める。

急にフランが止まったのでレティアがフランを追い越し驚いたようにフランに振り返る。

「どうしたの、フラン？」

「嫌な気配がします……」

怪訝な顔をしているレティアを尻目に、フランは自分が感じ取った嫌な気配の正体を探ろうと周囲を見渡す。

すると。

「お、そのかーのーじよ」

「へ？」

フランの顔を見ていたレティアが背後から軽い声と共に肩を叩かれ、想定外の事態に間抜けな声を上げる。振り返ってみるとそこにはどこからどう見ても「不良」の二文字が似合う青年が3人立っており、ニヤニヤと笑みを浮かべながらレティアを見下ろしていた。

「君可愛いねえ、どう、この後俺らと遊ばねえ？」

「んお？ お連れのメイドさんも一緒にどう？ 皆で楽しい事しようぜ」

青年の1人がフランに気が付いてレティアの横をすり抜けてフランの前に立つ。

言葉はお誘い、の域を出ていないが、青年たちが発する空気は常人ならば逆らえぬものだろう。身長が高い事もあって傍に立っているだけでも威圧感が漂ってくる。

(……あゝ、ナンパって奴ですか。よりもよってお嬢様を引つけようとは良い度胸ですね)

しばし脳内で事態を把握すべく思考を回転させ、青年たちの目的に見当をつける。

青年たちはフランとレティアが合流しないようにするために間に割って入り、各個「撃破」するつもりらしい。気が強そうな目をして
いるレティアには2人がかり、世間一般には従順なメイドは1人が
相手をする、という作戦なのだろう。

「雨も降ってるしさ、どこかでお茶でも飲まない？」

雨が降っていることを口実に青年たちはフランとレティアを通りの脇へと誘導していき、喫茶店を指差す。といってもどこか錆びれた、あまり人の入りが多いようには見えない店を指差しているので、フランは青年たちにはばれないようにため息をつく。

(目的はともかくとして、もう少しましな店は選べないでしょうか……)

「ああもう、鬱陶しいわね！ あたしたちは家に帰るんだから放しなさいよ！」

「おお、怖いねえ、でも大切なメイドさんがどうなってもいいのかい？」

その瞬間、フランの隣にいた青年が小さなナイフを取り出して、フランとレティアにのみ見えるように振ってみせる。どうやらフランに怪我をさせたくなければ言う事を聞け、と言いたいらしい。そこ

までしてナンパする意味が分からないが、もしかしたら金銭を要求するなど別の目的があるのかもしれない。

レティアは一瞬ナイフを見て驚いた表情をするが、すぐに呆れた表情になってため息をついた。

「あなたたち、自分が何をやっているのか分かってるのかしら……？ 悪い事は言わないからその物騒な物をポケットにしまって大人しくお家に帰るべきよ」

「ああん？ 何を言ってるのか分からないねえ。て言うかこの状況分からないの？」

ナイフを見せつけ自分たちの圧倒的有利を見せつけようとする青年。笑顔を崩さないため傍目からは普通の会話をしているようにしか見えないだろう。ナイフは丁度青年の身体の陰に隠れて見えない位置にある。

「お？ メイドさん、眼帯してるの？ どうしたのそれ？ 怪我でもしたの？」

心配しているような言葉を発するが、ニュアンスには馬鹿にしたような感情が籠っている。

（どちらにせよ、このままな訳にも行きませんし……）

一瞬レティアと視線を合わせる。

レティアは小さく頷き、わずかな口の動きだけで「ほどほどにね」とフランに伝えてくる。

（ま、お嬢様に手を出すような輩に手加減なんかしませんけど）

「おい、聞いているか？」

反応がなくなつた2人に青年が声をかけるが、返つてきたのは返事ではなかった。

フランは隣にいた青年のつま先を思い切り踏みつけると、痛みに飛び上がるうとする青年のナイフを持つ手を掴んで加減せず握つてやる。手首を急激に圧迫されて握力を失い、青年の手からナイフが零れ落ちる。

そしてそのナイフが地面に落ちるよりも早く青年の懐に入るとその胸元をも掴んで豪快に背負い投げを決める。地面に突き刺さったナイフの柄が青年の背中に当たり、青年が聞くに堪えない悲鳴を上げる。

「なっ！ てめえ、何しやがる！」

「見て分からないなら相当に理解力が欠けてらっしゃるようですね」

悶絶する青年を閉じた傘で小突きながらフランは口を開く。

青年2人の頭からは仲間の事など吹き飛び、3人組を率いていた青年がフランに殴りかかる。

「……遅すぎ」

殴りかかるスピードもキレもグラントの足元どころか半径50メー

トルにも及ばないくらいのスローモーションに感じられた。しかも振りかぶり方が大げさすぎ、叫びながら飛び掛かってくるおかげで目の前の青年が何をしようとしているのか簡単に分かってしまう。テレホンパンチにすら及ばぬ低俗な攻撃方法だ。

「ふう」

フランはため息をつきながら自分の目の前に傘をかざすと青年が殴りかかるタイミングに合わせて傘を開く。

「うおっ!？」

至近で傘を開かれ青年は完全に視界を奪われる。すぐさま傘を振り払うが、その時にはすでに目の前からフランの姿は消えていた。

「くっ、どこへっ!？」

「……ちよつと寝てください」

振り返れば青年の目の前にフランの微笑みがあつた。そしてフランは青年の首筋に手刀を食らわせ、意識を刈り取る。

「さて、後はあなたお1人ですね」

2人目が地面に倒れ込み、フランがゆっくりと最後の1人に視線を向ける。青年は完全に恐怖に支配されているらしく震えながらレティアの手首をつかみ、自分とフランの間にレティアを突き出した。

「お、お前のご主人様がどうなってもいいのか!？」

「あゝ、そういう事、しますか」

「フラン、ぼさつとしてないで助けなさいよ」

人質のような立ち位置にあるはずのレティアがため息交じりにフランに催促する。

周囲には雨で人通りが少ないとはいえ騒動を聞きつけて野次馬が集まりつつある。どう考えても分が悪い青年は何とかしてこの場から逃げ出そうと必死に策を巡らせているように見える。

「お嬢様が警告しましたし、改めては、しませんよ？」

「は？ なにを——っ！？」

青年が言い終わるより早くフランは青年に接近し、ホルスターからアフエシასを取り出すとその眉間に銃口を押し付ける。ホルスターに入っているアフエシასに触れた瞬間システムとしての『アフエシას』を起動、青白い帯はフランが銃口を青年に押し付けるまでにフランと繋がっている。

バガンッ！！

そして躊躇なくその引き金を引き、弾は青年の眉間に命中、しなかつた。

「フラン！ やり過ぎよ！！」

「お嬢様」

見ればレティアが空いている手でフランの右腕を掴み、狙いを外していた。銃口は地面に向けられ、弾は青年のつま先数センチの地面を穿ち、弾痕からはうっすらと白い煙が上がっている。

青年はそれで完全に腰が抜けたのか、レティアを掴む手を離して地面にへたり込んでいく。どうやら恐怖のあまり失禁してしまったのか、地面に雨によるものではない水溜りが出来ている。

「あなた、^{アフエシマス}それ人を向ける気はない、って言ってなかったかしら？」

レティアが問いただすような口調でフランに迫る。

「それは罪もない人に対して、です。お嬢様や旦那様、あたしの周りの人に害をなす者は須らくあたしの敵です」

「こんな奴の為にあなたを汚すわけにはいかないのよ。分かった？
こんな奴ら、素手で十分よ」

「……分かりました」

しばらくして、ボコボコにされた青年は一部始終を見ていた周囲の好意的な人達によって警察に突き出され、厳しい補導を受ける事になった。

「フラン、約束して」

「なんでしょう?」

青年に振り払われたおかげで一部が損壊した傘を手に持ち、レティアが持っている傘で雨をやり過ごしていたフランは不意にそうレティアに言われる。

「……あなたの手は、綺麗なの。手だけじゃなく、あなた全部が。だから、あたしはフランが汚れるところを見たくないのよ」

「お嬢様……」

「だから、無茶しないで」

レティアからしてみれば、先ほどのフランは自分の事を考えず、戦っているように見えたのだろう。フランとしても、今考えてみれば、この銃という存在に親しみの薄い魔法社会で銃で人を撃てばどういう反応をされるか分かったものではない。下手をすれば警察の厄介になっていたのはフランの方かもしれない。

幸いにして弾は命中しなかったし、圧倒的にあの3人の方が悪い
め事なきを得たが、最も最速で相手を無力化できる手段が後々面倒
を引き起こすことになる事を失念していたフランは自らの軽挙妄動
を悔いた。

「すみません、お嬢様。これからは気をつけます」

「分かればよろしい。けど、少し嬉しかったのも事実よ」

「嬉しかった……？」

「あたしの為に、あそこまでやるとは思わなかったもの。なんだか、
嬉しい」

レティアは表情を崩して温かい笑みを浮かべる。

「さ、早く帰りましょう」

「……はい、お嬢様」

傘をレティアから受け取り、フランが傘を差す。

「はあ、やっと帰れるのね」

「そうですね……おや？」

傘を下ろし、空を見上げる。

「晴れました、ね」

雲の隙間から、太陽が姿を覗かせていた。

「弁明は聞かないわ」

「ちょ、メイド長!？」

「あなたがびしょ濡れなのも、その手で人を殴ったのもお嬢様のためなら仕方のない事よ。でもね」

メリスが虚空から自らの剣を取り出す。

「なぜ、お嬢様がびしょ濡れなのかしらね、フラン?」

「あああああの、そ、それにはですね、深い訳が……」

「問答無用、といったはずよ。フラン、庭に出なさい」

フランの腕を掴むメリスの手は、尋常でなく力が入っている。

これから何が始まるのか本能的に察知したフランは必死の脱出を試みるが、メリスの手はビクともしない。

「お、お嬢様、助けて下さいiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiっ!!」

「うん、無理」

ファルケン家の夕飯まで、メリスの時間無制限模擬戦が庭で繰り広げられることになった。

第09話 メイドの土産は いりますか？（後書き）

暴れました！

街中で！

公衆の面前で不良をフルボッコにしました！

てなわけで、フランやや暴走気味な回でした。

サブタイトルの二つの意味は、もちのろんではありますが「メイド」と「冥土」です。死んでませんけどね。

書いてて自分でも思ったんですけど、そこまでしてナンパするか！
？ ってねw

まあ、書いてしまいましたし、その方が話繋げやすかったので良いんですけど。ナンパな人には鉄拳制裁、そういう奴には加減なんかないのが、我らが主人公です。

そしてフランの運命はいかに！？

毎度ながら我らがメイド長が叱咤激励しております！（主に肉体言語で）

では誤字脱字報告、ご感想お待ちしております。

キャラ募集も継続してやらせてもらっております。現在9人の設定と8人分の名前が集まっております。いや、嬉しいです、本当に、

こんな作者に反応して頂いている方々は神様仏様です。

設定を加筆しつつ出番を模索中です。

設定自体は9人分と順調に集まっていますので、そうですね、期限じやなくて上限にしましょうかね。とりあえず上限を決めておいて、それに届いたら×切という事で。

それまではどんどん提案してくれて結構です」

第10話 メイドは友に恵まれた（前書き）

10話です。

二桁に乗ったぜー、イエーイ。

いや乗らない事は絶対ないだろうとは思ってたましたけどさ。

やっぱり一つの通過点みたいな感じなんですよ、10話とか20話とか30話とか40話とか（ry

それはそうと、今回少しばかり残酷な表現があります。

そう言うのが苦手な方、または文章からその光景を想像するのが得意な方は心を無にして何も考えずに読むことをお勧めします。

では、どうぞ。

第10話 メイドは友に恵まれた

「うへあ……」

「なんて声上げてるの、フラン」

「クレア、あなたのお姉さんのせいですよ……」

朝から情けない声を上げて腰を抑えていたフランにクレアがキョトンとした目を向ける。

昨夜、結局夕食の時間になってもメリスの時間無制限リアル鬼ごっこは終わらず、フランが疲労でぶっ倒れるまで続いた。

どうもここ最近メリスのバトルマニアになる引き金が軽くなっているのか、ちょっとした事でメリスが肉体言語を実行するようになっている。

おそらく先日的一件事がきっかけになってしまったのだろう。

「一晩寝て治らないなんて、姉さんも随分ときつくしたのね」

「ええ……」

特に昨日は酷く、未だに痛みが引かない状況が続いている。

「でもまあ、男3人吹っ飛ばすなんて日頃の訓練の賜物ね」

「それはそうでしょうけど……」

街中で銃をぶつ放したにも関わらず、昨日の一件は大事にならずに済んだ。その件に関してはメリスもフランを追いまわしながら褒めていたような気がするのだが、それを聞いていられるほどの余裕はフランにはなかった。

因みに、あの後聞いた話では、あの不良三人組は全員グローリア魔法学園の上級生だったとのことだ。いかに名門とはいえ、学園内にはああいう輩の数名、いて当たり前という事なのだろう。学園側からも厳重注意と罰則が与えられたそうで、フランとしては二度とレティアに近寄らなければ何もしない、という気持ちで一杯だ。

「グラントなんか少しにやけてたものね」

クレアが昨夜のグラントを思い出してクスクスと笑いを漏らす。

レティアがずぶ濡れになって帰ってきた事に対してバトルマニア魂を発動したメリスと違い、グラントはフランに「ご苦労さん」と労いの言葉をかけてくれた。

メリスとの追いかけてでボロボロになったフランを部屋まで運んでくれたのはグラントだったそうだ。グラントはレティアが濡れる事よりも良からぬ人間に引っかけられなかった事に重きを置いたと言ったところだろう。メリスも自分がやりたい事をやった後だったからグラントには何も言っていない。

「メイド長もグラントさんも、お嬢様を想う心は同じなんですよね。ただ、メイド長は、ちょっと、怖いというか、なんというか……」

そこまで感情を表に出すのだから、メリスのレティアへの想いは相当のものだという事は容易に察しが付く。しかし、その度に阿修羅と化したメリスに追い掛け回されるような事は勘弁願いたいフランは二度とこういう事が無いように、と心に深く刻み込んだ。

「ふふ、人間離れたフランも姉さんには敵わないか」

「メイド長もグラントさんも人類という括りにするのは甚だ疑問を感じます」

この場に2人がいたらどんな反応をしたらろうか、と思いきみを浮かべながらフランは床を拭いていたモップを動かす手を止める。

今日はフランとクレアが掃除当番、メリスは部屋に籠って何やら書類仕事に明け暮れ、グラントは庭の手入れをしている。

寒い冬を乗り越えた庭の樹木はまだ葉を出してもいないが、定期的に状態を確認するのも仕事の内だ。

「クレア」

「なあに？」

大きなテーブルの中央に手が届かず、椅子に膝をついてテーブルの上に身を乗り出しているクレアに視線を向け、反対側からクレアの届かない部分を代わりに拭いてやる。

「クレアも何か武術をやってるんですか？」

「藪から棒だね、どうしてそんなことを聞くの？」

クレアは表情を崩さず、テーブルの上に置かれていたランプを移動させてランプが置かれていた場所を磨く。

「いえ、この屋敷の人は皆、人並み以上に武術に精通しているものですから、クレアはどうなのかとふと思ひまして」

「なるほど、確かに姉さんもグラントも、ナトリも強いよねえ。まあ、あたしからしてみればフランもその部類に入るけど」

デックスも含まれたことにフランは疑問を感じたが、とりあえずそれは置いておくとして言葉を続けるクレアに耳を傾ける。

「皆戦えるとなると、万が一の時皆戦うでしょう？ 1人ぐらい、常にお嬢様の傍で一緒にガタガタ震える人がいた方が、お嬢様を安心させてあげられるかなって」

「そこまで考えてます？」

「失礼な。先輩に対してどうしてそう疑心暗鬼になるかな？」

両手を腰に置いて頬を膨らませるクレアを見ると、どう見ても年上には見えない。

「ま、武道とか習ってないから、素人が戦う訳にもいかないからね。そういう荒療治はフランたちに任せる事にしてるんだ。後輩を信頼する先輩、なんて良い先輩なのかしら」

「自分で言いますか……」

あの童顔で言われるとどうしても説得力とか、そう言うものが欠如してしまふという事をおそらくクレア本人は気が付いていないだろう。

クレアはそれだけ言う満足げに鼻歌など歌いながら自分の仕事に戻り、汚れた布巾を手の平の上で作り出した小さな水球の中に放り込むと回転させて汚れを洗い流す。

「水の精霊って便利ですよねえ」

「水回りは任せなさい」

布巾の汚れを吸い出して少し淀んでしまった水球をクレアはバケツの中に落とす。そして布巾をバケツの上で絞って再び拭き掃除を再開する。

魔法を使うほどの事ではないのかもしれないが、軍事転用されるよりよっぽどマシなんだろうと内心思いながら、フランはモップをバケツに突っ込んでかき混ぜるようにして汚れを落とす。

クレアは水の精霊と契約しているため、掃除の時や食器洗いの時頻繁に魔法を使っているところを見かけるが、メリスは雷の精霊と契約しており、使いどころがないようで屋敷の中でも外でも使っているところを滅多に見かけない。

一度だけ特訓の際に雷魔法を使うところを見せてもらった事があるが、あまりの威力に茫然としてしまった。グラントが作り出した土の防壁を半分ほど抉り、粉碎したのだ。そもそも雷を使える場も限られているため、そうそうお目にかかるようなものではないと痛

感させられた。

軍隊に金髪金眼が多いのはそういう理由なのかもしれない。自分の力を思う存分使える場など、そこくらいしかないだろう。他だと精々警察関係の仕事だろうか。

「フランは大変だよね、全部手作業だし」

「ええ、ですけどもう慣れました」

大変だよね、というクレアの言葉には同情の念は感じられない。1年以上の付き合いだ、お互いの事は大体把握し合っている。

フランが初めてこの屋敷にやって来て、包帯でグルグルの頭をクレアが見た時、クレアはフランのそれを「個性的」の一言で片づけた。メリスやグラント、レティアでさえ、フランを気遣ってその事は口にしなかったのだが、クレアは真正面からそう言い放った。

気遣いなどクレアには無いのだろうと思う人間がいてもおかしくはないだろう。

しかし、クレアはメリスたちとは対応という面で一線を画していた。メリスやグラントが手当てをしてくれるのであれば、クレアはそれをすぐそばで見守ってくれるという立ち位置だった。

どんな時でも、その言葉、素振りには遠慮など無く、代わりにあるのは親しみやすさだったのだ。

もちろん、メリスやグラントには言いようもない恩がある。だがク

レアに対しては、それとはまた別の恩があるとフランは感じている。
クレアはいわばフランにとって唯一無二の友達と言える。

レティアは主、メリスとグラントは上司。同じ目線に立っているのは実際クレアだけなのだ。だからこそ、より親近感を覚えることが出来る。

「魔法が使えないことを不便に感じたりしないよね、フランは」

「世界が世界ですから、多少は感じますよ？ でも、別に死ぬほどの事じゃないですからね」

「はは、そりゃそうだ」

クレアの笑みに釣られてフランの口元も緩む。

その時、部屋の扉が開いてグラントが軍手を外しながら入ってきた。

「グラントさん、庭仕事は終わりましたか？」

「ああ、なにぶん楽な仕事だからな。着替えたら中の掃除を手伝おう」

「お、助かるよ、グラント」

布巾を手に嬉しそうな表情をするクレアに、グラントが「だからって怠けるんじゃない」と釘を刺す。

「まあ、早く終われば自由時間を確保することも出来るだろう。昼

食までは時間があるしな」

壁掛けの時計に視線を向け、グラントがそう言うとクレアは俄然やる気を出し、キレのある動きで掃除を進めていく。

「ほら、フランも急ごう！」

「あゝ、はいはい」

クレアに急かされるがままにフランも掃除に戻る。

その様子をグラントが笑いを堪えながら見ていた。

鈍痛。

とてもじゃないが形容することが出来ない、身体の芯から全身を痛みが駆け巡る。

その意味を理解することは出来ない。

いつものように、少女は目を隠され、外の情報は音ぐらいでしか入手することが出来ない。

（なんだ、これは……）

フランはその少女のようだ。

だが、妙に他人のような感覚があり、まるで自分を自分で眺めているかのように感じられる。

（夢……？）

そうであれば合点がいく。

そう思ってフランは深く考えずに夢の中の少女となっ**て**ぼんやりとしてみる。

「……………痛いわよね」

不意に、声が耳に届く。

それは記憶の底に埋まっていたあの時の夢で聞いた声。

酷く鮮明に聞こえるが、相変わらず視界は真っ暗なままだ。身体を動かそうにも縛られているのかピクリとも動かせない。ベッドが何かに横にさせられているらしく、声は上から降ってくる。

「ごめんね、何もできなくて。ごめんね、こうするしかなくて」

女性は少女に何かをしたのだろうか、1人嗚咽を滲ませながら謝っている。

フランにはその理由は分からない。そもそもこれは夢なのだ、理解できるものなど少なくて当然なのかもしれない。

ふと、手の平に温かい感触が生まれる。

「でもね、いつか、いつかきつと助け出すからね？ たとえ、そのために全てを犠牲にしても」

女性が少女の手を握っているのだろう。震えてはいるが、ギュツと強く握りしめている。

「だからね、絶対に死なないで」

（この人は、一体……）

とてもじゃないが夢とは思えない鮮明さになってきている。声だけ

なのに、なぜか心の奥底に何かを感じさせている。

「時間だ」

女性の声とは違う、男性の声が響く。

「……ええ」

先ほどまでの声とは違い、女性の声にはどこか怒りすら感じさせる。だが、男の声に従い、少女の手を放すと女性の足音が少女の耳に伝わってくる。

身体全体が揺れ、ベッドが何か分からないがそれと共に移動させられている事に気づく。

（病院……なのでしょうか？）

だとすると、この男女は医師なのか。乗せられているのは担架で、手術が行われる直前という設定なのだろうか。

（いや、それなら縛る理由が分からない）

少女は縛られている。両手両足を身動き取れぬほど頑丈にだ。

病院がそんな事をするとは考えにくい。

「今日のプランは？」

男の声が聞こえ、現在少女、女性、男性の3人でどこかへ移動しているという状況だと見当をつける。

「……パンドラニウム接種による覚醒実験です」

「パンドラニウムか、実験による生残率は？」

実験、あまり良い響きのしない言葉だ。

どうやら少女は何かの実験の被験者のようだ。

「……3%」

（なっ！？）

女性が声のトーンを落として言った数字にフランは驚愕する。

生残率3%、よほどの幸運の持ち主でもない限り、それは死に等しい数字だ。そんな実験を躊躇いなくこの男はやるうとしているのだ。

「3%……、まあゼロよりよっぽどマシだな」

「ですが、既に3名の被験者が再起不能になっています。これ以上の実験は無意味かと……」

女性はそんな場所に在るにしては随分と良識の持ち主のようだ。その言葉の節々から少女を殺させまいという必死さが滲んでいる。

「1%でも0.1%でも可能性があるのなら、それを断念する理由にはならない。なんだ、お前はこの子に情でも移ったのか？」

女性は返事をしない。

「ふん、まあいい、さっさと始めるぞ」

再び身体が揺れ、移動が終わり、担架から何かの台に身体が移される。そして今度は身体を何かベルトのようなもので縛られ、台に固定される。

人の気配が多く、周囲に数名別の人間がいると分かる。

「では、時計を」

「はっ、１１時００分、実験開始」

「記録、頼む」

「分かりました」

別の男の声が幾つかして、金属が擦れる音が響く。

「パンドラニウム、投与」

腕に何かが押し付けられる。

そして次の瞬間、押し付けられた何かの先端から少女の体内に鋭い針が差し込まれる。痛みが身体を襲うが、悲鳴すら上げる事を許されてはいない。

（なんの、ためにっ……！）

痛みを感じながらも、何もできない自分が腹立たしい。

「投与、時間の経過を知らせ」

「10秒経過」

「ああ……」

女性の狼狽えるような声が聞こえてくる。

「あがつ……！」

その時、それまで聞いたことのない声がフランの聴覚が捉えた。

「あ、ああ……」

だが、随分と聞き馴染みのある声だ。

「あああああああああああああああああああああああ
あああつ……！！！！！！！！」

そして、脳が焼かれるような痛みに襲われる。

身体の中を何かがはい回るようなおぞましい感覚に襲われ、必死に
身体を動かそうとするが固定されているその身体は台の上でわずかに
背中を浮かせることしかできない。

痛みという生き物が身体を食い荒らしている。

皮を、肉を骨を、内臓を、脳を、抗う事の出来ない暴力に蹂躪され
ていく。

「20秒経過、右腕の断裂」

「肩を抑えろ、この程度で壊れる事はない」

何故、自分がこんな目に合わなければならないのか、少女の心の叫びが聞こえてくるのが分かる。

何故こんなにも苦しみ、痛みに苛まれ、その身を壊されなければならないのか。

「25秒経過、右腕結合、続いて腹部に裂傷」

腹の上に生暖かい液体が広がる。おそらく血が腹から噴き出しているのだろう。

「おい、誰か腹を抑えろ。腸がはみ出ている」

グチュ

「うが、ああああああああああああっ！！！！」

自分の腹に当てられた何かが外に飛び出た何かを少女の体の中に押し戻す。

激痛などというレベルではない。

死んでもおかしくないレベルでもない。

確実に、死ぬ。

「30秒経過、腹部裂傷治癒、内臓破壊進行中」

だが、少女は今なお耐え難い痛みには悲鳴を上げ、苦しんでいる。

身体の破壊と再生が同時に行われ、死ぬことすら許されていないかのようなのだ。

「あ——」

少女が何かを言いかけ、その瞬間こと切れるようにその悲鳴が止まる。

背中を生暖かい液体が包み、台の上で少女が血の海に浮かんでいるであろう光景が容易に想像できてしまう。

「被験者、意識を失いました」

「素晴らしい！ 死なない奴は初めてだ。これは見込みがあるぞ！」

男が高揚した声で拍手をしている。その拍手は痛みを意識を失った少女に対して贈られているものなのか、自画自賛によるものなのか、フランには分からない。

「この子は素質があるようだな。ええと、……エネアか。エネア、君は選ばれた人間になれるかもしれんぞ」

その瞬間、フランの意識もブラックアウトした。

「……ラン、フランってば！」

不意に、声が響いてきた。

何かと目を開けると、目の前に心配そうな表情をしたクレアの顔があった。

「クレア……？ それにグラントさんまで」

うつかり寝てしまっていたようで、ソファで横になっていた自分の身体を起こすと目の前にいるクレアとグラントを交互に見つめる。

「物凄くうなされてたから、心配したんだよ？」

「ほら、汗を拭くと良い」

グラントが乾いたタオルをフランに手渡し、それを持った瞬間、自分がどれほど冷や汗をかいていたのか教えられる。

徐々に戻ってくる感覚が背中もびっしょり汗をかいている事を知らせ、タオルを首筋から中に突っ込むととりあえず届く範囲で汗を拭く。

「大丈夫か？ 顔も真っ青だぞ」

「大丈夫、だと思えます。なんか嫌な夢でも見たんでしょう」

笑みを浮かべてみせるが、顔面蒼白で笑われても無理をしているようにしか感じられないだろう。

そして案の定、そんな笑みで2人は安心してはくれなかった。

「まだ昼前だが、風呂で汗を流してきた方が良いな。クレア、風呂を沸かしてきてくれ」

「分かったよ。ついでに着替えも持ってきておくよ」

「すみません……」

黒を基調としているフ란のメイド服は外見からはその色の変化が分かりにくい、背中は濡れてとてもじゃないがこのまま着続けて半日過ごすわけにはいかない状況だ。

「なあに、問題はない。風呂に入って、気持ちを切り替えて昼食にしよう」

グラントが手を差し伸べ、フ란を立ち上げらせると、フ란はクレアの後を追って部屋を出ることにした。

「……………」

フ란が出ていった後、部屋でグラントは自分の手を見つめていた。フ란を引っ張り起こした時、フ란の手は尋常じゃなく震えていた。本人はそれを隠そうとしていたが、それで隠せるほどのもので

はなく、逆に隠そうと力んで手が強張っていた。

寝ていたフランが突然苦しみだしたのに気が付いたのはクレアだった。ソファの上でもがき苦しむので必死に起こそうとしたが、なかなか起きなかったので一時は騒然としてしまった。

幸いしばらく呼びかけた末に目を覚ましたが、その顔は1年前のあの日のように青ざめていた。

「何ともなければいいのだが……」

グラントはただただそう願うしかなかった。

「エネア……」

クレアが即席で風呂を沸かしてくれたおかげで、フランは湯船に浸かって汗を洗い流すことが出来た。先ほどクレアが着替えを持って

きてくれた際に、心配そうに声をかけてきたが、身体の方に異常は見当たらなかった。何かの影響なのか若干の鈍痛が身体に残っているが、とりあえずは問題ないだろうと判断する。

夢の中の記憶がこんなにもはつきり残っているのは久しぶりだ。

言葉一つとっても、あまりに痛烈過ぎて逆に忘れることがでないのではないかと思ってしまうほどだ。

そして一番最後に呼ばれた、少女の名前のような言葉。無機質な言葉だったが、それでもあの少女には名前があっただろうか。

「少し、調べてみますか……」

幸い午後は時間が空いている。たまには自分の事を考えてもいいだろう、と思いながらフランは湯船の縁に後頭部を置いて天井を見上げる。

「……つとわっ!？」

あまりにボーっとしていたせいで、湯船の底を滑って頭までお湯の中に突っ込んでしまう。慌てて顔を出し、目を擦って目を開ける。

「はあ、何してるんでしょうね、あたしは」

ため息をつきながら水面を見つめっていると、左右から黒い髪が漂ってくる。自分の髪の毛だと気づくのに随分と時間がかかり、苦笑してしまう。

「……さて、そろそろ上がりますか」

あまりクレアたちを待たせるのも悪い。

自分のためにわざわざ風呂まで沸かしてくれたのだ。仕事に戻って後れを取り戻さなければ、と思い湯船から出ると、フランは大きく深呼吸して浴場を後にしようとする。

「って取り戻すも何も仕事がないのか……」

仕方ないので、フランは部屋で横になって体調の様子見することにした。

第10話 メイドは友に恵まれた（後書き）

前半と後半のギャップが酷いww

ううむ、まいったまいった。

こうやって少しずつ物語を進ませてるから、全然進まないのかもしれないですね。

ああ、今書いてる回で応募があったキャラの1人目が登場します。

あと数話したらお目見えです。

では、誤字脱字報告、ご感想などお待ちしております。

第11話 メイドは体調管理が必須（前書き）

なんだかんだしている間に数日が過ぎてましたね。

ようやく（書き溜めしている）回を書き終えたので投稿出来ましたw
では、どうぞ。

第11話 メイドは体調管理が必須

「おし、そこまでだ。全員ペンを机に置くんだ」

「だ、やっと終わった……」

ジョブの号令と同時に教室内で硬直していた空気が爆発する。

「レティ、出来たー？」

隣の女子生徒がレティアのテスト用紙を覗き込みながらそう尋ね、レティアは自信なさげに唸り声を上げる。

「微妙ね。全部埋めたけど、最後の方は見直してないからなあ」

「うへあ、あの時間内で見直しまでしたの？」

感心したような表情で見つめるクラスメイトにレティアは内心笑みを浮かべていた。

（直前にフランにテスト勉強手伝ってもらって助かった）

昨夜、テスト勉強が思う様にはかどらなかった時に紅茶を持ってきたくれたフランと共に短い時間ではあったが勉強をしたのだ。フランはいつも通り、それとなく、遠まわしに、レティアが問題を解くきっかけを与え、おかげで分からなくて飛ばしていた部分も全て見直すことが出来た。

全てを網羅することは出来なかったが、要所を押さえる事でとりあえずテスト用紙を埋める事は出来た。

「ふふ、帰ったらフランにお礼を言わないとなあ」

上機嫌で後ろから回ってきたテスト用紙を受け取り、自分の用紙を裏返して束の上に置くと前の男子生徒の背中を叩いて用紙を前に回す。

「フランさん、ってレティの所のメイドさんよね？ あの人また来てくれないかなあ、頭良いし、あんなに勉強はかどった授業久々だったよ」

「さん付けするほど年上じゃないわよ？ あたしと同一年くらいなもの」

「そうなの！？」

このクラス内では既にフランは救世主のような立ち位置を確立している。先日の授業で見たフランの頼もしさが今なおクラスメイト達の間では英雄のように扱われている。

そのせいか、事ある毎にレティアに対してフランを連れてきて、とか、一家に一台だの訳の分からない事を言い始める学生が増えている。前者はともかくとしても、後者の意味はレティアには理解できない。

「ほえ、なんか大人びてるから年上かと思ってたわ……」

隣で口をポケーツと開けるクラスメイトに苦笑しながら、レティアはペンケースを自分の鞆の中に入れる。

テスト用紙の回収が終わり、教卓の上で眠たそうに枚数を確認したジヨブが「はい、じゃあ授業終わり、おつかれさん」と言うとき、チャームを待たずに一斉にクラスメイトたちが席を立ち、テストの出来具合や放課後の予定などを話し始める。

「来るんだろうなあ、来ちゃうんだろうなあ」

「レティ、出来栄はどうだったかしら？」

「やっぱり……」

「な、人の顔見るなり何よ!？」

目の前に仁王立ちしたレティナを見るなりレティアは小さくため息をつく。

「で、何よ？」

「だから、どれほどできたのか、と聞いているのよ」

競争心の強いレティナは事ある毎にレティアと張り合う。そういう事が全く関係ないところでは普通のクラスメイトなのだが、とにかくテスト、競技、その他諸々の事になると目の色を変えてまさしく燃え盛らんばかりの対抗心を胸に全力を出している。

「まあ、悪くはないと思うわ」

「ふふ、その様子では今回は私の勝ちね。先週末から勉強したんだから」

「いや、今週初めに出たプリントの範囲は？」

「もちろんやったわよ。クラストップも夢じゃないわ」

「ほお、言うじゃない」

拳を強く握りしめてガッツポーズを決めたレイナに、レティアはニヤリと笑みを浮かべ、鞆に入れていた問題用紙を机の上に出す。

「それじゃ、答え合わせと行こうじゃない」

「ええ、良いわよ」

前の席に誰も座っていない事を確認してレイナは椅子の背もたれを掴むと180度回転させてレティアの机に向けるとそれに腰を下ろす。

そして自分の問題用紙をレティアの机に置くと、お互いにザッと見比べる。

「……見た感じ、同じね」

「ええ、だけど、同じ問題を間違えている、という可能性もあるわ」

「そうね、それじゃ問1から見ていきましょうか」

採点がされて生徒に返されるのには大体数日かかる。

その間も当然授業で内容は進んでいくため、ジョブの授業では解答用紙が返されてから復習していると時間が足りないのだ。そこで大概の生徒は宿題が出されない今日の内に答えあわせをしておき、点数だけ待つという状態にしておくようにしている。当然、レティアたちだけでなく、教室には友人同士で答えあわせをしている生徒がチラホラ見受けられる。

自己採点するためには当然ながら問題用紙にも答えを書き写しておく必要があるが、それさえやっておけば自分の点数は返される前に大体予想することが出来る。ジョブは問題用紙に配点を書かないが、最後の長文問題の方が配点が高い事を考慮しておけば、大方の見当はつく。そうでなくとも1年近くジョブのテストを受けていれば配点の特徴も頭に入る。

「そつえば、町で一悶着やったんですって？」

「え？ ああ、あれね……、レينا、ここ合ってる？」

答えあわせをしていると、レيناが顔を上げずにレティアに声をかけてきた。

「合ってる……と思うわ。フランさん、カッコ良かったって噂になってるわよ？」

「話題にはなるでしょうね……」

街中で不良3人をコテンパンにしたのだ。同じ学園の学生である以上、その話題が出ないはずもなかった。朝から絡まれた事を心配するクラスメイトや詳しい事を聞こうと生活指導の先生とも一言二言

会話しているレティアはため息をつきながらそれに返事をする。

「あいつら、武術やってるから誰も怖がって注意できなかったのに、フランさん、一瞬で倒したんでしょう？ やっぱり、主を守る従者って感じねえ」

「フランはいつだってあたしを守る事を第一に考えてるわ。……まあ、おかげで加減なんてしてなかったみたいだけど」

「その方が良いじゃない。それだけレティを守ろうっていう意志が強いってことでしょう？ 羨ましいわ、お姫様を守る騎士って、きっとフランさんみたいな人の事を言うのね」

何やら1人トリップしているレイナは放っておくことにして、問題を見比べながら解き直していく。

「そして騎士はお姫様に恋をするのよ、でも身分違いの恋は実らない。だから2人は駆け落ちの道を選ぶ！」

「……あ、レイナ、ここ間違ってる」

「なんですとっ！？」

その一言でレイナは現実世界に引き戻された。

「ただいまー」

「お帰りなさいませ」

レティアが家に戻ると、玄関先で箒を持って掃除をしていたメリスと鉢合わせした。今日は1日事務処理に追われるとグラントから聞いていたレティアは箒の柄を持ち玄関の扉を開けるメリスに視線を向ける。

「デスクワーク終わったの？」

「いえ、まだ少し残ってますが、身体を動かさないで1日机に嚙り付いているのも健康に悪いですから。息抜きに出てきたんです」

「なるほど」

屋敷に入り、メリスは玄関の脇に箒を置くとレティアの鞆を受け取る。

「ああ、お嬢様お帰りなさい」

「ただいま、クレア」

クレアが廊下の先から顔を出し、レティアを迎えたのでレティアがそれに応える。

「夕飯までまだ時間がありますから、紅茶でも淹れましょうか？」

メリスの問いにレティアは少し考え込んでから顔を上げ、それを了承する。メリスは鞆をクレアに手渡して調理場の方へ向かっていった。

「あれ、フランは？」

そこでレティアはいつもいるはずのフランがこの場にいない事に気が付き、辺りを見渡す。よく考えればグラントもレティアを出迎えていない。

隣にいたクレアに視線を向けると、何とも言えない複雑な表情をしている。

「フランはちょっと体調が優れないみたいで、部屋で休憩しています。夕食までには復帰するそうです。グラントは今丁度フランの様子を見に行ったところです」

「体調が？ 朝は見た感じ元気だったけど」

「お昼前に顔が悪くなって、様子見ですから大したことはないで

すよ」

クレアの言葉に一応は納得してみせるが、出会ってこの方病氣にかかったところを見たことがないレティアは何かあったのではないかと勘繰ってしまう。

だが、それならレティアの耳に入れても良いはずだ。本当に大したことが無いからあえてレティアの耳に入れる事もない、と判断したのだろうか。

「……そう、あまり無理はしないように言っておいて。後、夕飯になっても出てこれないのであればあたしも様子を見に行くわ」

「分かりました」

ブレザーを脱ぎ、椅子の背もたれに引っかけるとその椅子を引き、とりあえず腰を下ろす。

時を置かずして調理場の方からメリスが紅茶の入ったポットとティーカップをお盆に乗せて現れ、音もなくレティアの席の前に置く。

「フランが調子を崩してるんですって？」

クレアもいるが、あえてメリスにそう尋ねてみる。

「ええ、大事を取って休憩させましたが、熱もありませんから風邪というわけではないでしょう」

メリスは表情を崩さずレティアの問いに滑らかに答える。それはクレアの言っていた事を補完するには完璧な答えだったが、どこか釈

然としない気持ち心が心の中に残ってしまう。

（気のせい、だよな？）

帰ってきたらお礼を言おうと思っていたが、今はお預けになってしまったようだ。

「お嬢様がお帰りになったようですな」

「そのようだな、だが無理をするんじゃないぞ」

玄関の扉が開いた音がして時計を見上げれば、丁度レティアが帰ってくる頃合いだ。その後物音が重なりあつて聞こえてきたためレティアが帰ってきたのは間違いないだろう。

フランは風呂から上がった後も顔色が良くはならなかった。午後は仕事が無かったため部屋で横になる事にしてレティアが帰って来る

までには仕事に復帰しようと思っていたが、夢を見た後から身体に残る鈍痛が尾を引き結局この時間まで様子を見る事になってしまった。

身体に異常がない事は自分が一番分かっているのだが、にも関わらず関節痛のようなものが身体の節々で悲鳴を上げている。動かせない事はないのだが、レティアの前で険しい表情をして心配させるのも嫌なフランはどうしようか迷っていた。

「ふむ、夢のせいで調子を崩しました、と言うのも心配を助長するからなあ」

「すみません……」

「フランのせいではないだろう？ 精神と肉体は絶妙なバランスの上に成り立っているものだ。どちらかが少しでもバランスを崩せばその影響は反対側にも簡単に広がる。気分が滅入れば体調も優れなくなるさ」

グラントは笑みを浮かべながらベッドに腰掛けるフランを見つめる。

「とはいえ、このままな訳にもいきません。夕食までには戻ります」

「分かった。そのように伝えておく。だが本当に無理はするなよ？」

立ち上がり部屋の扉の方に歩くグラントは最後にそう付け加える。

まるで父親のようだ。

相変わらずのその態度にフランは苦笑しつつも小さく頷く。

グラントはそれを見て頷き返し、それから扉を開けて仕事に戻っていった。

部屋にはフランだけが残され、1人になったフランはベッドに上半身を投げ出す。ベッドがフワリと投げ出されたフランの身体を受け止め、フランは天井を見上げる。

「全く、面倒な身体です」

自分の肩に手を置き、軽く揉むとおかしな所に力が入ってしまっていたのか肩の筋肉が硬くなっていた。それを揉み解しながらフランは夢のせいで体調を崩すという自分の気持ちの弱さのため息が出てしまう。

「このくらいで根をあげてどうするですか。そんなんでメイドが務まりますか」

自分に言い聞かせながら、フランは起き上がり、大きく深呼吸をする。

「お嬢様にまで心配をかけるなんて、メイド失格ですよね」

立ち上がり、服についた皺を手で軽く伸ばす。

冷や汗のおかげでぐっしり濡れていたメイド服は洗濯に回され、今はパリッと乾いたメイド服を着ている。眼帯も汗で付け心地が悪くなっていたが、しばらく机の上で干しておいたのでだいぶ水分は飛んで乾いている。

服と違って眼帯はそう度々洗濯できない。

これは予備もなく、フラン自身これしか身につけたくないと思っている。レティアがくれた、フラン生まれて初めてのプレゼントなのだから、いつも身に着けていたいという気持ち強いのだ。

それに、眼帯こゑがあれば本当の自分を知られずに済むような気がするのだ。

傷つき、醜い自分を、明らかに普通ではない自分を、周りの人から知られずに済む。もちろん、屋敷の者はその対象にはならないが、この眼帯がそういう意味で人が思っている以上に大切なものであることに変わりはない。

「さて、仕事に戻らないと、駄目ですよね」

立ち上がり、机に眼帯と共に置いていたアフエシアスをガンベルトと一緒に手に持つ。外していたウィッグも付け直し、そのままガンベルトも腰に巻き付けながら扉に向かう。

その時、不意に鋭い頭痛がフランを襲った。

「っ！？」

ほんの一瞬の事だったが、その痛みはフランの平衡感覚を狂わせ壁に寄りかからせるには十分な威力があった。

「これは、さすがにキツイですね……」

こめかみの辺りを手で摩りながら、「痛い痛い飛んでけー」と

1人で眩き、せめて気持ちだけでも前を向かせようとする。

「ふう、とりあえず、夜までもてばいいですか」

部屋を出てダイニングに向かうとレティアが紅茶を飲みながらグラントと会話をしていた。もう間もなく夕食の時間になるので、調理場の方から美味しそうな匂いが漂ってきている。

「すみません、ただいま戻りました」

「フランチ、体調崩したって聞いたけど、大丈夫なの？」

レティアとグラントに向かって声をかけると、レティアが慌てて立ち上がってフランチの目の前に駆け寄ってきた。手をフランチの額に当て、すかさず自分の額にも手を当てて体温を比較する。

「熱は、無いみたいね。だけどあなたが体調崩すなんて、初めて？」

グラントから話は聞いていたようだが、自分の目と肌で感じなければ安心できなかったのだろう。フ란の体温を確認したレティアは傍から見ても分かるくらい安堵して肩の力を抜いた。

「そうですね、でももう大丈夫です。ご心配をおかけしてしまい申し訳ありません」

「良いのよ。家族を心配して何がおかしいのよ」

フ란の様子を見て安心したレティアは笑顔でフ란を見つめながら椅子に座り、紅茶を一口啜る。

「あ、そうだ、フ란にお礼を言わなきゃいけないんだった」

「お礼、ですか？」

思い出したようにレティアが手を叩き、隣にフ란を招きよせるとテストの問題用紙を取り出し、机に置き、そこに書かれている数字を自慢げに指差した。

「どうよ、8割以上できたわ。点数はまだ分からないけど、フランがいなかったらここまで点数伸ばせなかったかもしれないの。だから、ありがとう」

問題用紙にはレティアの字ではない字体で「84%」と書かれていた。その横に小さく「まぐれよ、まぐれ」と書かれているのが些か気になるが、それはともかくとしてフ란もレティアが自分のおかげで頑張れたのは嬉しい事だ。少し照れながらも笑みを浮かべる。

「それは何よりです、お嬢様。一夜漬けになってしまったところも多かったですが、何とかなったようで良かったです。これからはもっと余裕を持って対策をしましょうね」

「うぐっ、それを言われると反論できないわ……」

レティアの勉強がはかどらなかったのには範囲が広い事もあったがテスト前日の昨日まで遅々として進まなかった事も理由の1つだ。何とかなるだろうと高を括っていたようなのだが、存外難易度が高く、フ란の頭脳を借りつつ何とか日付が変わる前に形にした、というのが現状だ。

先週末の休日にしっかりやっておけば、こうはならなかったはずだ。

「あら、フ란起きて大丈夫なの？」

調理場の方からクレアとメリスが現れ、フ란を見つけると持っていたトレーをテーブルに置いて3人の元にやって来た。

「心配をおかけしました、メイド長。ですが、とりあえずもう大丈夫ですので、仕事に戻ります」

「それは良かったわ。それじゃあ、クレアと一緒に夕飯を運んでくれるかしら？ グラント、食器を」

笑顔でフ란にそう言うと、テキパキと仕事を伝えていく。

フ란は指示に従ってクレアと共に調理場へ向かう事にする。調理場に行くすでに今日の夕飯が台車に乗せられた状態で待機されて

おり、デックスはフランとクレアが来たのを確認すると持っていくものを指差して運ぶよう示した。

「それじゃ、クレアはそっちを」

「了解、ってこっちの方が多いじゃない……」

フランが運ぼうとしている方と見比べて不平を漏らす、それでもしっかりと持っていくのはクレアの芯は真面目であるという証明だろう。

「はあ、おっとっと」

危なっかしい声と共にクレアが夕飯の乗ったトレーを運び出していくのを笑いを堪えながら見送った後、フランは自分が運ぶ分のトレーを持ち上げようとする。

「フラン」

「のわっ」

不意に声をかけられ、持ち上げようとしたトレーを慌てて台車に戻す。

「デ、デックスさん、いきなり声をかけないでくださ……なんです
か、これ」

振り向いてデックスの方を向くと、デックスが小さな袋をフランの顔の前に差し出してきた。それをマジマジと見ながらフランは尋ねる。

「頭痛止めた。よかつたら使え」

「あ、ありがとうございます」

デックスが喋る所を久しぶりに聞いたフランはデックスの重みのある声に聞き惚れながらも袋を受け取りそれを素早くポケットに入れるとトレーを持って調理場を出る。

（やっぱり、この屋敷の人は善い人ばかりです）

片手でトレーを持ち、ポケットに入った袋の感触を確かめながら、フランは人知れず頬を緩めていた。

第11話 メイドは体調管理が必須（後書き）

デックスが屋敷で喋ったああっ！

はっはっはっ、彼だって人間ですよ？ そりゃあ喋りますよww

さて、今回は前回の余韻のせいで明るくならなかったかと思いますが、シリアス続きだと主にハモニカの精神が減入るので早々に切り上げて話題を変えましょうかね。

鈍痛鈍痛鈍痛鈍痛

感じないわ

じゃないんですからww

あれ、ハモニカは何度聞いても「鈍痛」としか聞こえないんですがねえww

まあ、そんな話はどうでも良く（いいんかいw）、また次回お会いしましょう。

誤字脱字報告、ご感想お待ちしております。

第12話 メイドは指名制ではありません（前書き）

うむ、もはや何も言いません。

では、どうぞ。

第12話 メイドは指名制ではありません

「ええと、これはいったいどういう事でしょうか？」

今、目の前に広がる光景を目の当たりにしてフランはその言葉を絞り出すのが精いっぱいだった。あまりに信じられない光景のため、どこか現実逃避しているのかもしれない。

「うむ、良い質問だ、フラン。これはな、人間が起こした巨大な火球によって燃え尽きた荒地というのが一番適切だろう」

「グラントさん、そういう事を聞いているではありません」

隣のグラントすら、ここではないどこかを見つめているような表情をしている。

それもそのはず、昨日まで何の変哲もない庭だった屋敷の目の前が、土の露出した荒涼とした大地になってしまっているのだ。それも、春先で冷える靴底に温もりが届くくらいの熱気を持って、だ。

「消火するより、上から土かけた方が早かったから、ですか？」

「……うむ」

「……で、当のお嬢様は？」

「お部屋で横になっている。怪我はないが、煙を吸われたようだな。」

クレアが面倒を見ている」

「なら良いんですが……」

事の発端は数時間前に遡る。

休日という事で昼間から庭で実技の練習をしていたレティアだったが、作り出した火球の操作を誤り、芝生がある方向に火球が飛んでいったのだ。そして春先の乾いた空気も後助けであつという間に炎が広がるうとしたため、グラントがとつさに土で炎をもみ消したのだ。

クレアも慌てて水を操り庭に出てきたのだが、その時には白い煙を吐き出す土の山しかなかった。

消火は一応完了したのだが、とつさの事で後先を考えなかったグラントは庭の土をハチャメチャにしてしまい、ようやく平坦な庭になったのは良いが芝生も何もかもが混ざり合ってしまった、手入れのされていない庭のような状況になってしまった。

そして土は未だに熱を帯びているようで、若干靴底が温かく感じられるのは先ほど述べた通りだ。

「で、これ、どうするんですか？」

「もちろん綺麗にするんだが、ただ元通りにするのではなく、この際大規模な改装をしようと思う」

「年末にするものじゃないですか、それ？」

「丁度そろそろ年度末だ」

グラントはそう言うつと脇に抱えていた大きな白い紙を運び出したテーブルの上に広げる。丸めていたため端がクルリと丸まるので重しに小さな石を置く。

紙には直線や曲線が無数に書き込まれており、それがすぐにこの屋敷の敷地を現している事が分かった。

「設計図ですか、すごく細かい……」

「陣地構築は白兵戦の第一歩だ」

「そこで軍隊経験持ってきますか……」

ニヤリと笑みを浮かべながらグラントはそう言うつと、胸ポケットからペンを取り出し、設計図にペンを走らせ始める。

「基本的な配置は決まっている。しかしデザインなどに関してはこれから決めていくつもりだ。できれば夕方までに終わらせたいところだが……」

「ですね。基本的な配置は前と変わらない感じですけど、池の傍にあるベンチに日差し避けでもつけてみては？」

やはり、大きなもの、例えば池だが、そういったものの配置を大きく変える事はないようだ。池は日当たりのよい場所で周りがひらけている方が管理しやすい。

「ふむ、屋根付きか。それくらいならどうとでもなるな」

グラントは設計図上のベンチに矢印を書き、その先に「屋根付き」と走り書きしていく。

その後も大まかな所を決めていき、それが全て済むと実際に設計図を持ってグラントが土を移動させ始める。池を作る場所はへこませ、その縁を盛り土にして体裁を整える。芝生に関してはすぐにどうこう出来るものではないため、注文して専門の業者から取り寄せる必要がある。

そのためそれ以外の所は出来るだけ終わらせておく事にする。

地面が滑り、池の周りや底に敷き詰める石を運び、消火の際に動いた土で随分と遠くまで動いていたベンチも定位置に戻される。

その間にフランは物置から必要な工具を持ってきてベンチの上に取り付ける屋根を作り始める。設計はグラントが細かい所までしっかりやってくれているのでフランは図面に従って木材を切り分け、組み合わせれば良いだけの話だ。

「あら、さっそくやってるのね」

庭先で金槌片手に木材と木材を繋ぎ合わせていると、メリスが様子を見に来た。

「メリス、お嬢様の様子は？」

「クレアが見てるけど、大丈夫よ。今は大人しく横になってるわ。私は少し出かけるから、屋敷を頼むわよ」

メリスはそう言う手を持っていた大きめの封筒をヒラヒラと振ってみせる。

事務処理を担当しているメリスは屋敷の出納も管理している。グラントは自分の家の事があり、フランは過去の記録を覚えていられるか不安、クレアは書類を紙飛行機にしかねないので却下、だそうだ。こうして考えると事務処理の全般を引き受けられるのはメリスしかないのかもしれない。

グラントも時折手伝ってはいるが、その場で解決できる書類が多いそうだ。やはり時間をかけて作る必要のある書類はメリスに頼るしかない。

（とはいえ、クレアが真面目にやれば良い気もするんですよ……）

金槌を置き、釘がすっかり頭まで入った事を確認して、次の木材を切り出しにかかる。すでに製材になってはいるが、細かい寸法は決まっていないため組み合わせる継ぎ目や穴は自分でやらなくてはならない。フラン自身、こういう作業するのは初めてだが、何をやれば良いのかはつきりしている作業は楽だ。おまけに正確な図面まであっては、間違える要素がない。

鑿^{のみ}で長方形の穴を手早く掘り、それに合う様に凸型の木材を作る。

「その調子じゃ、夕飯までには終わりそうね。ああ、これを出しに行くついでに花屋で幾つか注文しておくわ。芝生もそのつもりだから」

「分かりました。行ってらっしゃいです」

メリスはグラントと何がどの程度の数必要なのか口頭で軽く相談すると出かけていった。

「グラントさん、ベンチの柱用の穴開けておいてください」

「分かった、何メートルだ？」

「ええと、図面だと1メートル弱になってます」

地面に丸い穴が開けられ、その中に平べったい木材と石が放り込まれて土台が完成する。ベンチは今度グラントが立っている場所に配置される予定で、テーブルも同じ場所に置かれることになっている。

「よし、こんなもんですか。あとは屋根ですが……」

屋根ばかりは骨組みを実際に組み立てなければならぬ。グラントに必要な材木の製作と細かい部品の取り付けが完了したことを伝え、フランの足元がズズツと動いてそのまま材木がグラントの下へと運ばれていく。

「よし、問題はなさそうだな。手早く片付けよう」

「分かりました」

土が波打ち、横になっていた材木が土で出来た拳によって掴まれて先ほど開けた穴にストンと落とされる。それを4回繰り返して骨組みとなる4本の柱が立てられ、続いて柱同士を繋ぐ木材が持ち上げられる。

「フラン、頼んだぞ」

「了解です」

土製の拳が柱と柱の間に木材を持ち上げ、その拳を器用に上るとフランは足場を確認しつつ木槌を握りしめる。

「もう少し右です。……行き過ぎです、左に5センチくらい」

間近から柱の位置を見て下にいるグラントに指示を飛ばし、柱の凹凸がしっかり組み合わさる様に調整する。

「そこ！ そのままゆっくり下におろしてください」

加減を間違えれば容易く木材が折れてしまうため、慎重に木材を柱の上に乗せ、凹凸が合っている事を確認してからフランは木槌を振り上げ柱の上に叩き付ける。

木槌に叩かれ木材同士の凹凸がかみ合わさり、フランは1回毎に左右均等に叩く。それを数回繰り返すと柱同士が隙間なく組み合わさってピクリとも動かなくなる。

「次、お願いします」

「よし来た」

フランの掛け声で、土の拳はまた1本、柱を持ち上げる。

日も傾き始めた頃、ようやく全ての作業が終わった。

終わったといっても地面はまだ土が露出しているし、庭を飾る植物もほとんどない。ある程度の大きさがある木は生き残っているのだが、春先で緑は少ない。

「終わった」

「お疲れさん」

完成した屋根付きベンチに腰を下ろして天井を見つめっていると、グラントが隣にやって来てコーヒーを差し入れてくれた。マグカップを受け取り、一口啜ると喉の奥にコーヒーの苦みが染み入って何とも言えない心地よい気持ちになる。

「あゝ、仕事の終わった後の一杯は格別ですね」

「親父くさい事を言うな。だが仕事は終わってないぞ？」

「分かってますよう。お嬢様も起きられた事ですしね」

マグカップから立ち上る湯気越しに、フランは一通りの作業が終わった庭を見渡す。

池には既に水が引かれ始めており、まだ溜まっていないために石が水が叩く音が聞こえる。水はクレアをお願いして地中を通す形になっており、流れた水を循環させる事で動きを作り出している。水の汚れはグラント特製の天然土によるろ過装置によって綺麗にされる。さすがに今は人工のろ過装置を地中に埋めても良いのだが、グラントはそんな物の必要性を皆無にするほど性能の良いろ過装置を作る事が出来るため、時折他所でも仕事を請け負っているそうだ。

「そういえば、具合は大丈夫なのか？」

「ほえ？ ああ、あれはもう大丈夫です。デックスさんから痛み止めも貰ったんですけど、寝たら治りました」

先日の鈍痛は既にある。違和感はまだほんの少し残っているが、気になるようなものでもない。あの時は病的なものすら疑った冷や汗はいつたいたんだっただのか、と思えるほどだ。

（あ、そういえばまだ調べものをしていませんでしたね）

話題がその事になってフランは自分が何かを調べようとしていた事を思い出した。

「グラントさん、少し、質問しても良いですか？」

「うん？ どうした、急に？」

「エネア、という言葉に聞き覚えはありますか？」

コーヒーを啜り、そう尋ねるとグラントが一瞬顎を撫で、唸り声をあげる。

「エネア……、この国の言葉じゃないな。昔の言葉か、外国で使われている言葉の可能性があるな。メリスに聞くのが手っ取り早いと思うぞ。メリスは言語に長けているからな」

自分の記憶と照らし合わせているようで、エネアという言葉を呟きながら考えに耽っている。

「そうですか、ありがとうございます」

ベンチを立ち上がり、コーヒーを一気に流し込むと、身体がポカポカと暖まっている事に気づく。グラントに礼を言ってから、フランはコップを持って屋敷に戻る事にした。

メリスは先ほど外出先から戻ってきている。

それならばおそらく自室にいるだろうと思ってフランはメリスの自室兼事務室のようになっている部屋へ向かい、その扉を数回ノックする。

すぐに室内から返事が聞こえてきて、扉が開くとメリスが姿を現した。

「あら、フラン、どうしたの？」

「すみません、少し聞きたい事がありました」

フランがそう言うのとメリスは中に入るよう促し、フランを室内に招き入れる。

メリスの部屋は寝るためのベッド以外個人的な物がほとんど見受けられないほど、生活感を感じさせない場所だ。窓の前に大きな事務用の机が置かれており、基本的にメリスは部屋に入ると扉と机の往復しかしていないように思われる。ベッドはいつ見ても皺一つない綺麗なシーツがかけられていて、使っているとは思えないほどだ。

ベッドとは反対には大きな本棚があり、工作上必要な本は全てここに収められている。時々クレアから没収した漫画が収められている事があり、フランに奪還要請が出る時すらあるが大抵は拒否している。

「それで、聞きたい事って？」

事務仕事をする時、メリスは眼鏡をかけている。今も丁度仕事の真っ最中だったのか、フランを部屋に招き入れると自分は机の前に座って細かい字がびっしりと書かれた書類にペンを走らせ始める。

「ええ、エネア、という言葉聞いたことはありませんか？」

ペンを走らせるメリスは、「どこかで聞いたことがあるわね」と呟きながらも書類からは視線を放さず、その書類にサインをするとペンを置き、立ち上がって本棚の前進んでいく。

「外国とかの言葉ですか？」

「いえ、この国の言葉よ。だけど随分と昔よ、確か……この辺に」

本の背表紙を指でなぞりながら、メリスは何かを呟いている。どうやら本のタイトルを呟いているらしく、その言葉と一致する本を探しているようだ。

「古語辞典は確か……ああ、あつたわ」

本棚の端の方に収められていた分厚い本を取り出すと、フランを手招きして自分は机の前に立つ。辞典を机に置くと、ページを捲りながらお目当てのページを探し始める。

「エ、だから最初の方よね。えーと……」

古語辞典だけあって、捲られていくページに載っている言葉には全く聞き覚えのないものが多い。そんな中でメリスはページを捲る手を止め、指でページ内の言葉を1つひとつ確認していく。

「あつた、エネア、は数字で『9』を意味する言葉よ」

「え……」

メリスの言葉に一瞬フランは固まる。

「ほら」

古語辞典を手渡され、メリスはそのページの中央付近を指差した。そこには確かに「エネア」の意味で「9」という説明が書かれている。

（エネアが『9』………もしや）

自分の腕を無意識に握り、夢の中の記憶を思い出そうとする。

（あれは、あたし………？）

だが記憶にない。

1年前より過去の記憶がないフランに、その真偽を知る事は出来ないが、もしそうであるのなら、あの異様にリアリティのある夢の内容にも納得がいく。

「フラン………？」

メリスが怪訝な顔をしてフランの顔を覗き込んでくるが、フランはそれを無視して頭の中で考えを目まぐるしく回転させる。

（仮にアレがあたしの過去だとして、あたしはどうしてここにいる？ あんな場所なら、普通は外にも出られないような気がしますけど………）

あの夢の中で、フランの過去であると思いき少女は嚴重に拘束されていた。そんな状況を打破できたとは到底思えない。

（確か、あの女性は何か言っていましたね、ええと………）

しかし、肝心のその言葉を思い出そうとするも頭に霞がかかったようになっけししまい思い出せない。

「フラン、一体どうしたの？」

「あ……、すみません、少し考え事をしていたもので。ありがとうございます、助かりました」

本をメリスに返すと、足早にメリスの部屋を後にしようとする。

「フラン」

それをメリスが呼び止め、フランが振り返ると目の前にメリスが立っていた。

「メイド長？」

メリスは優しくフランの肩に手を置き、ニッコリと微笑む。

「何か相談があったらいつでも乗るから、言ってね？」

きっと、内心フランの様子が気になってしょうがないのだろう。今すぐにでも、どうしてあんなことを聞いたのか問いただしたい気持ちもあるだろう。

だが、あえて自分からは聞かない。フランから言ってくれるのを待つつもりなのだろう。

メリスの一言からそんな思いを感じ取ったフランは、小さく頷き、メリスの眼をまっすぐに見つめる。

「分かりました、メイド長」

まだ、可能性の域を出たわけではない。今は、まだ言うには時期尚早かもしれない。

フランはメリスの心配りに感謝して頭を下げると、部屋を後にする。

（とはいえ、何も分からない状況から一歩前進しましたか……）

廊下を歩きながら、自分の腕を擦る。メリスから「エネア」の言葉の意味を聞いてからどうにも違和感を感じるような気がする。

（ともかく、情報が足りませんね。……そうだ、旦那様なら何か知っているかも）

クラウド・ファルケン、レティアの父親でこの屋敷の主、大臣としてこの国の政治に長く携わっている彼なら、何か知っているかもしれない。

最近はまだ屋敷にも戻ってこない事から多忙なのだろうが、今度帰って来た時にでも聞いてみる事にしよう、とフランは決めてポケットからメモ帳を取り出すとその事を書き込んでおく。

「……よし、と」

「あ、フラン、こんなところにいたの？」

メモを書き終えたのとはほぼ同時に、廊下の突き当りからクレアが現れ、フランを視認すると駆け寄ってきた。

「お嬢様がご指名だよ。まったく、探したんだから」

「お嬢様が？ 何かあつたんですか？」

「まあ、行けば分かるよ」

「？」

クレアに背中を押され、レティアの部屋まで誘導されるとそこでようやくクレアは背中を押す手を放し、「それじゃ後は頼んだ」と言い放って廊下の先に消えていってしまった。

訳が分からず首を傾げつつも、レティアを待たせるわけにもいかなないので扉を軽くノックすると部屋の中に入る。

「お嬢様、ご用でしょう、か……？」

「フラン！ 救援要請よ！！」

入った途端、レティアがフランに飛びついてその胸倉を掴むと鏡の前に引つ張り、自分は椅子に座る。

その頭は理解不能なまでに力オスな空気を発している。

「ええ、と、お嬢様、一応聞きますけど、どうしたかったんですか？」

「……三つ編み」

「三つ編みは3本の髪の毛でやるものじゃありませんよ？ ていうかこんなに器用ならどうしてこうなるんですか」

想像してみて欲しい。

わずか3本の髪の毛で三つ編みを作ろうとして、それが無数になっている光景を。

それがどれほど理解しがたいものかは、容易に想像できるだろう。

「なぜ、こうしようと……?」

「クレアに髪型変えてみれば、って言われたから試しにやってみたのよ……」

「そのやり方で何度同じ間違いを繰り返してます?」

「う、うるさい! お黙れ! さっさと元に戻してよ! 自分じゃ戻せないのよ!」

「本当にどうやったんですか?」

指先で何とか三つ編みを解こうとするのだが、あまりに細かすぎてなかなか思う様に出来ない。おまけにレティアが悔しいのか悲しいのか地団駄を踏むので頭が動いて集中できない。

「クレア……恨みますよ」

逃げ出した言いだしっぺに、フランはそう悪態をつくしかできなかった。

「早く!」

「あ、はい、すみません……」

第12話 メイドは指名制ではありません（後書き）

はいはい、どーも、ハモニカです。

グラントが地味にドジ属性を身に着けかけてしまいましたが、そんなものは撃ち碎きますw

カッコいいおじ様がドジっ子とかいろいろ気持ちも悪いですしねw
と、ハモニカのオヤジ趣味を出す場所ではないですね。

中盤のシリアスを吹き飛ばすために最後のをやりました。

はい、頭は良いけど手先が不器用。

そんな感じで行きます、彼女は。

ああ、それと遂にですね、応募キャラが次回出てきます。

依然応募は受け付けておりますので、ガンガン送って下さい。

ただ、設定どおりのキャラになるかは疑問符がたくさんつきますけどね！

では。

誤字脱字報告、ご感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5890z/>

銃と魔法と眼帯とメイドモノ！

2012年1月13日17時59分発行